

退野は肥後の人。名は久成。細川侯の世臣、寛延三年歿す。年七十四。

幸隆類題和歌集

一 卷

松井幸隆

三玉集の風調の歌多し。類題となし明和六年橋持之上木す。◇幸隆は中院通茂の門。愚問賢註六窓抄の條を参照。

隣松集

寫七卷

伊達吉村

續隣松集

寫一卷

同

一名を獅山公御集といふ。部立あり。別に獅山公御集といふ巻物二軸伊達伯爵家にあり。巻軸には櫻町天皇の歡覽に供し奉りたる歌を收む。◇吉村は仙臺侯、元祿八月網村の養子となり、同十六年家督をつぎ陸奥守といふ。後四位左中將となる。寶暦元年卒す。年七十年。獅山公と諡す。

芦の下根

寫一卷

同

父侯に後れたる當時より百ヶ日に至るまでの自詠及贈答の歌を含む。

藤原朝臣吉村公御詠歌

毎家有春を詠める「もろ人も一つ心に樂しむや誰か宿わかぬ春を迎へて」以下心靜延壽に至る百首。中に中院大納言通茂卿添削九十八首あり。仙臺叢書第四卷に收む。

海北若冲歌集

寫一卷

一名を岑柏集といふ。契沖の加點の歌を集め部立せるもの。佐々木信綱氏一本を藏す。『暮れてゆく年をはかなみ惜めどもさすがに春を待たずしもあらず』の如き詠あり。◇若冲は契沖の門。萬葉師説、萬葉類林を著す。寶暦

元年歿す。年七十七。

荷田在滿歌

寫一卷

村田春海の集めたるもの。その數多からず。『遙かなる山のはつかに残る日のかけもしぐるゝ雲の一村』の如き新古今を理想とし、後京極攝政の詠を標的とせし歌學説にうらづけらるゝ歌風なれど多く傳らず。◇左滿は寶暦元年歿す。

小槻知音詠草

一 卷

寛延二年年内立春を詠める「山端ものどかにみえて年の内に二たびかすむ春は來にけり」以下寛延三年、寶暦元年同三年までの詠を收む。自筆本京都大學にあり。

板倉勝任詠草

寫一卷

冬月の歌以下二百十二首を收む寶暦二年十七才の時の詠草なり。◇勝任は福島藩主、明和三年卒す。年三十一。「秋よりも光ぞまさる冬の夜の空にこぼるゝ有明の月」の如き歌風なり。

正容詠草

寫一卷

木村左膳

寶永初年頃の詠草を集む。冷泉澄覺の加評あり「分け來つる雲も幾重の山櫻おもかけ匂ふ花をしるべに」の如き詠あり。寶暦初年の寫及寛政十一年成島和鼎寫本あり。◇正容は與力にして駒籠に住せり。

文 布

二 卷

倭 文 子

歌文の遺稿にして、始に伊香保の道行ぶり(紀行)ゆきかひ(消息)を擧げ、次に散り残りとし歌を收め、終に草

の露とし追悼の歌文を載す。寶曆八年村田春道の序あり。眞淵が「父のみの父にもあらず」云々の佳作はこの蕾の花の空しく散りしを悲しみたるなり。◇縣門三才女の一。京橋の油谷氏の女、寶曆二年に死す。年二十。

和歌水蓮集

寫一卷

山本格安

短歌僅に五十五首、拾遺若干首あるのみ。寶曆四年端書の歌見ゆ。上野圖書館に一本あり。自筆稿本なり。◇格安は通稱伊兵衛、江戸の人。天野信景に學ぶ。六書に委しくまた數學に長ず。

自然齋玄無法師歌集

三卷

素直なる詠さまの歌多し。中に「思ひ寝の心の花にしをりして夢にわけ入る三吉野の山」の秀吟あり。文久元年川喜多政明上木し、終に政明が祖父潭空の詠藻を附録す。◇玄無は津の人、川喜多氏。名は光盛、通稱久太夫。享保七年家を弟に譲り京都の千代の古道に通る。武者小路實陰卿の門下にして寶曆五年寂す。年七十一。

三位尼公御詠歌

寫一卷

冷泉爲村卿の加點あり。寶曆四年編む。

浪玉集

寫一卷

河野通喬

卷頭「長閑しなまだ夜をこめて鶯の聲にあげゆく逢阪の關」以下部立あり。梅月堂香川景新點及松井一學政豊朱點あり。一本水谷川男爵家にあり◇通喬通稱金次郎、常憲公に仕へ、後元文二年勘定奉行に任ぜらる。從五位下豊前守に叙せられ、寶曆六年卒す。年六十四。法名元節。

花影集

寫六卷

伊達宗村

部立あり。一名を忠山公御歌集といふ。正續各三本。明和壬辰之冬後月田邊希文の漢文の跋あり。一本伊達伯爵家にあり。◇宗村は仙臺侯吉村の子四位中將となり寶曆六年卒す。年三十九。忠山侯と謚す。

舟山國雅

寫一卷

櫻井良翰

卷首に享保二十年仲春城崎にて含翠子に従ひ初めて學ぶ時旅窓春月の題にて「えならずよ千里の外の色も見才霞こめたる春の夜の月」以下歌數多からず。自筆本櫻井勉氏藏す。◇良翰は但馬出石の藩儒、伊藤蘭嶋の門に入る。但馬考の著あり。寶曆七年四十一にて歿す。

龜藏家集

寫三卷

明石景文

「深山人の春に折しる人もなしをどろが下にもゆるさわらび」以下部立を設けてその歌を集む。男景興の跋あり。自筆本上野圖書館にあり。◇景文通稱龜藏。梁田公美に遊び明石藩の文學たり。寶曆九年歿す。年廿五。

三代のなみ

寫一卷

成島信遍

享保の始冷泉家江戸下向の時入門の歌より、養母の死を悼む歌などを集む。長歌は唯一篇に過ぎず。當流の型を守れる作風なり。文化十三年江戸名所圖繪の作者齋藤縣麿の寫せる一本井上頼因氏藏す。三代のなみとは冷泉爲久・爲綱・爲村三卿に點削を受けしによる。◇信遍、通稱は道筑、錦江と號す。幕臣。寶曆十年歿す。年七十二。

武者小路實岳集

寫一卷

卷子本、卷頭に「暮のこる日數をふけて年の松のながきをそふる春は來にけり」以下。◇實岳卿は寶曆十年歿す。

安庵和歌集

一

三宅白隱

六卷合せて一冊とす。部立あり衣笠内府の「すなほなる姿ながらに新しき心を得ばや大和ことの葉」の旨を庶幾す。紀恭忠の序あり。終にその子董之の手に成る行狀あり。寶曆十一年上板。○安庵名は素行、字を白隠といふ。香川宣阿の門人なる高階正善に學ぶ。

自 詠 集 寫一卷

堀田 正亮

「眺むれば去歲にも近き空ながらけさはことわる園の鶯」以下百數十首を收む。○正亮は堀田侯、正虎の弟、享保十二年兄正虎の遺領を襲ぐ。老中となり四位侍従に叙せらる。佐倉に移封寶曆十一年卒す。年五十。

樹下石上和歌集 十卷

花岳庵寂峯

寶曆十二年の自序によれば、夙く石州侯の誂へて集むべきよし仰を蒙りたるに、その翌秋侯の世を去られしと悲しみ、伯牙が斷絃の思にてそのまゝとなしたるに、世嗣の君の命にて、その七回忌に編みて尊靈の御前に捧げたるものといふ。集名は雲水の迴歷中に詠せる作多きによりて名づく。歌數二萬千七百餘首十七卷に收む。同年上板。○寂峯は筑後の人。福岡の郊外花岳庵に住せしか。

烏丸ト山入道詠歌打聞 寫一卷

烏丸 光胤

卷頭立春「日のもと天つ日嗣のあきらけき道を光の春や立つらむ」以下の詠を集む。潜龍閣文庫に一本あり。

○ト山は烏丸光胤卿の入道後の名。從二位權大納言に任ぜられ、寶曆十四年落飾。

桂 山 集 二卷

川井 立牧

十卷終に諸體の歌春曙百首等を附す。寶曆中上木○立牧は伏見の人。有賀長伯に歌を學ぶ。詩集は大橋集といひ、

上板せり。

願川和歌集 七卷

同

毎卷部立して集む。擬古と題し萬葉調に詠める歌あり。混本歌・謎警歌・組入天井廻文の體あり。二卷には元文二年哭長伯先生詞並和歌あり。五卷には悼辻經定喪子長歌あり。享保の頃より明和二年頃までの歌を集む。學習院本。

待 煙 歌 寫一卷

水戸藩士某氏の集にて、彰考館に一本あり。卷頭に早春雪をよめる「長閑なる空とも見えぬ雪の色に霞ばかりや春を見すらむ」以下八百四十六首あり。成公に仕へたる人と見え、寶曆の頃の歌多く、七十ばかりの齡に至り物頭の役をうける時によめる「時なれやむぐらの宿も匂ふまで老木の梅は春の恵に」の詠あり。作者氏名未だ考へ得ず。

大昌院様御詠 寫一卷

山内 豊敷

部立を設け「行年はなほ残りある日數をも春にこめてやけさかすむらむ」以下三百二十四首を收む。豊敷公御詠とある一本より歌數少し。山内侯爵家に自筆本あり○豊敷は土佐の藩主。四位侍従に進む。明和四年卒す。大昌院と謚す。

豊敷公御詠 寫二卷

同

上卷は春の部、下卷は夏、秋、冬、戀、雜の部に分つ。卷頭「行くとは猶残りある日數をも春にこめてやけさかす

むらむ」以下数百首の歌を収む。参勤の途次道中記の歌二十一首もその中にあり。原本山内侯爵家にあり。

信復公歌稿

寫一卷

松平信復

享保十七年十八年二十年二十一年の歌約七十首。元文二年の歌三十七首。同三年の歌百十首を収めたるもの。元文四年己未の試筆より明和元年までの歌二千九百四十六首を、年々四季戀雜に分ちて統計を附したるもの。大河内正敏子爵家所藏。○信復は参州吉田侯にて、延享元年父信祝の遺領を襲ぎ、伊豆守と稱す。明和五年卒す。年五十。謙光院と諡す。

焚餘葉

寫一卷

湯淺元禎

もと一葉集と名づけ、五卷二千首ありしを寛延二年冬自燒きし餘葉といふ。歌數七十餘首。明和九年壬辰の秋元禎七十四歳の時の奥書、天明癸卯男明善の跋あり「舟つなぐ堤の柳うちけぶり江に吹く笛の聲ものどけし」「夕立の露ぞ涼しき楢の葉に光をちらす月の下風」の如き詠あり。家藏本○元禎は備前の士、常山と號す。儒學は服南郭に學び、歌は野村尙房に就く。安永二年歿す、年七十二。

落葉

寫一卷

遠藤胤將

平胤將の自詠を集めたるものにて、享保十七年菊月日より二十年までの詠と奥書あり。四季十首詠には「遠近にやくやもしほの煙とは見えすも霞む春の浦浪」の歌巻頭に見えたり。東子爵家に白筆の一本あり。

續落葉

寫一卷

同

享保二十一年以降の胤將の歌を集む。試筆「今日よりはちよの初めと新玉の春にとざさぬ四方の長閑さ」以下數

十首の作を収む。○胤將は近江の三上の藩主。正徳二年に生れ明和八年卒す。年六十。奏者番を勤む。

爲村卿詠草

寫一卷

明和八年の詠草を賜芦拾葉八四に収む。

月下百吟

寫一卷

明和九年に爲村のよめるもの。家藏本。尙百首類に詳説す。

爲村卿月の歌

寫一卷

浪速公船奉行永井監物直慶に贈りたる月の歌二百四十首を、即景・天象・移時・山名所・川名所・海名所・野名所・居所・植物・動物・雜物・人物・戀情・人事等によせ、さまざまに工夫せるもの。圖書寮に一本あり。又別に折桂和歌集と題する一本内閣文庫にあり。月の歌と同じ。

爲村卿和歌

寫一卷

門人鷹見保具の部立して集め明和九年の奥付ある一本圖書寮にあり。歌數多し。圖書寮には別に冷泉爲村詠歌と題せる一本あり彼此異同あり「朝川や水のけぶりもたえん」に流れて下る瀬々の川霧」「空の海の雲の波間に釣針のそれかとはそく月浮ぶ朝」の如き詠、秀歌として聞えたり。

冷泉大納言三百首

寫一卷

冷泉爲村

四季百首以下三百首を収む。門人儘田重明の四季百首をその後記せる本あり。

重陽九十首

寫一卷

同

翫菊・菊色・菊香・菊盛・月前菊・水邊菊・庭上菊・寄菊戀・寄菊旅・寄菊祝の十題各九首づつよめるもの。家藏本◇爲村は爲久の男、正二位權大納言民部卿たり。落飾して澄覺といふ。安永三年薨す。年六十三。冷泉家近世の優れたる歌人にて門人極めて多し。

淳々抄 寫一卷

短歌千十七首外に文章三篇を収む。冷泉爲村の門人にて安永三年に歿せし人の集なり。文化三年卯月三日その三十三回忌にあたり、嗣子直具その子直品に命じて集のうち優れたるをぬき、亡き父の尊靈に供へ、永く高德山桃雲寺に傳へしむるよし奥書あり。爲村の六十賀、源牛山の八十賀、家の老女藤尾八十の賀の歌あり。直具の弟、密禮・直品・直起・直賢・直方の名を列ねたり。或は堀氏などの一族の人にあらざるか。慶大に美装せる一本あり。

贖贖集 一巻

幸田光隆

文祿二年十月廿六日伊勢神宮に奉仕せる度會光明等の人々の和漢及百韻聯句を載せ、次にその曾祖父光延所詠の和歌並に聞書を挙げ、次にその考、光仲の歌、叔從祖光尹の詩二十篇を載せ、首に歌詩作者姓名を挙げ、漢文にてその傳を録す。光延の歌は光尹の纂むるところの詩文雜編の中より取るといふ。その作中「みる夢もありし昔の鳥の聲を老のねざめは待つことにして」の一首は武者小路實陰公の賞稱せしところといふ。安永庚子八月自筆の一本、天明六年豊宮崎文庫に奉納せる一本、神宮文庫にあり。◇光隆は度會の嗣官正六位上たり。

菴庵咏藻 寫一卷

河村秀根

日本書記集解の作者。近世著述目錄に菴庵咏藻一一巻と挙げたれど己未だ見ず。◇秀根は尾州の士、天野遠景の

門人。

山路の梅 寫一卷

おくめの方

集中の歌を抄して富士の煙に出せり。◇冷泉爲村卿の門人有徳公の側室にして、芳姫君の母堂、教樹院殿と諡す。安永六年卒す。

奥之海 寫一卷

善波明致

部立して自他の作を収む。書名は巻頭の作に由る。笹原忠恕の序あり。巻末に荒井典見の長歌を載す。◇明致は會津の士、安倍井武氏と安永中二十番の歌合をなす。

藤衣 寫一卷

中野義都

後之藤衣 寫一卷

同

蟹之志和左後篇 寫二卷

同

明和六年四月父の喪にあたりたるときよめる十六首、題して藤衣といひ、安永三年八月母の喪にあひたる時の詠二十首、後之藤衣と題す。蟹之志和左後篇には七百十二首を収む。安永六年二月の奥付あり。◇義都は會津の人、御家訓徴・後之教等の編著あり。

萬華老人詠草 寫一卷

冷泉澄覺(爲村)合點の詠草、清水千清叢書十五に収む。

蓮葉和歌集 一巻

大我

阿彌陀四十八願歌、阿彌陀の三誓の歌、十如是の歌、五正行の歌、六波羅密の歌、十戒の歌、十界の歌等浄土の教義を優美なる詞を以て詠じたるもの。厭離穢土欣求浄土、安心起行、普勸念佛、望降土山、遊降土山等の長歌も交へたり。巻頭に「春雨のふりつゞく日の淋しさに花見にかへて言の葉をかく」の詠あり。安永八年松阪の孤雲及門人釋大道の序あり。大道の撰びて上木せるもの。◇大我は赤穂の人、鎌倉光明寺の眞察に就きて浄土教を受け、山城の正法寺に住す。

秋田和歌集 寫一卷

行脚和歌集 寫一卷

前書は秋田に遊びたるとき後書は水戸遊歴の時の歌を収む。中に詠雪十首を絶唱と稱せらる。◇顯阿は會津の人俗稱雪忠雅といふ。

田安御集 寫一卷

賀茂眞淵の筆記せるもの。賜芦拾葉四九に収む。

天降言 寫一卷

田安公薨去の後三十七年、即ち文化四年に藤原直臣の撰む所、表題の如く古調にして蒼勁なるもの多し。例へば「學ばでもあるべくあらば生れながら聖にてませどそれなほし學ぶ」「ふる雪にきほひ狩するかり人の熊のむかばき眞白になりぬ」に於けるが如し。續歌學全書七篇には抄出して收めたり。

安賀當居歌集 寫一卷

賀茂眞淵

眞淵の歌四十五首を門人加藤宇萬伎の集めたるに、上田秋成が拾遺六十餘首を補ひ、明和九年序を加へて上板せるもの。

能已利久佐 一卷

眞淵の歌を集む。寛政三年村田春海の序を加へて上木。

阿賀太居拾遺 一卷

百首を撰びたるもの。寛政二年野村信基の序あり。

縣居の歌集 二卷

眞淵の歌を集め、附録としてしづの屋のうた集一卷を合せ、寛政三年刊行す。神宮文庫本。

縣居文歌 寫二卷

眞淵の歿後十三年、即ち天明元年に楫取魚彦その友源多頭むら・宇佐美元成等と師翁の歌文遺稿を集め、追慕の記念とせるもの。その編輯の次第は魚彦の序に委し。

賀茂翁歌集 五卷

村田春海の師翁の歌文を撰みたるものにて、寛政三年のはしがきあり。一卷には四季、戀、哀傷の短歌を、二卷には雜、釋族、物名、賀の短歌及擬神樂、催馬樂歌及長歌、旋頭歌を、三四五の卷に文章を載す。卷頭「を筑波もとほつあしをもちかすむなり嶺ごし山ごし春や立つらむ」の詠あり。萬葉調を旨とし、これに古今の調を加味せるが如し。「夕されば海上かたの沖つ風雲井に吹きて千鳥なくなり」「鳩鳥のかつしかわせの新しぼりのみつゝをれば月

傾きぬ「信濃なるすがの荒野にとぶ鷺の翼もたわに吹あらしかな」の如き秀吟あり。享和元年橋千蔭の序を加へ文化三年に至り上木す。眞淵全集四卷、續歌學全書第一編に收む。

袖中縣居家集 一 卷

賀茂眞淵

天保十年從五位下藤原守胤の序を加へ、その紀行と共に星崎幸神藏版す。

賀茂翁歌集 二 卷

同

鶴田常行の校合して上木せる本、圖書寮にあり。

賀茂眞淵家集 五 卷

同

眞淵の歌集を仲田顯忠の校合して嘉永四年に上板せるもの。

賀茂翁の歌 一 卷

同

元文六年辛酉のとし立つ朝によめる「年立てば野邊の遊びのゆかしきをけふ來む友にまづや契らむ」以下寛保二三四年の歌二百二十五首を收む。輪池叢書の中にあり。

賀茂翁遺草 寫一卷

藤原徳之

神宮文庫に徳之の校合本あり。その末に云ふ、此翁が遺草は未だ草稿なる中に村田の春海に切に乞ひ求めていと急ぎて寫し置たれば誤字闕文少からず、よりに一見の上筆を加へり、皆青き色もてかきたり、猶春海が本によりて二たび可改云々、天保十四年歲次癸卯三月日以賀茂翁家集校合、加朱批者家集不載歌也。朱書イ字即家集而非有遺草異本也とあり。

賀茂翁家集抄 寫一卷

水野忠邦

眞淵の集より「袖たれて見むと思ひし」以下の歌百數十首を抄し、自ら多少の註を加へたるもの。子爵水野忠欵家に一本を藏す。

賀茂翁家集拾遺 一 卷

門人狛諸成・文伯等の書き傳へたるもの、又その他藤原菅根集・文伯集等によりて落ちたるを拾へること文政九年伴直方自記に見ゆ。四季、戀、雜、物名、賀、長歌、雜文に分ちたり。卷頭「行くとしの空に霞のせきしてや残る日數を春となすらむ」以下。眞淵全集にも收めたり。

縣居落穂 一 卷

土屋祐孚

集に落ちたる眞淵の歌を載せ喜翁の繪を數多挿入し、明治廿六年本居豊顯の序、瀬戸久微の跋を加へて上木せるもの。但し後人の作を眞淵の什とせるもの甚多きが如し。

竺堂詠草 一 卷

肇海

建仁寺の僧肇海の集にて中に優なるをまさり草といふ。加點褒詞等を記せり。

早苗集 寫三卷

稻掛棟隆

棟隆詠草八冊の第一卷にて寶曆の初頃の作を載す。その第二卷は寶曆十三年の詠。第三卷は明和二年の詠を收む。

萱草 寫一卷

同

浪下集 寫一卷

同

萱草は明和三年頃の詠を集め、浪下集は明和中頃の歌を載す。

月盛集 寫二卷

詠草第六第七兩卷を収む。明和八年の詠草なり。

かるも草 寫一卷

同

詠草第八卷目にして晩年の作を収む。以上八冊本居豊頴翁藏す。◇棟隆は松阪の人、棟庵と號す。鈴屋翁の門人。寛政十二年歿す。年七十一。

東洞翁遺草 一 卷

吉益東洞

始に懷紙及肖像を載す。像の上に「死生有命救疾之慎萬病一毒去無疾吉益爲則題」とあり。元文辛酉元旦試筆以下部立して列ぬ。文政八年葛西鳴及中川定故序を加へ、門人土井存庵上木す。◇爲則は東洞と號す。儒醫にしてその名高し。安永二年歿す。年七十二。

あやたり歌集 寫小一卷

道に寄す祝をよめる「天地の隔あらねば玉鉾の道の光は萬代もへむ」より「白川の川の邊近くいへゐして清き川音を聞きつつ居らむ」まで。京都大學圖書館本。

綾太理乃集 寫二卷

建部綾足

部立なく、片歌短歌を主とし長歌も少しく交へたり。自筆本大島雅太郎氏藏す。首に「奥山は山鳩鳴いて花もしづけき」以下くさぐさの片歌を載せたり。上野圖書館には天保十年伴直方の寫せる綾足歌集あり。一卷にして前

書とは内容同じからず。

惠露草 寫一卷

谷川士清

有栖川宮職仁親王の御點を受けし寶曆二年より五年頃の自筆の詠草、津市川喜田久太夫氏所藏す。堂上風の歌なり。◇士清は津の人、淡齋とす。日本書記通證及和訓栞の著者。安永五年歿す、年六十八。

蓬壺堂歌集 寫一卷

須賀直見

首に花五十首詠あり以下四季戀雜に部立して短歌を集む。卷頭「春のくる方こそあらめけさははや四方に霞のいかで立つらむ」以下。別集一卷には文を収む。本居豊頴氏藏す。◇直見は松阪の人。鈴屋の門人。安永五年歿す。

静舎歌集 一 卷

加藤宇萬伎

寛政元年十三回忌に方り門人上田秋成の撰む所、歌八十餘首。縣居家集と合刻。板本の外續歌學全書第二編に收む。「春霞たゝるを見ればくもりし神代の昔おもほゆるかな」「ものものふの草むすかばね年ふりて秋風さむし結梗が原」の如き萬葉古今の中を理想とせる作風を庶幾せしが如し。

成章歌集 寫五卷

富士谷成章

明和六年三十二才の時より安永八年まで十一年間の歌を旨と集めたるもの。歌員六千餘。猪苗代兼誼の所藏本、狩野亨吉博士藏す。尙この集のことは已往年國學院雜誌に紹介せり。

北邊成章歌集 二 卷

同

成章の集の中、その千御杖が夙く撰み置けるを、四季部のみは文化元年允許を得、弘化三年天王寺市郎兵衛の出

板せるもの。戀、雜の部は未だ上木に至らず。天明八年皆川洪園の序をも添へ、文政三年嗣子御杖の序を加ふ。

北邊成章家集 一 卷

明治四十三年歌文珍書保存會より發行す。上卷は歌集及七夕三十五番歌合を收め、下卷は文の部とす。歌集は安永二年三月望、古河大夫朝倉氏に與へしものといふ。板本のと比するに歌數少く、間々相同じきもあれど異なる歌多し。始に六きはの歌、上世、中頃、近昔、弟つ世、今の世、長歌を擧げ、次に短歌のみを四季雜に部立す。

靜徳院殿御詠 寫一卷

松平樂翁公夫人の集にて「いとはやもきのふにけふは吹かへて木の芽いろそふ春の初風」以下述懐に至る部立を設けて集めたるもの、天保五のとし初夏つゝしみて寫す定和、の奥書本子爵松平定晴氏所藏。○靜徳院は白川侯松平定邦の女、天明元年歿す。年二十六。

三藻類聚 三 卷

宮部義正等

三藻日記 二 卷

同

三藻五百首 一 卷

同

三藻續千首 一 卷

同

相生乃言葉 一 卷

同

冷泉爲村門下の宮部義正その妻萬、その子義直三人の集にて、類聚とあるは宗匠家合點の作を併せて部類せるもの。日記とあるは明和九年より天明七年までの日記中に歌を挿めるもの。相生とあるは夫婦の詠草冷泉家との贈

答の歌等を含む、五部八冊合刻。日記には安永五年日光山紀行及天明三年讃岐金比羅參詣の紀行なども交り、又公卿の人々と歌よみかはししことも多く見えたり。

丙午瓦礫 寫一卷

宮部義正

天明二年の詠にて太田姫社頭兼題の和歌などあり。白筆本内閣文庫にあり。○義正は宇都宮侯の臣、通稱孫太夫、爲村卿の門人後除門せらる。寛政四年歿す。

高朶公詠草控 寫四卷

安永六年より九年六月に至る詠草一冊。九年七月より天明二年壬寅五月まで二冊。天明二年七月より天明四年までの詠草一冊。藤堂子爵家にあり。○高朶は久居侯。明和七年襲封、左京亮といふ。享和元年卒す。年五十六。

洗齋翁和歌留 一 卷

九條攝政尙實公萩原三位點の和歌、安永七年歸山紀行、和歌答辭、白玉翁五十回呈閣下文、安永四年北越紀行等を合綴す。京大圖書館に一本あり。天明四年京都渾成合にて記せるもの。神學者松岡仲良などの集にあらざるか。

東 歌 藻 寫四卷

橘 枝 直

自筆藻本の中、下ノ一、下ノ四、下ノ六三冊の外、下ノ六の中清書本合せて四冊、松井簡治氏藏す。下卷一は享保五年の「冬かけて春てふ名には霞めども明る光や改るらん」以下。下卷四には明和五年初春水の歌「さゝなみのあや吹きみだす春風にくだけてのこる池のうすらひ」以下。下卷六には安永三年東路初春をよめる「先かすむ東の春や刺竹の都人にもうらやまるらむ」以下。

あづま歌 六 卷

もとは年次の順次なりしを、その十七回忌に方り息千蔭の部立して撰べるもの。始四卷は歌、後二卷は文の部とす。享和元年上木。千蔭及春海の序あり。歌の委古今を論ふ書、子に與ふる書等、歌學の部参照すべし。松山觀山と歌を論じては千載新古今等は亡國衰世の音ありと斥けたれど、その詠歌は必ずしも古調ならず。蓋し古今と新古今とを折衷せるが如き體の歌多し。

111
108

しの葉草 三 卷

始め烏丸門人後、冷泉爲村卿に學ぶ。宗匠家の加點の歌を主とし、約千餘首を部立せるもの。門人小野茂語序、大塚孝綽の跋を加へて天明六年上板。別に山家百首あり。百首類に出す。宗固は天明四年八十四歳にて歿す。

ひとよばな 一 卷

畿内より國盡の順により、一國一首或は數首の紀行の歌を集めたるものにて、詞書ある古調の歌なり。卷中池大雅・大窪天民・岸駒・尚蘭・瀧齋の繪を挿む。天明六年本居宣長等の序及松井邦・群田安足及自跋を加へて清燕堂より上梓す。紀行歌集として面白きものなり。海量は近江の人。眞淵に學び、續萬葉考等を著す。文政中年八十餘にして歿す。大寂庵立綱の叔父なり。

漏月窓歌集 寫二卷

部立を設けず、短歌の外長歌十篇を收む。加藤枝直の加點あり。

並河尚道詠草 寫一卷

萩原宗固
並河尚道
同

天明五年自筆本を乙巳年郵布理と題し、卷頭に「一年の日數あまりてたづか弓おしてけふより春は來にけり」以下の詠を收む。尚道は尚義の子、寛政二年六十四にて歿す。

杉の下枝 大二卷

始に歌を、後に十餘篇の文を擧ぐ。門人菱田縫子の輯むる所。橘千蔭の序、三島自寛の序あり。寛政七年上板。古風調の作風なり。蒼生子始の名ふりといひ、楓里と書せり。荷田在滿の妹、天明六年歿す。年六十五。

蒼生子

楫取魚彦歌集 一卷

文政四年上木の縣門遺稿第四集に載す。部立を設けず、長短歌交へ擧ぐ。萬葉調の風骨を得たる作多し。「こゝのよろづ里に飛びかふ鳥すらも鶺鴒なすらむ天つ空かも」「天空のむかぶすをちのわだつみの霞めるかたゆ舟ぞ見え來る」「武士の弓弦おしはり引き放つ矢口の川のいにしへ思ほゆ」等その例とすべく、室壽歌・採物歌・擬催馬樂の歌など古風の作を收む。續歌學全書二編にも載せたり。尚大船楫取魚彦集と題せる本あり。

楫取魚彦家集

嘉永三年伊能外記の輯めたる香取四家集に氏の歌文を載す。紙數纔に三葉に過ぎず。縣門十二大家の一、古言梯の著者。

清曉院殿御詠草 寫一卷

卷頭「一とせにまた立かへる春霞ふるとしながら空ぞのどけき」以下數十首の詠を集む。天明六年冬月小野爲長をしてこれを書せしめ、以て神倉に藏す云々、松平定信の跋あり。子爵松平定晴氏一本を藏す。

松平定信

竇蓮院殿御詠 寫一卷

田安宗武侯の室、近衛氏の歌を松平定信の輯めたるもの。天明六年冬十月十九日の奥付あり。兄治察卿も歿し、田家の統たえたるを慨き、「むかし今思ひつづけてねぬに夜は空とふ雁の聲も悲しき」の歌を添へたり。一本松平子爵家にあり。一本麗玉集と題せるもあり。

松平定信 二〇六

綱貞公御自詠 寫一卷

福智山侯朽木綱貞の集にて、巻頭福智山にての試筆「初日影匂へる山の高根よりしるくも見えて春は來にけり」以下部立あり。丹州巡郷の時の詠などあり。慶大圖書館に一本を蔵す。◇綱貞は福知山侯。寛保三年從五位下出羽守に任ず。明和七年家督をつぎ、安永七年大炊頭と改む。天明八年卒す、年七十六。

掬月集 寫二十二卷

伊達重村

一名を徹山公御歌集といふ。正篇十二冊、續篇十冊あり。伊達伯爵家に一本あり。◇重村は仙臺侯宗村の子、四位左中將に叙せらる。天明八年卒す。年五十五。徹山公と謚す。辭世「國の爲おもふまことは代々へてもくちなで家の風につたへよ」の作あり。

松花集 寫一卷

幸田覺貞の詠草にて、天明六年の寫本眞田伯爵家にあり。

靈雨山人集 寫五卷

伊形質

四季、戀、雜の部立を設けてその詠を輯む、肥後文獻叢書卷四に收む。◇質は熊本の詩人、字は大素、藪菰山推

賞して李白の再生となせり。天明七年歿す、年四十三。

中原廣道集 寫一卷

石野廣道

家集澤芦集の中五百四十首を抄出せるもの。天明八年自跋あり。子孫に遺す爲に撰びたるものにて、世に公にすべきにあらずとせり。靜嘉堂文庫に一本あり。後五百四十首と題して上木せり。◇大澤隨筆の條に傳を擧ぐ。

大澤文稿 寫一卷

中原廣道の草稿本にて、記文七篇、書簡五通の外、歌會その他の歌を録せるもの。横瀬貞臣・成島和鼎等の同人の作品も多く見ゆ。井上頼園氏自筆の一本を蔵す。

さほがは 寫一卷

清子

縣門下才女の一人たる清子の集にて、書名は巻頭の「古里のさほの川水流れての世にもかくこそ月はすみけれ」の詠に由る。上野圖書館には山田常典の寫せる一本あり。又天保十一年伴直方の自筆寫本あり。

涼月遣艸 寫一卷

餘野子

縣門三才女の一人たる鶴殿よの子一名瀬川、の集にて寛政五年上木、村田春海の跋あり。◇よの子は鶴殿孟一の妹、紀伊侯に仕へ、瀬川といへり。詩をもよくし、後尼となり涼月院といへり。天明八年六十餘歳にて歿す。

建依集 寫五卷

山内豊雍

每冊四季、戀、雜に分つ。青の巻に天明五年の自序あり。巻頭立春「岩戸あけし神代おぼえて出づる日の光のどけき春は來にけり」以下。青卷三十二枚。白卷二十六枚。赤卷二十五枚。黄卷三十枚。黒卷二十六枚。一葉凡八

首とす。

豊雍侯家集 寫二卷

部立を設けてその詠を撰びたるもの。花月百首又千首詠など試みたることに集中に見ゆ。冷泉爲村卿の教をうけ優雅なる作多し。呑海亭にて赤壁の遊を想ひて、『唐土の秋もかくやと影すめる浪路の月におもひこそやれ』の如き詠あり。山内侯爵家に一本を蔵す。○豊雍は豊敷の子。土佐の藩主。四位侍徒に任じ土佐守と稱す。寛政元年卒す、年四十三。請徳院と諡す。

和歌御詠進の記 寫一卷

安永十年より寛政二年間まで禁裡仙洞御所にての自家の詠を記し付けたる原本三條西家にあり。○實稱は公福の子。従一位權大納言となる。寛政三年薨す、年六十五。

三條西實稱

すがのね 寫一卷

寛政三年郷里より上京せる間によめる紀行的の歌集なり。

木下幸文

山のさち 一 卷

寛政四年源道別の序あり。短歌九十餘首、長歌二篇、古調の歌多し。續歌學全書二篇に收む。

日下部高豊

草廬翁歌集 一 卷

その女貴及貞の安永七年上木せるもの。懐紙形に麗しく記せり。卷首の歌により上巻は峯のまさかぎといひ、下巻はならの葉といふ。筆跡美しく法帖となすに足る。刊本なれど極めて稀なり。○龍公美は詩を善くす。儒を以

龍公美

高山朽葉集 寫八卷

て彦根公に仕ふ。歌は眞淵に學ぶ。寛政四年歿す、年七十七。信濃の三島行康が高山彦九郎正之の詩歌文を集めたるものにて、一より六までは歌を載す。歌數一千六十首。七卷には文章二十二章を收め、八卷には詩百十二首を收め、附録には長歌六篇を掲ぐ。末に明治十一年高山神社建立の建議書等を載す。高松宮家に一本あり。

朽葉集序跋 寫一卷

孟彪頼春水の題字、柴野邦彦の序文、正之の筆蹟、正之の寛政三年の狀、藤田一正の題言跋を集めたるもの。高松宮家に一本あり。

高山の雫 一 卷

吉久保村四郎の高山彦九郎正之の系譜人物考書狀・歌・他よりの送詩及傳記を集め、明治三十九年出版せるもの。

吳淞園歌集 一 卷

堀勝名

自選原本は裔孫堀勝太氏蔵す。肥後文獻叢書第二に收む。○勝名は肥後の士。巢雲と號す。通稱平太左衛門、銀臺公に仕へて、老臣となり政事を釐革す。寛政五年歿す、年七十六。

高保歌集 寫一卷

服部高保

長短歌合せて四百八十三首。中に詩經の葛覃三章をよめる長歌等あり。文政九年二月十日平實雄の奥書ある本よろし。異本三本あり。○高保がことは續冠辭考萬葉大註等の條を参考すべし。寛政五年歿す。

六無齋先生和歌 寫一卷

明治十五年出版六無齋全集四篇に收む。○子平は仙臺の人、寛政三奇士の一人、海國兵談の著者、寛政五年歿す。

林 子 平
松 平 定 信

致仕の時、眉公が風月の全身といふ言を思ひ出でて、「月花もまたかばかりの色かとは知らで過ぎにし身を思ふかな」以下十八首の詠を巻物とせるもの。寛政六年の筆。子爵松平定晴氏藏す。

二葉集抄 二

阿 蘇 惟 典

男惟馨卿の集むる所もと十二卷あり。宇野東風肥後文獻叢書第一集に收むるに方り、そが十一を抄して二卷とす。○惟典は阿蘇大宮司、始の名は惟陳、文學を好む。寛政二年従四位上に叙せられ、同五年卒す、年六十二。

重門 詠 草 寫一卷

大 矢 重 門

部立なし。師宣長に倣ひて古風近風二様に詠み分く。終に長歌三篇あり。そが中歳暮述懐は古言學の趣を歌へり。○重門は美濃の人、鈴屋門、寛政六年歿す。

大矢重門詠草 寫一卷

寛政四年五月廿四日本居鈴屋翁に送りて一覽を乞へるもの。自筆本本居家に存す。

大矢重門近體歌抄 寫一卷

首に立春をよめる「ふるとしの雪をへだてて野も山も昨日は去年とかすむ春かな」の歌あり。末に「存へて思出もなき」の辭世も載せたり。

清源院詠草 寫四卷

細川興里夫人

一冊は「春來ぬといはぬばかりに音かへて吹くも長閑けき庭の松風」以下、中に靈感院(細川重賢侯)の七七の忌日に詠める「現つとは思ひもわかず四十日あまり敷へきにしも夢かあらぬか」の歌などあり。一冊は「寒かりし風も夜半に音かへて」の歌あり。一冊には巻頭に「梅の實を閑なき軒」の歌あり。今一冊は有柄川一品宮御點和歌と題し、名所題の詠多く、首に「志賀の浦や汀の氷まづとけてさ浪よする春の初風」以下の諸詠を收む。○清源院は熊本侯細川宣紀の女、名は次久姫、八代侯細川興里の夫人となる。寛政六年七十歳にして歿す。江戸清光院に葬る。

菊の家集 寫三卷

荒木田末偶

上巻短歌中巻長歌下巻文の部とす。長歌には神に仕ふる作多し。その子末壽の集むるところ、寛政九年荒木田守訓の序あり。文の中には上田秋成への消息あり。文化十一年六月末壽より文殿へ奉納のよし記せり。末偶始め俳諧を學び、後本居宣長の門に入る。

倚翠庵和歌 一 卷

伊 藤 松 軒

部立してその詠を集む。○松軒は武者少路實岳・日野資枝兩卿に學ぶ。寛政六年歿す。

北溪先生歌集 寫一卷

谷 眞 潮

天明元年卯月十三日記せるもの。寛政六年二月葛目守種の寫せる本あり。○眞潮は谷重遠の孫、垣守の子、北溪と號す。山内侯の臣。豊蔭侯に用ひらる。寛政九年歿す、年七十一。

北 溪 遺 稿 寫 三 卷

外題の下に賀茂翁示諭と細書せり。旅泊春雨をよめる「握枕杖もぬれて苦舟のしづくいぶせき春雨の空」以下の詠草に眞淵の評を加へたるもの。原本谷子爵家にあり。

北 溪 子 歌 集 寫 一 卷

殘花を詠める「根にかへる頃も忘れて夏山の青葉にまじる花の色かな」以下の歌を収む。眞淵の舉準といひし時代の詠にて、西野氏の加點ある原本谷子爵家にあり。

北 溪 撰 集 寫 一 卷

土佐群書類從卷百十一に收むるもの。始は部立なく、後の一半は四季離別釋旅雜長歌に部類す。戀の部を設けず。

北 溪 詠 草 三 十 首 寫 一 卷

「雪のうちにつふ霞むなりひととせのあまりや春の初なるらむ」以下。中に貧窮問答に倣へる「天地を挽きめぐらさむ丈夫も宿の煙はあげぞかねつる」などの詠もあり。自筆本は谷子爵家にあり。

東 武 旅 日 記 寫 一 卷

歸 郷 日 記 寫 一 卷

一は寶曆四年三月江戸に上りし時の旅中の詩歌を一つ書にせるもの。一は同五年四月十七日江戸を發し歸國の日記にして、江戸より大阪までの間に於ける旅情を詠める歌を旨とせるもの。始に「むさしあぶみさすがに残る心かなかけて待ちにしけふとなりては」の詠あり。尙この他東路日記・半山の草分・鳴無紀行等。谷子爵家にあり。

谷 眞 潮

同

同

同

同

同

桂 山 様 御 詠 寫 一 卷

天明二年九歳の時より寛政八年二十三歳卒去の年まで、十五ヶ年に詠ぜし二百八十四首をその近侍の人の編集せしもの。巻頭初春見鶴「初春の日影のどけく松が枝にむれゐる田鶴の千代よばふ聲」以下四季戀雜の部立によりて集む。○伊達齊村は重村の子、仙臺侯第八世とす。寛政二年十七歳にて封を襲ぎ、左近衛權少將兼陸奥守となり、同八年卒す。年二十三。桂山と諡す。

伊 達 齊 村

鑑 通 公 の 詩 歌 併 諧 寫 二 十 一 通

二十一通あり。鑑通公は柳河侯第八世にして四位侍従となり、致仕の後左京太夫といふ。寛政中講堂を設け藩の子弟を教育せしめたる人なり。寛政九年卒す、年六十九。大應院と諡す。

立 花 鑑 通

玉 銚 擬 歌 寫 一 卷

本居宣長の玉銚百首に擬へてよめる七十二首にて、「天地と發けそめにし道なるをひとりか代々になすぞめでたき」「弓矢にもなるてふ村の基あれど枉げて直してなすぞ人の道」「上つ代はいづらの國も道ならで犬自物こそさはにありけめ」「人はたゞ人の道をし學ぶべし他しみちこそ聞もあだなる」の如き教に關する作のみ。水戸彰考館に古學考と合本にて一冊あり。古學ことに本居學を批評せり。○黍は尾州侯の儒臣にて、兼ねて治績あり。通稱彌右衛門、人見氏、字は子魚、機邑と號す。寛政九年歿す、年六十九。

小 野 黍

桃 林 和 歌 集 寫 一 卷

四季、戀、雜の部立により自詠を撰びたるもの、寛政九年七月の漢文の自序あり。

土 屋 爲 雄

畑中盛雄詠草 寫一卷

四季等の部立を設け短歌を収め、次に文詞及び連歌をも載す、岡本長言の跋ある一本内閣文庫にあり。仙臺表書に收めたるものには百首詠二種、五十首詠、三十首詠あり。末に文三篇を収む。○盛雄は仙臺の人、荷澤と號す。類題法文和歌集註釋、夷曲庭訓抄等を著す。寛政九年歿す、年六十四。山内道煥が揚美錄にその傳委し。

橋經亮詠草 寫二卷

寛政九年丁巳詠草一冊。伊勢松阪に本居氏を訪ひ、歸路山田及尾張に立よりし時の詠草一冊。自筆本萩野由之博士所藏たり。○經亮は京都の人、橋窓と號す。有職家高橋關南の門に學ぶ。梅宮の祠官となり肥後守と稱す。文化三年歿す、年四十七。

茅屋和歌集 寫一卷

明和六年比の作を集めたるもの。後病んで廢人となれるを患へ、見彌山神社に奉納せし百首あり。寛政九年同志二十九人と共に法樂千首を企て三島神社に奉納せり。○典見は會津の人。

荒井典見

花賀都美歌集 寫十一卷

牧野忠敬夫人

長岡侯牧野忠敬夫人の作を賀茂真淵の撰めるもの、部を春、夏、秋、冬、別、露族、物名、相聞、哀傷、雜、祝に分ち、短歌を主とし中に長歌を交ふ。住什多く、よき歌には真淵圈點を加ふ。又真淵の序及つけていふと題し凡例十九條を録す。終の一部は戊辰の兵火にかゝりたるが如し。牧野子爵家に一本あり。○夫人は直姫といひ駿河守忠壽の女。後に明仙院と號す。

富士谷御杖集 寫一卷

寛政六年より十年までの歌を年ごとに分けて、本間平格の集めたるよし、福田美楯の序に見えたり。

天真公御詠草 寫二十三卷

真田幸弘

寛政三年より同六年に至るもの一帙十二冊。中に老女ゆかの加點及評語所々に書入れあり。寛政七年より十一年までの詠草十一冊共に真田伯爵家にあり。尙天真公歌集の部を参照すべし。

花洛の草話 寫一卷

同

首に句題百首、次に題詠の歌を擧ぐ。卷頭花靜酌春酒を翻して「おもふどち心のどかにくむ酒の數も千とせの春やかさねむ」以下の詠を収む。一本真田伯爵家にあり、真田幸弘侯の在京中の作と見ゆ。

大僧都元宜和歌集 寫二卷

上卷首に本居宣長の關路鶯を詠める歌以下二十三首を評し、次にその歌百三十六首を擧げ、下卷にも宣長の歌二十五首を評し、次に自詠を擧ぐ。宣長の衛士の風を學び萬葉流又古學流など稱ふるを誹謗せり。大内御歌所之御門葉大僧都元宜寛政十戊午年神無月寫之とあり。本居翁を斥くる文中に爲村卿仰ありしと道安云ふなど見えたり。堂上地下の關係を知るに便あり。一本慶大圖書館にあり。

雪窓集 寫八卷

板野致知

冷泉爲村卿の教を受けし人にて、寛政十一年歿前までの歌を収む。

蕨園集 寫一卷

安部井武氏

部 集 家

部立を設けて自詠を集めたるもの寛政十二年に成る。○武氏は會津の士、磐梯和歌集を撰ぶ。荷田蒼生子・賀茂季應などの教を受く。別に難忘集及歌合ありといへど己未だ見ず。

和歌浦波 寫二卷

土屋爲雄

四季賀哀傷離別釋教に分ち三百九十三首を收む。寛政十二年正月の奥付あり。○爲雄は會津の士。

歌枕浪廼藻屑 寫一卷

昌文

寛政十二年肥後植木より上洛の途にてよめる歌三十七首を收む。○昌文の傳記未だ考へ得ず。

貞臣朝臣詠草 寫四卷

横瀬貞臣

一卷には天明八年の春より夏まで及翌寛政元年の歌約五百首を部立して列ね、二卷には寛政八年の歌、三卷には年紀を記さざる歌、四卷には寛政十二年の歌を擧げたり。思ふに完本ならざるか。井上頼因氏その自筆本を藏す。歌風は堂上の型を守れり。○貞臣は幕臣高家衆にて、駿河守といふ。四位侍従に叙せらる。文化八年卒す。

蘭室先生遺草 一卷

南合義之

短歌四十五首桑名前修遺書卷五に收む。秋山斷校正す。○義之は桑名立教館の教授。蘭室はその號なり。寛政頃の人。

むすびすてたる枕の草葉 小一卷

本居宣長

寛政五年四月京都を發し近江美濃路を経て名古屋に到り、月の晦松阪に歸れる間に詠める歌、友人のも交へ擧げたるもの。

紀見のめぐみ 小一卷

本居宣長

寛政六年紀伊の徳川侯に召されて旅せし時の歌日記なり。門人左馬大允政詔及萩原廣道の序を加へ、安政二年に至り上板す。

枕の山 一卷

同

櫻をよめる三百首にて、書名は「いねがての心の塵のつもりつつなれる枕のやまと言の葉」の歌に由る。寛政十一年に成り、翌十二年自跋を加へ、松阪の柏屋及京都の錢屋より發行す。中に「山櫻花咲く頃は我宿にあだし木草は植ゑじとぞおもふ」「我心やすむまもなくつかはれて春は櫻の奴なりけり」「この花になぞや心のとまるらむ我は櫻の親ならなくに」の如き詠多し。

鈴屋集 九卷

同

これに自撰歌と流布本とあり。自撰歌は寫本にて明和四年より寛政七年まで廿八年間の作を抜きたるもの。中に就き天明二年以降は古風近風二つに分ちたり。續歌學全書三編に收む。普通板本はその子春庭が寛政十年撰める所。一より三までは近調の歌を四季・戀・雜に分ち、四には古風の歌、五には長歌を載せ、以下は文集にして、六卷は主として序及詞の類を、七卷は消息文を收めたり。享和三年養子大平その後の歌文を集め二卷となし上木す。即ち前書につき八卷には近調を、九卷には古風長歌文詞を收めたり。

後瑞巖院殿御詠草打聽 寫一卷

日野資枝

部立あり、天明頃の歌を收む。卷頭に「新しき心を種と咲きそはむ言葉の花の春は來にけり」以下、中に薩摩の

部 集 家

家集の部

小松家十二景の和歌などあり。一本松井簡治氏蔵す。

先考御詠草集

寫三十一卷

日野資枝

日野從一位資枝の詠草。寛延・安永・寛政頃の詠を集めたるもの十九冊。寶曆より寛政頃までのを集めたるもの十二冊。嗣子資矩の集めたる自筆本上野帝國圖書館に蔵す。○資枝は享和元年薨す、尙詠歌一體備忘の條を参照すべし。

高 朶 公 集

寫二卷

藤 堂 高 朶

卷頭の『のどけしな松に千とせの聲そふる一志の浦の春の初春』以下八百七十首の歌を部立して集む。終に神代の始より世々のみかどの御名を三十一文字に綴りたる歌三十五首を添ふ。藩士澤田忠行が『梅堂の御庫に納め奉るといふ事の上しを恐れみ恐れみ終にうつす。時に享和二つのほし壬戌にやどる霜ふり月謹書』の奥書ある原本祝融の災にかゝり、文化癸酉冬忠行の寫によりて早川忠恒の寫せる一本藤堂子爵家にあり。○高朶は久居侯の第八代。左京亮と稱す。享和元年卒す、年五十六。

木綿園歌集

寫一卷

横 井 千 秋

本居大平の抄出せる一本本居家にあり。長短歌交へ擧げ、採物歌などもあり。首に『久方の天をちかみの高圓の山ゆ霞みて春たちちにけり』の歌あり。○千秋は名古屋の人、通稱十郎左衛門、鈴屋門、享和元年歿す、年六十四。

和歌秘寶抄

寫四卷

梨 木 祐 爲

山・河・野・關・橋・海路・旅路・山家・田家・懷舊・賀・述懷・祝の十三部に分ち、自詠を集めたるもの。外題は後人の加

へたるなるべし。高松宮家に一本あり。○祐爲は山城梅宮の祠官、正四位下上總介に叙せらる。歌は冷泉爲村の門、享和元年卒す。

花 鳥 風 月

寫一卷

加 藤 千 蔭

千蔭の十一より十三歳までの詠草にして、上に人麿の像を描き眞淵の加點等あり。自筆本松本愛重氏蔵す。

う け ら が 花

四 卷

同

享和二年自ら部立を立てて編むよし自序に見えたり。四季、戀、雜、雜體、長歌の外に文詞廿六編を收む。書名は富小路三位より歌召されたる後よめる『武藏野や花かすならぬうけらさへ摘まるゝ世にも逢ひにけるかな』の歌に基きて名づけたり。歌風は雄渾なる、又典雅なる、江戸派歌人の冠冕たり、その秀歌二三を擧ぐれば『二見潟こち吹く風にあけそめて神代のまゝの春は來にけり』『墨田川養着てくだす筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ』『かはほりの飛びかふ軒はくれそめて猶くれやらぬ夕顔の花』の如し。享和元年巨勢利和の序を加へ、同二年上木。文化九年再板。續歌學全書二編にも收む。

う け ら が 花 二 編

五 卷

同

享和二年より文化四年までの歌を集め、文をも加へて、門人の上木する所、文化五年越智千園の跋あり。

橋 千 蔭 翁 家 集

小 二 卷

同

うけらが花より短歌を抄出し、題によりて分ちたるもの。伊能願則の序を加へ、嘉永四年須原屋より出版す。

自 寛 詠 草

寫 一 卷

三 島 自 寛

家集の部

雄風門下の自寛が疊紙又は短冊にかけたるを小野桃仙院法印が寛めたるもの「試むる筆の林の風もなし硯の海も波しづかにて」以下の歌を集む。◇自寛名は景雄、三樂庵と號す。有栖川家の門人にて、文化九年歿す年六十八。

富小路貞直卿詠歌 寫一卷

享和元年八月貞直卿より橋千蔭に加筆を乞ひしに、千蔭評を加へて返上せしもの享和三年校正の寫あり。◇貞直は正三位治部卿に任ず、天保八年薨す、年七十七。

日野矩資詠集 寫一卷

外題には當今御點とあり。寛政八年より享和三年までの詠に聖上の御加點を乞ひたるものを集めたる一本帝國圖書館にあり。◇資短は資枝の子。従一位權大納言に叙せられ、文政十年落飾す。時に年七十二。

補子 詠草 寫二卷

一卷には五百七十首、二卷には七百九十六首の短歌を部立して集む。卷頭霞知春の「やはらぐる光のどかに春たつと四方にはしるく霞そめけり」以下。寛政の頃の作多し。◇補子は水戸侯の大奥の女流作家。

理子 百首 寫一卷

早春をよめる「若みどり空もけさよりあら玉の年の緒ながき春は來にけり」以下彰考館に一本あり。◇理子は水戸侯大奥の女流作家。

村田春郷家集 一 卷

清水濱臣の輯めたる縣門遺稿第一卷に載す。文化九年上木。續歌學全書第八編にも收む。長短歌交へ擧げ、終に

村田春郷

師眞淵の墓碑文、橋千蔭・三島景寛等の詠詞をも載す。歌風古調にして眞淵の衣鉢を襲ぐ。◇春郷は江戸の人。春海の兄。明和五年三十歳にして歿す。長歌に巧なり。

村田春郷長歌集 寫一卷

御劍屋主の輯めたるもの長歌二十一首を載す。水穂部穂積の長歌七首と合本にせる一本に上田磐楠といふ人の跋を加へたる一本學習院にあり。

小野古道家集 一 卷

文化九年上木の縣門遺稿第二集に載せ、續歌學全書八編にも收む。四季戀賀哀傷雜旋頭歌長歌の部立なり。萬葉に古今を交へたるが如き歌風なり。「里長が千町八千町つくる田の穂毎に千々の秋はこもれり」「色かはる萩の下葉をながめつつ獨りある身となりにけるかな」に於けるが如し。◇古道は通稱を長谷川謙益といふ。鍼醫にして元文三年眞淵の門に入る。

筑波子集 一 卷

土岐筑波子

縣門遺稿第三集に收む。續歌學全書二編にも入れり。部立を設けて歌百七十首を收む。中に長歌二篇あり。「春立ちて匂へる花の顔みれば我さへともほほゑまれけり」「我脊子が解き洗ひ衣も縫はなくて萩の葉そよぎ秋風の吹く」等その佳什なり。◇筑波子は縣門三才女の一、土岐頼房の室。

六帖詠藻 四十六卷

小澤蘆庵

門人小河萍流・前場默軒の撰む所、たゞこと派始祖の作として清新なるもの多し。雜部には詩經の篇名を詠めるもの

四十首、周易の卦名を詠めるもの二十首あり。その他阿彌陀佛に奉る三十二首の折句、薬師佛に奉る香冠折句二十八首の如き、雙六盤の歌の如き、縦横の詩才を窺ふに足る。『日のめぐる南の枝の霜どけにぬれてほほゑむ梅の初花』『ともすれば花にまがひて散る花に梅が香さむき二月の空』の如き佳調のもの。『林間の虫の音ばかりさやかにて雲居の月ぞ影おぼろなる』の如き漢語をさながらによめるもの。『とことはに風のあなづる露の身の何につけてもながらへぬらむ』の如き散文調の交れるもの。『古は大根はじかみ葦なすびひるぼし瓜も歌にこそよめ』の如き主張の歌風を見るべし。文化元年上木六本とす。宮内省御歌所には四十六卷の善本あり。文化四年の寫本は七冊なり。○芦庵は當時平安和歌四天王の隨一、古今六帖を好むより家集の名に負せたり。

六帖詠藻拾遺 二 卷

前書に漏れたるを小河萍流の集めおけるもの。嘉永元年に至り萍流の子葉翁の上木せるもの。前書ともに續歌學全書六にも收む。

蘆庵遺草 寫一卷

疎堂上人の輯むる所、文政癸未の寫本あり。松井簡治氏一本を藏す。

秋の雲 寫一卷

曾丹後の毎月集に做ひ、享和三年自詠三百六十首の佳什を抜き自ら評釋を下せるもの。書名は巻頭の『秋の雲風にたゞよひ行く見れば大旗小旗栲領巾の旗』の詠による。眞淵の萬葉風と芦庵の古今調との二つを打交へたるが如き作多し。

上田 秋 成

藻 屑 一 卷

同

藤篋冊子の中一二兩卷及二の餘卷を合せたるもの。秋成の歌を部立して輯む。香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり。『飛ぶ鳥のゆくへは霧にうづもれて鳥羽田の千町ゆふぐれにけり』又『蟲の音の多かる方に露わけて野路のたなはしくつこえけむ』の如き、その秀歌なり。生鳥氏の序あり、續歌學全書六編にも收む。○秋成は余齋と號し又無腸といふ。加藤宇萬伎の門、膽大小心録等の著者。尙冠辭續紹の條を参照すべし。

奇跡 つらぶみ 一 卷

上田秋成の藤篋冊子を明治四十二年宮崎三昧の印刷せるもの。

手ならひのふみ 寫一卷

つらぶみ以後の歌文を載す。氏の自筆本京都市小山源治氏所藏す。

獅子巖和歌集 一 卷

同 蓮

冷泉爲村卿の門にして堂上の風ながら、酒脱の趣ある歌をよみたる人にて、歿後四十三年に吉田元長の撰せるもの。その秀吟『たてまつる龜の尾山の早蕨は千世をかぞふる手に似たるかな』の詠もこの中にあり。『吉野川流るゝ水に春くれてゐせきに残る花のしがらみ』『定めなきうき世にしばしながらへてけふも聞きつる入相の鐘』の如き詠あり。又その釋教の歌のみを集めたる法の雲一卷あり。○涌蓮は高田派の僧、名を達空といふ。嵯峨に住み、念佛の暇に歌を詠す、安永三年歿す。

涌蓮大徳短冊帖 一 帖

伊勢國津市の川喜田政明が家藏の涌蓮の短冊を模して折本とせるもの。『のどけしな麓の里はくれそめて峯に入日の影ぞかすめる』といふ晚霞の歌より過といふ題まで四十七葉を一帖とす。

殊音同歸

寫一卷

萩原元克

始に詩を擧げ、次に歌を載す。歌は萬葉調にして長歌は悉く萬葉假名にて記せり。孫卓敏上木せむとて安政二年序を加ふ。但し己は未だ板本を見ず。井上頼園氏一本を藏す。○元克は甲斐の人、元翼が子。鈴屋門、道の指折の著者。

孤松庵詠草

寫一卷

卷頭『和田の原いづる日かげものどけきは波と共にや春は立つらむ』以下。著者の開歴不詳。神宮文庫に鷲峯山人詩文集と合本にせる一本あり。

慈雲尊者和歌集

寫一卷

詠作甚だ多く弟子の集録せるもの數本ありといふ。一本は葛城尊者和歌集といふ。原本はその遺跡高貴寺にあり。卷首には梵字題の歌三首あり。その一つに『三千とせの春を傳へて色かへぬ柳のみどり花の紅』の如き詠あり。安永三年頃より享和二年頃までの詠を年次によりて叙べたり。今一本はこの律師の優婆塞弟子郡山城主柳澤堯山公保光の筆録せしものにて、卷頭に双龍の山中に閑居の時よめる『柴の戸をさしていつとは知らねども叩く水鶏のふしをこそ待て』の歌あり。生駒山に營みし双龍庵にての作あり。佛教に關する作多く、寶曆頃の作多きが如し。欽明居士即ち保光の跋あり。小松明親氏三十首を増補し、明治二十七年活版に附す。○慈雲飲光律師は播磨

の人、上月氏。享保三年に生れ、文化元年寂す。年八十七。梵學の中興にして正法律の興隆を以て自ら任す。

岡舎歌集

寫一卷

栗田土滿

全部萬葉風の歌にして長短交へ擧ぐ擬古の弊に陥れるものなきにあらざれどもさすがに遒勁の作も少からず。御民らがなげきこひのむ天つ水かしこし神はうけにけらしも。『ねば玉の闇をしぬきて篝さし鶴飼が伴は夕川のぼる』に於けるが如し。文化元年本居大平及橋千蔭の序、栗田眞音の跋あり。續歌學全書八編にも收む。土滿は遠江の廣幡八幡宮の祠官にして賀茂眞淵に學ぶ。天文八年七十五にして卒す。岡屋はその家の號なり。

春草

寫一卷

内藤正範

大本一冊部立あり。文化元年樂翁公の序、芝山持豊卿の跋あり。當時幕臣の三歌人と稱せらる。但し堂上風の作なりとす。○正範は幕臣、甲斐守と稱す。日野一位及芝山持豊卿に學ぶ。

天真公歌集

寫一卷

眞田幸弘

文化二年東叡山花見の時『分きつるあづまの日枝の山櫻たゞ白雲の香にぞ匂へる』等の歌以下、卒去の年の文化十二年七夕の歌をも收めたり。自筆本並に藩士岩下清酒の淨書して跋を加へたる本眞田伯爵家にあり。○幸弘は松代侯。從四位下に叙し、右京太夫と稱す。寛政十年致仕す。

櫻田歌集

寫一卷

並河幸女

並河尚清の輯めたるもの、東北大學に一本あり。美濃紙五十五枚。加藤枝直及千蔭の教を受けたりと見えて、所々その批評をも書入れたり。長歌も少しく交へたり。○幸女は並河天民の裔。尚清の母。

忍 婦 能 露 寫一卷

松 村 清 盈

二二六

その所詠を二子清意の淨書して序を加へたるもの。文化二年の奥附あり。清盈は會津の士。

閑 田 詠 草 三 卷

伴 嵩 蹊

四季、戀、雜の部立を設けて千餘首の詠を集めたるもの。文化五年橋千蔭の序あり。養子資規の撰ぶところ、文政元年に上木。戀歌は有害のものとなし、詩歌は達意を旨とすべしと主張せる人、「ますらをの山をぬくてふ力にもたえぬや戀の重荷なるらん」の如き、項羽を詠じたるものながら氏の會心の作なるべし。「さま／＼の花はあれども日の本の春の光は櫻なりけり」の如き氏の代表的歌風を示すもの。尙百首詠あり、百首の部に出す。

藻 屑 一 卷

福 原 就 道

「むら清の雪間をわけて春しるやはつかに崩る野邊の若菜は」以下の歌を載せたる家集なり。乾坤叢書十九に收む。就道は古賀精里の門、瀧水と號す。儒にして歌をも善くせり。文化三年歿す、年三十。

松平康定侯歌集 寫一卷

雜の部一冊松井子爵家にあり。卷首弓を詠める「八島國四方のまもりと皇神のつくりましけむ眞弓つき弓」以下。

松平康定詠草 寫三卷

濱田侯の詠草にて朱墨兩點あり。朱は本居大平、墨は賀茂季鷹。歌の間に文會にて作りたる文詞も交へたり。文化四年歿す。尙八重疊の條を参照すべし。

松平康保詠草 寫一卷

享和文化頃の詠草を集めたるもの。卷頭に享和三年癸亥正月に聞ある年の始よめる「いつよりも長かる春の始とやなびく柳のいとどのどけき」以下。松井子爵家に一本あり。

うらら歌集 寫一卷

都 筑 し づ 子

北川一信の妻の集にて、卷頭の「うらくとかすめる春のあしたより心も花になしてくらさむ」の歌によりて集名とす。清原雄風の序、貴良の跋あり。しづ子は文化四年歿す。

大曉院御詠歌集 寫一卷

眞 田 幸 專

大形薄様に一枚約十三首づゝを記す。紙數二十丁、部立を設け「霞だにまだ立ちかへぬ年のうちに早くも春はかへりけるかな」以下。幸專は松代侯。彈正大弼從四位下に叙す。明和七年に生れ、文政十一年歿す。年五十九。大曉院と謚す。

源明公御詠寫 寫二卷

御家流の寫本にて陽明文庫の藏たり。文化四年の日附あり。

仰 葉 集 寫四卷

加 藤 敦 善

天明より文化頃の歌を部類して集む。終に東山海録といふ紀行あり。末に文化四卯年「書集めし千々が一つも残るやと末の世かけてねがふ神垣」の歌あり。

亮々遺稿 三 卷

木 下 幸 文

四季、戀、雜の部立を設け、すなほに感情を詠じたる作を收め、末に貧窮百首を載す。ことしさへ縫ふ針をなみ唐

家の集部

衣肩もまよひぬ袖もまよひぬ」「けふといへば門にさしたる柵のあなかどくし世の人のさが」の如き、奥山のおくに生ひたるゆづる葉も世に出で春に逢ふといふものを」の如き眞率にして憫々人を動かす作風多し。但し一般の叙景歌に於ては多少平板のものあり。千種三位の序を加へ文化五年上木。◇幸文は備中の人、朝三亭と號す。始め澄月に次に慈延に後には景樹に學ぶ。文政四年四十二歳にして歿す。尙さやく草紙の條參考すべし。

松戸詠草

四 卷

桂

谿

一二の卷には享和、文化頃數度の百首を載せ、三四の卷は四季戀等の部立によりて集む。中に文化四年の十體百首あり。

永澤躬國家集

一 卷

四季の歌百二十三首を載す。香取四家集に收め、嘉永五年上刻す。◇躬國は佐原の人、小字は源吾、十郎と稱す。晩に太一と改む。橘千蔭の門人にて濱亭と號す。文化四年歿す。

花園集

一 寫 卷

今

村

樂

部立なく長歌も相雜る。藩命を奉じ京都花園の大通院守護に當れる時代によめる歌を載す。本居大人四條の宿りに於ける兼題の長歌もその中にあり。土佐群書類從百八卷に收む。◇樂は山内侯の臣、名は虎成。始め谷眞潮に學び、後徳大寺轉法輪を師とす。文化七年大濱にて歿す。

琴後集

七 卷

村

田

春

海

一より四までを歌の部とし、五より七までを文の部とす。歌は四季、戀、雜、長歌の外に題畫歌といふ部を設く。

家の集部

又二十首及五十首の歌あり。その歌風は中古の絢爛をしたひ才氣のかちたる什なり。「心あてに見し白雲は麓にて思はぬ方にはるる不二の根」「なづな咲く花の匂にくれかねて霞にのこる春の山畑」「花は早須磨明石もちりにけり浦づたひして春やくれゆく」の如し。文化七年の自序、葛西賢藏等の序、清水濱臣等の跋を加へて上板。歌の部は又續歌學全書第二編にも收む。葛西賢の序文に氏の歌文を漢籍に比して賞めたるを飽かずとし、齋藤彦磨は竹帚を著して強く之を詰る。

琴後集拾遺

寫 二 卷

蓬穂自藻集

寫 三 卷

桃 澤 夢 宅

一に別集ともいふ。四季、戀、雜、畫題部に分つ。草稿本にして書林金花堂の藏印ある一本あり。

夢宅和歌集

一 卷

同

歿後二十一年、門人宮下正岑の撰む所、即ち天保二年の序あり。京にありし時の歌六百四十七首を集む。續歌學全書六に抄出せり。◇夢宅は信濃の人。澄月の門人。文化七年歿す、年七十三。

泰嶺院様御詠草

寫 一 卷

山 内 豊 策

望の夜尾花といふことをよめる「我宿の庭の薄の白露に宿るも清き望月の影」以下。山内侯爵家に一本あり◇豊策は土佐の藩主。豊雅の子。寛政元年家督をつぎ土佐の守と稱す。四位侍従となる。

清原雄風家集

二 卷

短歌にも「手にとりて開きもあへぬ玉章にまづ見るものは人の俤」の如き素朴の歌多く、長篇は殊にその得意とするところ、十七篇の中「雉子の歌」「刀根川の舟中にての富士を見てよめる作」優れたり。清水濱臣序跋を加へて文政五年上板。恰野集の條参照すべし。京極黄門並に玄旨法師と同じく八月二十日淺草の庵にて歿せしことなど跋文に見えたり。

をだまき集 寫八卷

梁田氏

部立あり悉く文字題なり。土州侯の側室梁田氏の詠草にて、歌數約六千。終に藩士松原恕行といふ人が文化八年歲次辛未十二月書き留むる由記し、且「千世やへむ君がこと葉のつもりしをかき集めたる和歌の浦松」の一首を添へたり。一本東京帝國書館にあり。

本居建正家集 寫三卷

文化二年より同八年の詠を部立して集む。自筆本本居豊頼氏所藏たり。建正は大平の長子、文政二年父に先ちて歿す、年三十二。

縣門遺稿 五卷

文化九年清水濱臣序跋を加へて上梓す。第一集には村田春郷集、第二集には小野古道集及荷田在滿家歌合、縣合家歌合等を、第三集には筑波子集及杉田日記、第四集には楢取魚彦集及白猿物語、第五集には椿まうで記、香取日記等を收む。

五集 寫六卷

松平樂翁公が越前侯に嫁きし妹君の歌を部類し、一二三卷に春夏秋冬を、四卷に冬、五卷に雜、六卷に長歌を收めたるもの。文化十年十二月十五日樂翁みづからかきとゞめぬとあり。卷頭「みふゆつき春し來ぬればなごりなく人の心ぞあらたまりける」以下古風の歌多し。又寶玉集と題せる七卷本あり。子爵松平定晴氏所藏す。

大槻磐水 和歌 一卷

松樹春久をよめる「いく春か君に契りてみどりそふ南の山の松のことぶき」以下二十二首。文政十二年上木の磐水遺稿中に收む。大槻茂楨の序あり。磐水名は茂質、玄澤と稱す。磐水はその號なり。蘭學者。文化十年歿す、年七十一。

高本順歌集 一卷

長瀬眞幸に贈る歌並に序。詠百首和歌。春江花月夜、をりくの歌、阿蘇布理の數篇より成る。宇野東風輯めて肥後文獻叢書卷三に收む。順は熊本の藩儒にて李紫溟ともいふ。藪菰山に代りて藩學の教授となる。文化十年歿す、年七十六。

朝風集 寫一卷

堤朝風

文化十一年加藤茂年の序あり。部立なく教訓的の歌、排佛的の歌を收む。平田篤胤の評あり。例へば「石の上木の下にしもやどれとておふし立たる親はありやも」に於けるが如し。篤胤上に評を加へて、「釋迦と毛蟲はきらひといふ御歌はいかゞ入れ給へ」など書加へたり。井上頼園翁一本を藏す。朝風は鈴屋門人。近代名家著述目錄を著す。天保五年七十歳にて歿す。

波耶資の秋 一 卷

始に歌を、後に文詞教篇を収む。文詞中に後れし雁の序文あり。長谷川菅雄及林耐主の輯むる所、海保草鶴の漢文の序、菅緒の和文の序、城戸千楯及耐主の跋あり。文化十二年上板。◇秋告は尾張の人。林宗兵衛耐主の弟。

後鈴屋大人詠歌 寫一卷

本居 春庭

夜梅を詠める「梅の花さそふ匂に面影の立枝ゆかしき夜半の春風」以下。門人直道・常久・美濃・政年・安守・重門等の詠を附録とせり。文化十一年八月度會勝文の寫せる本神宮文庫にあり。この巻頭の歌は後鈴屋集前篇に採りたり。

後鈴屋集 六 卷

同

前篇後篇各三卷より成る。部立あり。多くは新古今調の歌なり。文化十三年建正の序あり。「日のもととのけさの光や天地のうら／＼かすむ四方の初春」以下。續歌學全書三にはこの篇のみを収む。後篇は「春きぬと向ふ日影のどけさを立ちかさねたる朝霞かな」以下。終に本居有郷の「家の風よにもさそへこのもとにちりて止れる落葉なりとも」の一首を添ふ。天保三年板行す。◇春庭は宣長の男。八衢及通路の著者。文政十一年歿す、年六十六。

春庭歌集 寫一卷

三河の吉田侯松平信順の本居春庭の歌を撰み、文政九年自序を加へたる一本、大河内正敏子爵家にあり。後鈴屋集とは別なる集なり。

林 秋 告

夏蔭和歌集 寫一卷

川喜多夏蔭

部立してその詠を集む。近體の作風なり。「別れては月すむ秋にかへりこむ程は雲井の春のかりがね」「さりともと待つるかひも有明の空になくなる山郭公」に於ける如し。一本津市川喜多太夫氏藏す。草蔭集にも多く取りたり。◇夏蔭は津の人、通稱久太夫。鈴屋の門人。文化十三年歿す、年五十三。

樂山翁集 寫一卷

高 戸 安 貞

東京帝國圖書館に一本あり。但し缺本か。◇安貞は備中鴨方の人、名は楚平、文化十二年に歿す。年六十七。

堯山公和歌集 寫二卷

柳 澤 保 光

數百首の短歌を嗣子保泰侯、女婿外山光施にこひて部立せしめたるもの。上野圖書館に一本あり。日野資枝卿を悼める歌あり。曉夢中によみし名寄源氏物語戀五首などもその中にあり。その例「逢ふことをいつと知らねど音にきく宇治のわたりぞ更に戀ひしき」「かねてより聞傳へたる浦風の明石の浪や袖にかくらむ」に於けるが如し。◇保光は郡山侯、甲斐守と稱す。歌は日野資枝に學ぶ。文化十四年卒す、年六十五。

松平信明歌稿 寫一卷

奉書を横に折りて帳簿の如く綴りたる一冊大河内正敏子爵家にあり。中に嗣子信順の袴着を祝し、新居を賀し、世子と定めたる歌を述べたる歌あり。母の七回忌に秋の懐舊を詠せるあり。◇信明は樂翁公の後をうけて老中の筆頭となる。四位侍従となり、文化十四年卒す。瑞龍院と諡す。

山下安貞翁詠藻 寫一卷

自撰にあらで、集より書き抜けるもの。首に七夕月をよめる『年ごとにけふの夕は欄機の涙くらで月や見らむ』の歌あり。前は缺けたるなるべし。◇安貞は加藤敦善の友。

泡 影 集 寫一卷

林 辰 子

その遺稿を阿倍井武氏の集めたるもの。◇辰子は會津の人、猪苗代町の長山氏の夫人。

後 樂 集 寫二卷

安 田 亨 意

その詠を阿倍井武氏が氏の遺言により前後二編に撰びたるもの。己は未だ見ず。

水 月 詠 藻 寫三卷

堀 田 正 敦

堅田少將の集にて、始二卷は短歌、終一卷は長歌とす。芝山持豊卿に加點を請ひし歌あり。又北村季文にも示されたることあらむ。新古今風の歌多し。『枝たれし岸根の松の陰ばかり結びそめたる池のうすらひ』『風に散る軒の雫かふたつ三つ登とびゆく前のたなはし』の如きその佳作ならむ。雜體の中には數十篇の長歌及旋頭歌を收めたり。文化十三年樂翁の序、翌十四年北村季文の跋あり。この他に年中行事百首一卷、曙夕六十首一冊あり。◇正敦は堅田侯。文學あり四位の少將となり、寛政諸家譜撰輯の總裁となる。天保三年卒す、年七十五。

言 志 集 寫一卷

松 平 定 信

四季の短歌百八十三首を收む。卷頭『あふぐぞよのどかに出る日の光くもらぬ御代の春を迎へて』以下。樂翁公遺書に載す。公の二十歳前後の作にて、河村正道の寫しおけるものに由る。

享 和 日 歌 抄 寫一卷

同

享和三年彌生の頃の作。もと日記中にありしを、歌のあまりに多きにより、文化の末年に抄出して奥書を加へ、更に文政九年丙戌六月五日六十九翁(樂翁)淨書すとある一本、松平子爵家にあり。

文 化 日 歌 抄 寫一卷

同

文化二年の詠を反古よりとりいでてかけるもの。元日朝ぼらけ高樓に登りて朝陽を見てよめる、『のどけさを四方に知らせて朝づく日出るや春の光なるらむ』以下。文政九年八月いさよひ樂翁と奥書にあり。

三 草 集 三 卷

同

よもぎ むぐら、あさちの三篇より成る極めて小形なる本として上梓。

よもぎ 享和の始より文化までの歌その數百七十三首を收む。卷頭の『うきものも程へて後はなつかしき佛見する霜の蓬生』の歌によりて外題となす。

むぐら 文化の始より致仕の時までの歌百二十八首を收む。卷頭『一方にいとひなはてそ八重葎これもみどりの春雨の空』の詠によつて外題となす。

あさち 致仕の頃より文政七年までの歌六百二十餘首を收む。卷頭『柴の戸は人こそ問はね淺茅生の末葉の露も月はいとはじ』の詠によりて外題となす。

文政十年三次に自書して定和朝臣に送れる由記せり。續歌學全書七編にも收む。

な つ 艸 寫四卷

同

歌のよしあしに拘らず自詠を集む。表紙の裏に『ことの葉のしげきまされど花もなき夏野の草ぞ我たぐひなる』

家の集部

の歌あり。清書も夏野の草とすべしとあり。撰方は季文又林家へ尋ねて取扱のことども誌し、文政七八年頃の日記の歌を載せざれば、これを足し、重れるは省き、その餘は皆書き置くべし。その中より猶撰びて、よもぎ・あさぢ・むぐらの三巻を補ひ、これは他見を許さず、秘藏すべきものと定めてあり。一卷は四季、二巻は梅花、月、秋夕、雪の歌を、三巻は旅、述懐、哀傷、即事の歌を、巻四は雜の部とす。

なつ艸附録

寫一卷

松平定信

前書の補篇なり。前書と同じく松平子爵家にあり。

少將定信朝臣詠草

寫一卷

同

文政十年新見正路の寫せるもの。賜芦拾葉卷四八に收む。歌數三百九十二首。

樂翁公歌集

寫一卷

神宮文庫に寛居本の零本あり。『あるを厭ひなきを忍びて』の述懐の歌より桑名へ御所替の折の歌までを收む。

よのひとの友

寫一卷

同

晩年の作にて、活字本。印行の年時明かならず。巻首の歌を外題とす。佐々木信綱氏一本を藏す。

風月集

寫一卷

同

文政十二年卒去の年の春の作にかゝる歌を集めたるものにて、詠史十二首などもその中にあり。侯の孫松平定和の天保十年皇月に副寫したる一本松平子爵家にあり。

十二山海の卷

寫二卷

同

山と海との十二景を谷文晁に書かしめ、堀田正敦、北村季文と短冊に各一詠づゝ歌を添へ、軸物とせるもの。

旅の落葉

寫一卷

同

一名をみるめのなみといふ。松島に遊びたる時の紀行なれど、歌を主とせるもの。文政二年七月の作、樂翁公遺書下卷に收む。

賢歌愚評

寫一卷

樂翁公の歌に清水濱臣の判を加へたるもの、批評の部を見よ。

九日百首

寫一卷

松平定信

堀河初度百首の題により九日の中に詠める二百首詠にて、芝山持豊卿に示されたるもの。巻頭『老そふも忘れよとてか柴の戸にまた月花の春は來にけり』の詠あり。夏艸の附録に入るべく、御點又褒詞はかくに及ぶまじとあり。百首の部を見よ。

堀河後度百首三吟

寫一卷

松平定信が堀田正敦・北村季文と三吟にて、堀河後度百首題にてよめるもの。子爵松平定晴氏藏。

住吉百首

寫一卷

松平定信

百首の部を見よ

雪月花自歌合

寫一卷

同

歌合の部を見よ。

家の集部

藤原集 寫一卷

全集にあらず、信濃にありし時の歌を部立もなく書つきたるもの。中に文詞數篇交れり。古學を傳へたる人ながら、その歌は近體なり。卷首消息の中に「み雪ふる山下庵に旅寝して爪木をりたき春を迎へぬ」の詠あり。文政六年源正春光枝の姓によりて藤原集と名づけたるよし序文に見ゆ。飯島勝休の書入ある一本、飯島忠夫氏藏す。○光枝は文化十三年歿す、年六十四。

ひなのてぶり 寫一卷

光枝の家集。圖書寮松岡本の中にあり。藤原集とは内容同じからず。

中村永主長歌集 寫一卷

文化頃よめる長歌を近き頃榊原頼輔氏の集めたるもの。○永主は大野氏、通稱友雄。文化頃の人、本居春庭に學ぶ。

蕪雨園集 二卷

前場 默軒

部立あり。登々葦武元質の序、海野幸典の跋あり。「村島の塙にさわぐ梢よりにはかにおつるむさゝびの聲」「淀川のいけすの鯉の心にもあらでうき世に住むは住むかは」の如き詠あり。文政元年上木 ○默軒は但馬の豊岡の人。芦庵の門人。文政元年歿す、年七十四。

千代の古道 一卷

奥平 昌高

鷹をよめる歌集、尙百首部を見よ。○昌高は島津重豪の子、中津侯昌男の後を襲ぎ、四位侍従となり、安政二年

大村光枝

竹の五百枝 二卷

竹村 尙規

部立あり。文政二年本居大平の序、石塚龍麿の跋を加へて上木。卷頭「空はまだ雪げなからにはつせ山檜原かすめる春や立つらむ」以下。雜の部には夏目麿麿・高林方朗・石塚龍麿・橋本經亮などと交渉の歌あり。終にその母及妹の詠める歌三首を載す。○尙規は遠江の入野の人。五十に至らずして歿す。

松風吟 寫一卷

權律師 南景

卷頭に月の歌とて三百首よめる中にして「松島やをしまがくれに庵しめて波間の月をながめたらなん」の歌あり。終に「文政二年仲冬三日燗邊にひとり燈火を挑けつゝ、今宵いとどつれ／＼なりければ、年頃よみおきし歌ども思ひ出で、之を口すさみけり。權律師南景」とある一本神宮文庫にあり。○南景は元隨と號す。

霞中吟 寫一卷

同

部立なく端書の歌多し。文政頃の作なり。卷頭「うちかすむ衣笠岡にきて見れば野にも山にも春ぞみちける」の詠により外題となす。六條高倉の學寮に學びし時の歌あり。藏經をくり返す頃などの端書の歌もあり。佳歌少からず。神宮文庫に自筆の一本あり。○外山光實卿の門人か。

うらがれ 一卷

小笠原 秋女

小笠原義章の妻秋女が夫に事へ、膳を捧げ、機を織る暇ごとに竊によみおけるを、歿後一周忌に方り、夫の上板せるもの。文政二年屋代弘賢の序あり。始に「告渡る鳥の八聲ものどかにてまだほのぐらき春は來にけり」の歌

あり。

杜 撰 稿 寫一卷

白蓉軒桂籍を慕へる人にて、文政二年九州に下りし旅中等の歌を載す。作者の傳未だ考へ得ず。 正義

はゝそのおちば 一 卷

堤喜之の母

堤喜之の母の集にて、はしがきの歌多し。歿後一周忌文政三年に清水濱臣の序を請ひて出版せるもの。冬哀傷といふ題にて、清水濱臣以下の人々のよめる追悼歌を附録とす。著者は田中氏の女。嘗て出石侯の北方に仕へ、二十五にして堤氏に嫁ぐ。

誠拙禪師家集 寫一卷

景樹が禪の師にして、歌は景樹に學びたる人。「池水の深き濁にしみてこそ花の姿も清くはあるらめ」「手にむすぶ清き流の関伽の水わが御佛の身にもしむらむ」「こそぞ春又來む春もかくやあらむ風にほころび風に散る花」の如き逸氣を帯びたる歌多し。熊谷直好淨書の本鎌倉回覺寺中にあり。誠拙は伊豫の人、禪門の名僧にて、鎌倉回覺寺の佛日庵に居り。無用道人と號す。文政三年歿す、年七十六。

櫛 園 集 一 卷

小 寺 清 先

四季雜に部立してその子清之が文政五年に撰べるもの。拾遺をも加へ、季弟の上梓せるもの。卷頭「皇の御代もこゝより沖つ波霞そめたる高島の春」以下。菅茶山及清之の序、廣文の漢文の後序あり。清之の集とせる説は誤なり。清先は備中笠岡の人、通稱常陸介、櫛園と號す。文政三年歿す、年八十。

鑑壽公詠草 寫十四卷

立 花 鑑 壽

和歌の詠草八冊、句寄六冊立花伯爵家にあり。富士谷御杖の朱評を加へ奥書を添へたるもの多し。その末に成元拜閣と記したる所あり。成元は御杖の前名なり。相當に長年月に互りて富士谷家に見せしめられたりと見ゆ。左に各卷に於ける卷頭の歌句を擧ぐべし。一冊「足引の山の白雲とけとけす思にこりて立つ霞かな」以下。一冊「つむとともたまりやはする雪消えぬ春日の野邊にもゆる若菜は」以下。一冊「いつとなく四方のけしきのかはれるは霞や春をはやく知りけん」以下。一冊「春たつと思ひあへぬを山の端にいづる日影のうちかすみつつ」以下。一冊「七夕の袖の涙の雲はれて逢夜うれしき月を見るかな」以下。一冊「葉月望の夜の作。二冊當座の作。句寄一冊「若い時嫌ふたことも草の庵」以下。一冊「夏かよき枕なりけり淡路島」以下。一冊「貫句寄と外題し、相口のつきぬ嘶の樂しくて」以下。下略。鑑壽は柳河侯。明和九年父鑑通の後を嗣ぎ四位侍従となる。文政三年卒す。

清 島 集 寫一卷

本 居 清 島

文化十一、十二年の歌を部立して集む。首に「風たえてけさより浪の初汐に春立ちそむる吹上の濱」の歌あり。本居豊頰氏一本を藏す。清島は大平の二子、通稱を左衛士といふ。父に先ちて文政四年に歿す、年三十三。

瓢 屋 負 草 寫一卷

信州飯田の堀侯の家臣某の集にて、文政六年五月十七日侯に陪して參觀の途次詠める歌あり。例へば「いくそたびいゆきめぐれど富士の根は高きが上も高き山かな」の歌の如し。岡澤定秋と八王子に遊べる歌あり。小國重年と交ありしが、その身まかれるを悼む歌あり。末にお傍題狂歌百首あり。その序歌に「山は不二花は三吉野紙は

家集の部

美濃、月は更科、書は日本紀」といふあり。飯田方言寄歌十八首をも添へたり。稿本慶大図書館にあり。

初度蓬蘽集 寫一卷

齋藤彦麿

芦假庵集より抄出する所、始六卷は部立を設け短歌を列ね、七卷には長歌、八卷は文詞とす。雑部に雜粗・天竺・阿蘭陀・朝鮮をよめる短歌あり。その側に滿洲文字・梵字・蘭字・諺文にて音を綴りたり。自序中に文化・文政・兩度の失火にあひしことなど記せり。文政二年淨書す。

蓬蘽集 寫七卷

同

續蓬蘽集 寫七卷

同

後蓬蘽集 寫七卷

同

いづれも一より六までは短歌、七卷を長歌及文詞部とせり。蓬蘽集は文政十二年の序あり。中に文化三年三月四日高輪の火事にて初度の芦假庵集二十餘卷焼失し、文政十二年佐久間町の火事にかかりしことを述べたり。後集には天保八年六月の序あり。著者七十歳の時のものとす。新庄侯・高田侯等と交渉の作も少からず。家藏本。

阿蘇惟馨卿集 一卷

一名先君子歌集といふ。男惟治の撰する所。文化・文政頃の歌多し。肥後文獻叢書第二編に收む。天保三年惟治の跋あり。○惟馨は阿蘇大宮司、安永二年に生れ、文化十四年從四位に叙せらる。文政三年卒す。阿蘇家傳・文書略・都麻志良辨等を著す。

擬烟舎詠藻 二卷

村田泰足

部立を設け近體風の歌を集む。大菅公圭の教に基づき契沖及徹書記の歌風を好みたり。「鶴ぬひし霞の衣あたらしく着たる春とも見ゆる空かな」「ありし世にかへる日知らで立めぐる身のたぐひなる水車かな」の如き一ふしおかしき歌多し。文政七年小原君雄の序を加へ、天保二年彦根藩學弘道館にて梓行す。○泰足は近江の人、文政三年歿す。

泊酒舎歌集 四卷

清水濱臣

歿後六年養子光房の輯めたるもの、八卷四冊とす。六卷本もあり。「釣の糸に吹く夕風のひきみえて入日さびしき秋の川つら」「みそぎせしあと川柳一葉ちり一葉流れて秋風ぞ吹く」「葦咲き鈴菜花ちる春の雨に心ある人や野路をわくらむ」の如き優雅なる什多し。文政十二年容安軒主人の漢文序、源政醇序、光房跋あり。續歌學全書八編には抄出して擧げたり。尙泊酒雜題百詠あり。百首部に出す。

泊酒翁長歌文詞 寫一卷

濱臣の長歌及文を輯む。何人の手になるを知らず。小中村陽春廬翁の寫本南葵文庫にあり。

清水濱臣詠草 一卷

自筆詠草に村田春海の評を加へたる一本井上頼園氏藏す。卷頭に鶯入新年語の詠あり。末に述懐百首あり。中に「人しらぬおどろがもとの苔清水うづもれてのみながらふるかな」の如き歌あり。

妙修尼詠草 一卷

「あけてけさ霞そめたる空になほ日影のどかに春は來にけり」以下部立を設けて集む。作者は萩原宗固の門人、

家集の部

家の集部

文化二年の詠などもあり。

黄中詠藻 四卷

香川景柄

部立を設けその所詠を集めたるもの、堂上の風を守る作多し。嘉永四年上板、四卷合刻せるあり。◇景柄は景平の子、黄中はその號なり。徳大寺家に仕へて従六位陸奥介に叙せらる。文政四年歿す、年七十七。應月堂第四世。

碧巖百葛藤 一卷

巨海東流

宋の佛果圓悟禪師の碧巖録の百則をよめるもの。文政四年の自序あり。巻頭初則聖諦第一義を詠める「いでも見よ乾坤の的のらぬ弓あたらぬ箭こそはづれざりけれ」以下。◇巨海諱は東流、越後の人、確房といふ。嘉永五年歿す。

櫃陰歌集 寫二卷

輿石御夏

一卷は長歌、一卷短歌の部にて、寛政より文政頃までの作を収む。長歌の部には文化四年古事記傳を詠みての詠あり。又寂照寺月僊法師行狀記を見て詠めるもの、澁谷不二をよめる長歌等あり。戸川安恵及石州の士津田河田氏などを友とせるはしがきの歌あり。文政四年の日附ある歌あり。慶大本。

加豆羅能於知葉 一卷

久永眞事

長短歌を載す。文政五年濱臣の序、男勝明の跋ある一本學習院にあり。◇眞事は日野一位の門、旗下の士、始の名は勝信、退隱後染古と稱す。長歌をよくす。文政四年歿す。年六十四。

三集體題詠 寫二卷

大川 栞

三代集にならひて詠めるよし文政六年の自序に見ゆ。吉益東洞及羽倉先生賀歌等あり。上野圖書館に一本あり。

椿園歌集 寫一卷

巨勢 利和

歌員約五百。巻頭に「こしかたも今ゆくすゑもかはらめや春立そむるけさの心は」の詠あり。薄様小本半枚九行づゝ四十九葉より成る、白筆本あり。狩野亨吉氏所藏。◇利和は幕臣、日向守と號す。樂翁公及木下利徳などの贈答あり。

松山集 寫二卷

塙保己一

部立あり、その子忠實の輯むる所内閣文庫に忠實淨書の一本あり。富士をよめる秀吟「言の葉の及ばぬ身には目に見ぬもなか／＼よしや雪の不二の根」の歌もあり。又總隱集と題する一本清水千清叢書卷三に收めたり。蓋し始め總隱集といひ、後松山集に改めたるもの。◇保己一は盲人にして群書類從正續千八百二十卷を編む。文政五年歿す、年七十七。

露殘集 寫三卷

戒言

首に「津の國の浪華の芦のかれながら霞いろそふ春は來にけり」の歌あり。◇戒言は覺性院といふ。松坂の眞言宗の寺僧にて、鈴屋翁に學び、翁も旅中より師におくりたる歌鈴屋集に見ゆ。「三吉野やくづるる雪のおもかけに櫻ふきくる山おろしの風」の如き新古今調の作多し。

おいのさち 寫一卷

藤本よし房

耳順賀詠六十首、四季雜組題三十首、かな句題、還曆賀詠六十一首等を載す。文政六年の自序あり。

稻葉集 二 卷 本居大平

部立を設けて、上巻には四季、下巻には戀雜に關する近風の歌のみを集む。「あら玉の立つ年ごとに君が代を千代にといはふことぞ嬉しき」以下。文政七年三井高匡の序を加へ上板。集名は稻掛の舊姓に因みたるなり。續歌學全書五編及本居全集にも收む。この他稻葉集別巻と題し文化元年の日附ある一本本居家にあり。

稻葉集題作部目録 寫一卷 同

文化八年以降によみし歌の年次目録なり。但し畫讀は悉く省きたりといへり。

藤垣内集 寫一卷 同

古調の長短歌を年代順に列ぬ。本居豊顯氏その自筆本を藏す。續歌學全書九編にはその中の長歌のみを收めたり。

大平畫贊歌 寫一卷 同

白詠の畫贊の歌を集む。初に立春の富士の繪朝日ありといふ題にてよめる「朝日かげかすみに匂ふ不二のねの雪の光や春の初花」以下。自筆本本居豊顯氏所藏。

松の下葉 寫一卷 同

「夏草のしげみか下に秋風のかくろひかねてなびく涼しさ」以下の歌を收む。自筆の一本本居豊顯氏所藏たり。稻葉集所載のものは別本なり。

藤垣内遺稿拾遺 寫一卷 同

像の上に題せる「眞直なる倭心にまなびては神の誠の道は得てまし」以下の歌を收む。本居豊顯氏一本を藏す。

名草の濱菴 一 卷 本居大平

文政六年十月養父宣長に従ひて紀伊に旅せし時の日記にて歌を旨とせるもの。萩原廣道序を加へ安政二年上木。卷頭「あさもよし紀へゆく君へ伴ひて朝立いづる旅衣かな」以下。

己未紀行 一 卷 同

寛政十一年正月大平が養父宣長に従ひて再紀伊に至りし時の紀行にて、是も歌を旨とせるもの。卷頭「春風にけさは雪げの雲はれて峯もあさかの山ぞまぢかき」以下前書とともに本居全集に收む。

倭心三百首 一 卷 同

道の大意を知らしめむ爲、文政五年の冬詠出せるもの。歌題も神の幸、君の御蔭、父母の恩、夫婦の睦び等、道に關するもののみとす。例へば神の幸の歌には「天地のそこひのうらにゆきとほりみたぬ方なき神の幸」の如き君の御蔭には「大船の思たのみて我君に仕ふる君のみかけ貴し」の如き、父母の恩には「限なき親の恵は己が身の老いて後しもましておもほゆ」に於けるが如し。賀島正根が宣長の玉銚百首とこれとは道の父母云々と天保二年の序にいへるが如く、古學の教典の如くに用ひられたり。

落葉の錦 一 卷

嘉永四年鈴屋翁の五十年忌に當り、宣長・大平兩大人の短冊・懷紙等を集めて上木せるもの。終に自餘展覽目録あり。紙糊庵の企になるよし内達の序に見ゆ。

家集の部

秋草 寫一卷

本居ふぢ子

文政八年の詠を部立して集めたるものにて、首に「子日して老せぬ千代のためしには若菜やつまむ松やひかまし」の歌を載す。自筆の一本本居豊頼氏所藏す。◇藤子は本居大平の女、内遠に配す。

石原正明詠草 寫一卷

石原喜左衛門一萬百詠の内第七卷とある自筆本一卷大島雅太郎氏藏たり。首に百首あり。曉立春をよめる「すべらぎの星を唱ふる庭よりや雲井の春は立ちはじむらむ」以下。小林歌城及昌山常操の朱墨兩點あり。表紙のうらに「正明が歌にあふ事を神に佛に祈れどもはつせの檜原三輪の杉村とみたりしを當時人々大にめでて、夫より渾名して佛喜衛門と呼びたりき。此名不雅ならば後生歌の田舎をりきほい組の鳥の聲のやうにてをりく」とて笑ひあへりしも今よりは五十餘年の昔になりぬ」とあり。

松言葉 上下一卷

藤原保之

一名月明集といふ。題は悉く假名を用ふ。芝山持豊・本居宣長の題歌あり。末に言靈辨を附録とす。文政十年上木。

最樹院様御詠草 一卷

一橋治済公の歌稿にして成島圖書頭司直添削を加へたり。その始に公の三十三回忌に成島の手向奉りたる歌反承体院權中納言君を悼む詞を添へたり。◇治済は宗尹公の子、民部卿從一位准大臣に叙せらる。文政十年薨す、年七十七。後太政大臣を贈らる。

水月集 一卷

家集の部

治済公の夫人遺子の集にして、中に實生の詠二百番の詠あり。一例熊野「百敷の都の春をよそにしてかへる東の花やいかなる」班女「取かはす花の扇をかたみとてかへしもつゐの妹と脊とぞなる」に於けるが如し。鈴木新の長き序あり。

蕪月集 寫一卷

尾崎雅嘉

家集中住なるもの三百首を抜き部立せる一本東京帝國圖書館にあり。天保三年長田田豆雄の寫にかゝる。群書一覽の作者、和歌明題部類等の條参照すべし。

高垣是正家集 寫十卷

高垣是正

草稿本にして、所々點者の評語、尤珍重とか、面白しとか、をかしとか、可然等、書入れたる一本帝國圖書館にあり。前場默軒・田山敬儀等と親しかりしこと雜の歌に見えたり。蘆庵の歌風を庶幾せる一人か。作者の傳記未だ考へず。

小補竹葉集 寫一卷

川島蓮阿

門人好辨の撰ぶところ歌數七百六十六首、内閣文庫に一本あり。◇蓮阿は濱臣の友人、紅塵類題集の撰者。文化十年歌論庵歌合等を参照せよ。

枕の月 寫一卷

田中大秀

文化二年海量法師が飛驒に來りし時、その東道となりて高山附近を旅せし紀行に、歌を入れたるもの。萬葉詞の歌三十七首を收む。

荏野草稿 寫六卷

同

牧野英一博士所蔵の大秀自筆の稿本は六卷あり。井上通泰氏所蔵の稿本は一卷にて、巻頭春曙を詠める「花鳥の色香をこめて打かすむ山邊ゆかしき春の曙」以下の詠を収む。田島春園氏の寫せる一本は單に荏野集と外題せり。尙牧野博士の抄出せる荏野翁歌文抄一卷あり。

桂 葉 集 寫一卷

田 中 大 秀

文政四年より同八年頃までの歌を録せる自筆稿本大島雅太郎所蔵。巻頭「五月雨の晴ぬるけふの空の色に花咲きにけり庭の紫陽花」以下の諸詠を収む。

桂 園 愚 集 寫一卷

元田脩三氏の藏せる一本あり。尙大秀の著作の書は同氏の田中大秀並門下遺著遺墨展覽會出品目録を参照すべし。

桂 園 一 枝

香 川 景 樹

部を四季、事につき時にふれたる、戀、雜、雜體に分ち、數百首の歌を集む。概して清新の歌多く雜體中には俳諧歌甚多し。文政十一年平清樹の序あり。「召せや召せ夕げの爪木早くめせ歸るさ遠き大原の里」はたおりめ梢かりこむ木缺の音にひねもす交りてぞ啼く」の如き清新なる作、「落したる誰か胤ならむ山里の垣根がくれの撫子の花」姑につまれし嫁菜あはれその時すきてこそ花さきにけれ」の如き諷諭の巧なるもの。「納屋にゐてこかひする子のつまえらみ田もやり畔もやるといふものを」の如き俳諧の趣あるもの等、出色の作多し。近世歌集の中特に注目すべき集なりとす。景樹出で調の説を唱へ、歌に自由清新の氣を與へ、又舊來の拘束を斥けたるより、この書に對する批評辯難の書多く出でたり。宮下正岑の桂の曲枝・信田稻麿の桂園雜歌撰・秋山光彪の桂園一枝評・

中川自休の大ぬさ・丹羽氏暉の大ぬさ辨・相川功垂の幣のよるせ等列擧しがたし。批評の部を参照すべし。

桂 の 落 葉 二 卷

門人仲田顯忠が天保十四年に集むるもの下谷青雲堂にて出版す。一名を續桂園一枝ともいふ。

桂 園 一 枝 拾 遺 一 卷

門人の集むる所嘉永二年七回忌にあたり上木。渡忠秋の序あり。この書にも小林歌城の評あり。これを駁せる仲田顯忠の再評あり。批評の部を見よ。

汐 干 寫一卷

景樹の長歌を梁岳上人の批評せるもの。井上通泰氏一本を藏す。

景 樹 短 冊 帖 一 帖

景樹の歌を抜きて嘉永四年に上木せるもの。始に元日によめる「年こえて今はとたゆむ眠こそまづ意の始なりけれ」以下三十五首を収む。

繪 島 の 波 二 卷

景樹の書題の歌のみを集めたるもの。撰者村山松根。明治十五年高崎正風の序を加へ同十五板上板。

桂 園 和 歌 見 聞 集 寫一卷

見聞の懷紙短冊の贊などより、その他またぬ青葉・桂花餘香・中空日記・鴨川集・打聽鶯蛙集・鯉玉集・近世名家集・武藏野集・詠草奥書より香川景樹の歌を拾蒐せるもの。慶大本。

家集の部

墨田川二百首及句題 寫一卷

樂翁公評して金槐集の流なりといへり。作者は石濱に遂願樓を設けて住む。文政十一年庚子の神無月嗣子實原の跋あり。清水千清叢書十五に收む。

柿園集 寫一卷

文政十一年堀河百首題にて十五人の同志とよみし時の詠等を集む。○務は備中の人、始は木下幸文に就き、後景樹に學ぶ。柿園と稱す。安政六年歿す、年六十八。

小野務

冷泉爲則御詠歌 寫一卷

文政十二年丑六月堀河次郎百首題にて詠める百首、卷頭「あけてけさ人の心も物ごとくも改まるてふ春は來にけり」以下及同十二年八月十五夜の月百首、卷頭待月、「暗れ渡るこのゆふぐれの影見んと」の詠以下。その他行幸法樂の歌をも收めたり。門人寶靜の寫せる一本慶應大學にあり。○爲則是爲村の曾孫、爲章の子なり。正二位權大納言となり民部卿を兼ね。嘉永元年薨す年七十二。

和歌日々集 寫一卷

鍋島土佐

卷首「きのふまでながれてはやき年浪もけふあらたまの春にのどけき」以下。文政十一年九月朔日より同二十九年日までの自筆草本佐賀市鍋島侯爵家にあり。○土佐は佐賀鍋島家の國老、名は直喬といふ。

けぶりのすゑ 寫一卷

千枝子

全集は焼失してその殘缺なるより、それを集め名に負はず。歌數二百餘。○千枝子は橋千蔭の門にして一名を香

家集の部

習尼といふ。築地眞光寺の後室なり。春風來海上の題「伊豆の海やしほ踏ふきこす朝ごちにあくる箱根の雪の村消」などその秀吟たるべし。

三輪信善詠草 寫一卷

部立を設けて「おきいづる朝の窓の梅が枝にけふを初音と來なく鶯」以下の詠を收む。中に「九重の玉しく庭に武夫のよろひかたしく世とはなりにき」の如き詠あり。文政丑年の撰にかゝる。水戸の雨谷毅氏一本を藏す。○信善は水戸の藩士、通稱友右衛門、觀勝堂と號す。

承天公家集 寫四卷

松平信順

部立を設けてその詠を撰せるもの。春の歌特に多し。卷頭「空さえて雪はふれども新玉の年のこなたに春は立つらむ」以下。別に一卷本の承天公家集あり、月前雁をよめる歌より始まる。四冊本とは別本なり。尙大河内正敏子爵家には信順侯の詠草及長歌短歌稿あり。○信順は吉田侯。文化十四年信明侯の後を承け、四位侍従となる。

不染齋歌集 寫五卷

古田廣計

天明五年より文政十三年までの歌を集む。原本靜嘉堂文庫にあり。○廣計は豊前の岡の人、溫古堂といひ、又淵黙と號す。始め小野資文及海量に學び、後千蔭及春海に従ふ。

島山常操詠藻 寫十三卷

文政四年より十三年までの詠草、歌數約千五百首六冊とす。その以前のは古道眞弘に掠奪せられたる由記せり。又島山梅軒詠草と題する寫本七冊は天保十年頃までの詠を集む。共に東京帝國大學に自筆本あり。

島山梅軒詠草 寫一卷
天保二年如月よめる戀百首、述懐百首、旅百首と、友人木村定良が山家百首に倣ひて天保四年によめる山家百首、山家後百首とを収めたる自筆本一冊、帝國圖書館にあり。梅軒は常操の號。

山¹²⁴佐喜草 二卷 同
文政元年より天保二年までの歌六百首を輯む。本間游清の序。八木直賢の跋あり。天保八年上板。

千三百首分歌 寫一卷 同
梅花・郭公・月・紅葉・雪・戀百首等、天保二年より同五年までに詠める千三百首の中三百五十五首を抽出せるもの。天保六年孫重興の寫せる一卷、天保九年の作にかゝる花百首といふ一卷あり。共に東京帝國大學にあり。

花月集 寫一卷 同
待花より暮春花まで及天保三年四年の月を詠める歌等を載す。東京帝國大學に一本あり。

墨陀川堤記 寫一卷 同
天保八年彌生望、島山常操等の墨堤花を見る歌日記にて、次に墨田川贈答文、櫻園(定良)の返歌等を合綴す。

武藏野古草 一巻 同
島山梅軒の七十以後の歌を集めたるもの。天保十二年平野氏喜の序を加へ上板す。始に梅徑寒苦發清香といふ題をよめる。「世は春になりにつらな冬ごもり思ひたえにし梅の咲きたる」「春なれやかきつばたてふ草ありてさかり三たびの花も咲きけり」の詠あり。大本美濃紙板。彰考館本。

11/30

通年子詠草 寫五卷

堀通年子

文政八年より天保二年までの歌二千三十八首を四季、戀雜に分つ。◇つね子は堀一水の妻、初名を雅子といふ。

雲錦翁家集 四巻 賀茂季鷹
四季・戀・雜・壽・旅・別離・哀傷・述懐・雜體・俳諧・長歌と部を立て「加はれる月だにあるを一年に足らずと春のいかで立つらむ」以下を四巻に叙づ。長治祈義の序、垣本雪臣・平春蔭の跋を加へ、天保二年楓樹園藏版。「つら杖ぞま

づつかれける石上ふるき姿のかはりゆく世は」の如く、をかし味を旨とせる作多し。雲錦は吉野龍田の花紅葉を植ゑし亭の名、それに象りて表紙には櫻の花と紅葉とを散らしたり。◇季鷹は有栖川職仁親王の門、狂歌を善くす。天保十三年卒す、年九十一。

垂雲和歌集 一巻

澄月

歿後二十八年に宮下正岑の撰めるもの、歌數五百九十五首。天保二年正岑の序あり。同九年匡逸が八十歳老眼にて寫す云々の奥書には垂雲軒澄月和歌集と外題せり。續歌學全書六編に抄出して載せたり。別に千首詠ありさやさや草紙に評せる如く、一癖ある詠風なり。例へば「怠のひまを鼠のあながちに過ぎゆくものは月日なりけり」「住まれずばすまでぞあらむこの世にも濁江ながら運咲くなり」に於けるが如し。◇澄月は備中玉島の人、垂雲軒と號す。武者小路實岳の門。寛政十年歿す、年八十二。

僧良寛歌集 一巻

越後の奇僧良寛が歌集。長歌、旋頭歌、短歌と次第す。萬葉を好み、名利をすてゝ子供と遊び、毬を弄び、托鉢

せる奇僧の俳その作に見はる。「行く秋のあはれを誰に語らまし藝こに入れてかへる夕暮」「飯こふと我が来しかども春の野にすみれつみつ時を經にけり」「墨染の我衣手のゆたたらば貧しき民をおほはましものを」に於けるが如し。長篇に萬葉の調あり。村山半牧これを撰む。後、村上恒二郎明治十二年に上板す。◇良寛は越後の出雲崎の人。若くして家を出で、備中の玉島に遊び、二十年に歸國し、國上山の五合庵等に住す。天保二年歿す、年七十五。詩も善くし筆蹟甚佳し。又輪池叢書に收むる良寛子歌と題する一本あり。歌數多からず。

沙門良寛和歌集 一 卷

良寛及其の子由之の筆蹟を載せ、良寛の小傳を掲げ、歌五百十九百及詩を收め、附録には、俗語、俳句、題文をも添へたり。大宮季貞の撰にて、近時警醒社より發行す。

兒山紀成調集 寫三卷

一名を松の落葉といふ。天保二年霜月、男紀言の序を加ふ。卷頭「玉くしげ明けてみれば一とせは一夜の夢のこちこそすれ」以下、この一卷原本伊勢菰野の人宇佐美祐之氏所藏。又氷室長翁所藏本は三卷あり。雜の部には端書きのある歌多し。渡邊度水氏の補へるはこれより十首多し。熱田の人貝谷鉦二郎氏藏本は長歌二卷、文章三卷あり。この他享和元年より天保二年十一月に至る三十ヶ年の日記ありといふ。始め伴蒿踪及有賀長收につきし十ヶ年の歌はこの集には取らざる由源厚之の跋に見ゆ。◇紀成は桂園門下。天保十一年歿す。

清貞詠草 一 卷

圖書寮に一本あり、文政頃の歌を輯む。◇清貞は加茂季鷹の門、安節堂と號す。

源清貞

清貞古體梅の歌 寫一卷

菅廟に奉納せし梅を詠せる古體倭歌にて、歌數六十餘首。萬葉假名、平假名兩様書並べたり。若き時の作にて、加茂季鷹の一覽を乞ひ、天保四年再清書せる旨記せり。圖書寮に一本あり。

源清貞

實所詠草 二 卷

その所詠を部立して天保三年板行せるもの、「立よりて影もうつさじ流れてはうき世へいづる谷川の水」の如き詠あり。

村山素行

實所詠草糾纏並同辨 一 卷

實所は素行剃髮後の稱、その詠草を板行せしを、天保三年伊庭秀形の難ぜしを、門人源房輝の辨ぜしもの。圖書寮本。◇素行は一橋家の歌人、寛政十年剃髮して實所と號す。天保六年歿す、年六十三。その傳は岡田眞澄の碑文に明かなり。

千古歌集 寫一卷

文政二年より同十三年迄の歌及び年月不知の歌を載す。異本あり。一柳越智千古家集と外題せるものあり。一本には野口正武の評を下したるあり。千蔭門中第一の歌人にて、その中「江林にねぐらしめつる白鷺のおのれ一むら暮れ残りけり」の如きは其の佳作の一なり。◇千古はまた長歌にも秀でたり。江戸の人。豫山又章堂と號す。始め清原雄風に就き、後千蔭の門に入る。天保三年歿す。

一柳千古

松蔭舍遺稿 寫一卷

部立してその詠を収む。天保三年の自筆本あり。岡部春平の集なるか、春平がことは七禁考の條を参照せよ。

野乃舎集

寫一卷

大石千引

又布屋集ともいふ。清撰のものにあらず。清水千清叢書卷一に収む。「身は老いて杖つくばかりなりにけり腰折歌をよむとせしまに」の如き述懐あり。◇千引は千蔭門、大鏡觀短抄及言之梯の著者。星廬と稱し、又野廼舎と號す。天保五年歿す。年六十五。

名花園和歌集

寫一卷

鍋島周子

卷頭「雪はなほふりしく空に置たつ年に二たび春は來にけり」以下、部立してその詠を集む。佐賀市鍋島侯爵家内庫所に一本あり。

萬樹院和歌集

寫一卷

鍋島文子

卷頭「あけわたる空もみどりに薄霞棚びきそめて春は來にけり」以下部立して集む。一本佐賀市鍋島侯爵家内庫所にあり。◇文子は鍋島紀伊守直員女、同族山城守直賢に嫁ぐ。寶曆十一年六月に生れ、天保五年歿す、年七十四。

三輪秀福集

寫三卷

卷頭に盛岡にて初春雪を詠める歌を挙げたり。一卷には文政十一年より同十三年までの歌を収め、二卷には天保二年三年の詠を、三卷には三年より四年までの歌を集めたり。仙臺の鈴木芳矩に交渉ある歌見えたり。鳩峰山にて佛國禪師に逢ひたる時の歌あり。作者は東北の人なるべし。天保二年に七十二歳とあれば、寶曆十二年の生な

るべし。慶大圖書館本。

斐雄歌集

寫一卷

井上通泰氏一本を藏す。續歌學全書第十編にその本より抄出して出せり。才氣のかちたる歌多し。例へば「夕立の雫まだちる吳竹の葉ごしに見ゆる夏の夜の月」「さゝぎなく算の上の木の間より窓あたゝかにさす朝日かな」に於けるが如し。◇斐雄は備中吉濱の人、桔梗園と號す。天保五年歿す、年四十九。

菅沼斐雄家集

寫一卷

正宗敦夫氏が斐雄の歌集日記その他三十部の書を参考して編める全集一卷、明治三十九年印行す。

岡田眞澄詠草

寫一卷

文政年間の所詠を年次順に記したる稿本大島雅太郎氏藏す。◇眞澄は儒者寒泉の子、隣月樓と號す。加藤千蔭の門、假名考を著す。

田能村竹田集

寫一卷

歌數凡三百餘、畫人の歌として叙景歌に面白きものあり。◇竹田は岡藩の畫家、天保五年五十九にて歿す。

御山落集

寫二卷

山内道古

上卷には長歌四十八篇、下卷には長歌十五篇、短歌八十餘首を収む。上卷の歌は、天保五年その師本居大平に批評を乞ひしもの、自序あり。古體の歌のことを論ぜり。本居豊頴氏一本を藏す。◇道古は駿河岡部の人、通稱を新四郎といふ。

唐 桃 集 一 卷

涌蓮及蘆庵に學びし父惟清の感化をうけ、儒者ながら歌を好み、その會心の作を自ら選せるもの。廣島縣竹原の頼家にあり。郡宰となりし頃の作、『民草に惠の露はかけもせで冷ゆるしもとを置くが悲しき』『つらづゑをつく』尙も思ふかな今日の訴をきゝや惑ふと』の如き、新しく他に比少き作も交れり。この他蚊百首も詠じたりといふ。◇惟柔は杏坪と號す。頼山陽の叔父、天保五年歿す、年七十九。

頼 惟 柔

高 尙 家 集 寫 一 卷

四季の部立を設けてその詠を收む。若狭の妙玄寺義門が語格上よりの批評を加へし一本井上通泰氏藏す。尙高尙自撰の歌集一卷あり。天保頃までの歌を收む。同氏の所藏たり。

藤 井 高 尙

夢 の し を り 一 卷

天保五年吉野櫻狩の時の紀行にて、歌を旨とせるもの。

松 田 直 兄

も と 子 家 集 一 卷

縣門餘稿の五に收む。天保六年壽賀子の序あり。◇作者は眞淵門下。すが子も同門、紀伊徳川家に仕ふ。

法 道 和 尙 詠 歌 集 一 卷

天臺欣淨沙門法道の行狀の附録たり。沙門法龍の集むる所、天保六年上板。

は な の な ご り 一 卷

その詠を部立し、天保六年上梓せるもの。麻績一の跋あり。◇一貞尼は加藤千蔭の門。

村 野 一 貞 尼

花 五 百 首 一 卷

橘 樹 園 早 苗

寄古歌花五十首、吉野花五十首、名所花百首、名花二十五首、出方題花二十五首、墨田川花五十首、江戸名所花百首、吉原花百首、以上合して五百首。中には狂歌めきたるも交れり。天保九戌初冬上梓。叙にいへるあり。さく花五百首は早苗がすさみにて、人に見すべくもあらねば、唯一篇としてつづり置きたるに、男閑淵が許に或日誰とは知らず、下の書を送りて去りぬ。見れば、『淵莫空興編、時非無板例』是閑淵が一夢なりとて、さめて予に告げて請ふ。因てまづこれを櫻木にものすることをゆるしつとあり。一本京都帝國大學にあり。◇作者の傳記は未だ考へ得ず。

田 盧 家 集 六 卷

長 瀬 眞 幸

部立を設け數百首を列ぬ。『雲のゐる阿蘇山あらし吹さえて霰たばしる御狩野の原』の如き古調を帯びたる作、『鶯の聲のあやをもおりそへて風に亂るゝ青柳の糸』の如き近體の作相交れり。戀の部を立てざるは高本紫溪の感化によるか。天保八年中島廣足跋を作る。肥後文獻叢書卷二に收む。◇萬葉集佳調の撰者、その條を見よ。

山 櫻 戸 寫 一 卷

伊 藤 常 足

文化六年及文政六年伊勢・大和・山城地方へ旅行せし時の歌を人の請により自抄出せるもの。天保七年の稿本に同十一年再考を加へたる一本南葵文庫にあり。萬葉調の歌多し。尙青雲和歌集の條参照すべし。

春 鶯 集 三 卷

大 久 保 忠 眞

文化七年より天保七年までの歌を集む。題名は卷頭の歌に由る。天保十三年七回忌に方り、再昌院北村季文、序

家集の部

をつくり、後刊行す。◇忠貞は小田原藩主、始出羽守と稱し、後安藝守と改む。文化七年四位侍従に叙せらる。天保八年卒す、年五十七。私に謚して彰道公といふ。

雲月花愚草

寫一卷

立綱

小倉百首を一句三句五句に据えてよめる三百首なり。尙百首類を見よ。

浮草通餘留倍

寫一卷

同

嘉永元年立綱の十三回忌に方り、門人江澤講修の撰みて上木す。全集に加へし天保七年九江亭の主人游清の序を載す。北條時郷の奥書あり。長歌文集は近刻とあれど出版せざりしか。◇立綱は近江の人、大寂庵と號す。海量に學ぶ。天保七年歿す。

袖の露

寫一卷

畠山俊子

畠山常操の女の集にて部立あり。一本東京帝國大學にあり。◇俊子は天保八年に歿す。

並河基廣詠草

寫一卷

二十冊ばかりありといふ。その一冊には天保八年の詠を收め、終に花仙境の記あり。彌富濱雄氏その一冊を藏す。◇基廣は富士谷御杖門、樟屋と號す。天保十二年歿す、年五十二。

春雨抄

寫二卷

高井宣風

道隆及男八穂の序、在原成功の跋を加へ、天保八年上木。部立あり、雜には詞書の歌多し。慶大本。◇宣風は鈴屋門、國學者傳記集成に八穂と同人とせるは、父子を一人と誤るなり。

鏡室集

寫一卷

生田萬

一名を大申道人謾稿といふ。文政四年生田瞭の序あり。詩文、日記及歌を收む。原本柏崎の市川記間太氏所藏。井上頼園翁謄寫の一本無窮會にあり。

加賀美能牟呂乃於毛迦氣

寫一卷

同

一名を生田大人歌集といふ。四季・相聞・雜・挽歌・旋頭歌・回文・片歌・長歌約五百首を收む。萬葉調の作多く、述懐の歌多し。讃酒の歌などもあり。洪水を悲む長歌、杉山録磨と古學を論へる長歌あり。その作風「一杯の酒は千まりの藥よりいく藥ぞも飲みにのみてな」「上毛野佐野の舟橋うき沈み世をなみなみに渡りはてめや」等に於けるが如し。井上頼園氏の跋あり。原本は越後柏崎町八阪神社の祠官小石川宗一郎氏藏すと。◇萬諱は國秀、享和元年館林に生れ、天保七年越後柏崎事件を起し自刃す。年三十七。平田篤胤の門下にて鏡室と號す。

大菴函の塵

寫一卷

大倉大三

洛東奇人大三の遺稿を集めたるもの。歌學隨筆花の鏡を加へ、天保丁酉八年開板。馬淵義實の跋文あり。終に一瓢軒藏著作目錄を附せり。

杉葉集

寫一卷

部立あり。一部ごとに年月の序に列ね、文政二年より天保八年までの歌を收めたり。黒川眞道一本を藏す。

小竹集

寫三卷

村田春門

一卷には春夏、二卷には秋冬、三卷には戀、雜の部を分つ。卷頭、毎春瓶梅を詠める「いささらば琴ひく子供小

家集の部

麗まきてことしも梅の遊せましを」以下。水野越前守家にてその詠を集めて撰せしめたるもの。一本子爵水野忠
欸氏蔵す。◇春門は一柳並樹とも稱す。天保七年歿す、年七十二。鈴屋門。蟹守と稱す。

あづまなまり 一 卷

青山平々山人

千卷文庫を築きし江戸の書林平々山人の短歌、長歌、戯文を集めたるもの。附録には蜀山人・紀東齋園・自適子・
老樗釣夫・京傳・京山の平々山人の傳を以てす。明治二十年その七十回忌に方り、小杉榎邸の序、宮崎幸麿の跋を
加へて青山清吉出版す。◇平々山人は雲茶會を起し、枇杷麿と稱す。安永二年に生れ天保九年に歿す。

梁岳長歌 寫一卷

桂園門下の紫竹庵梁岳の長歌六首を収めたるもの。井上通泰氏所蔵たり。天保頃の作。

天満宮影前百首 寫一卷

兒山紀成

百首の部を見よ。

夜雨庵集 三 卷

近藤光輔

天保頃四季、戀、雜の部三冊上板せしと聞けど板本は己未だ見ず。戀及雜の稿本二冊井上通泰氏蔵す。戀部歌百
三十六首、雜部二百二十九首。「川水にめぐる車の音はして人こそ逢はねしのめの道」「草枕たびの空にぞ思ひ
しる我ふるさとは住みよかりけり」の如きはその佳作ならむ。この他本居家には光輔の詠草に大平の點をこひた
るもの一本あり。◇光輔は長崎の人。本居大平の門に學ぶ。

玉園集 二 卷

青木永章

橘守部及加納諸平の序あり。天保十一年中島廣足の跋を加へて上木。◇永章は長崎諏訪社の宮司、從五位丹波守
に叙せらる。秋の屋と號す。長歌に巧にして長崎地方の風物を詠せる雄篇あり。

はぎのや詠草 寫一卷

上巻四季、下巻戀、雜、哀傷、述懐、賀の部立を設け、「年のうちはおのが時とや春立つを知らず顔にも降れる
雪かな」以下の詠を收む。文政天保頃の作多し。文政十二年十一月二十六日正令の御君御元服ありしと聞きて、
又瑞柳院様御五十賀などの端書あり。天保三年をの子孫を失ひなどはしがきある歌あり。新庄侯の家臣の作なる
べけれど、諏訪光忠などの集にあらざるか。未だ考へ得ず。慶大本。

離屋和歌集 一 卷

鈴木服

部立あり、その所詠を收む。上田萬年氏一本を蔵す。◇服は鈴屋の門、言語四種論・雅語音聲考・希雅等の作者。
天保八年歿す、年七十四。

自點眞環集 大 四 卷

千家尊孫

部立を設けその詠を集め、且自善しと思ふ歌には點を加へたるもの。よりに集の名に負せたり。天保十一年上梓
す。尊孫は出雲の國造、明治五年歸幽、年八十。尙、比奈乃歌語の條を参照すべし。

菊園集 三 卷

菊地袖子

大石千引の序あり。卷頭「あづさ弓しばしばかりの此世をばいかで心にまかせてしがな」以下部立あり。その師
千蔭の加點せるものといふ。刊行す。◇袖子は伊豆の人、千蔭門。天保九年歿す、年五十四。

風教百首 一 卷
百首の部を見よ。

柞舎集 小 一 卷

その遺詠を集む。歌數多からず。文政六年七歳の時の詠あり。卷頭「あら玉の年のくれにし打つけに春來にけりといふはまことか」以下。天保十二年上木。◇尊朝は尊孫の三男、幼名薫丸。天保十一年卒す、年纔に二十一。

千家尊朝

松園歌集 二 卷

中根氏の國學者著述目錄に載せたり。己未だ一見せず。◇貞寄は彦根の人、天保九年歿す、年六十八。

佐藤貞寄

澤近嶺家集 一 卷

伊能外記の輯めし香取四家集に收む。歌數百二十八首。梧桐庵歌集八百五首の中より抄出して上梓するものといふ。◇近嶺は春海の門人、月舎といひ、又吹梧桐庵と號す。天保九年歿す、年五十。

葉廬家集 一 卷

三井高蔭

高井高保氏その母の祖父高蔭の歌を集め、明治二十五年上版。卷首に「九重のとのへのみかど明るより」云々の歌あり。新古今調の歌風なり。本居豊顯、拜卿蓮茵の序あり。◇高蔭は鳥屋阪三井家の第四代の主、寶曆九年に生る。鈴屋門下、高廬舎と號す、天保十年歿す、年八十一。

樞園集 寫 五 卷

中島廣足

一卷は短歌、二卷は長歌、三四五の卷は文集とす。天保十年丹波守青木永章及橋守部の序、船曳大滋の跋を加ふ。

歌の部は天保十年十千堂藏版、文の部は明治に至り活版に附す。但し白筆稿本歌の部には本間素常、近藤光輔の加筆あり。續歌學全書第八編には抄出して載せたり。尙、しのすだれ、あすか風、手束杖の條を参照すべし。

樞園長歌集 三 卷

中島廣足

第一集第二集は自撰にて、第三集は後人の集むる所、その拾遺たり。第一集には正三位富小路貞直卿序、從三位政直序、大友義卿の漢文序、船曳大滋の序を加へ、天保十年板行す。詠火食鳥、見蒙古襲來繪卷、詠紅毛船入貢歌など題材の異なるもの多し。

小田若苗 寫 一 卷

本居永平

歌數五十餘首部立あり。卷頭「ふるとしに同じ霞のうす衣また重ねても來たる春かな」以下、白筆稿本本居豊顯博士の所藏たり。

永平詠草 寫 一 卷

同

天保十一年の詠を集む。白筆本本居豊顯氏所藏。◇永平は大平の第三子、天保十三年歿す、年二十四。

異泉詠草 一 卷

室谷賀世

一名を室谷賀世遺詠といふ。四季、戀、雜、長歌、文章と部立あり。後大正の御代に至り出版す。◇賀世は大坂の富商、文化の始堂島に臨高閣を作る。富士谷御杖・中村良臣・加納諸平に學ぶ。天保十一年歿す、年五十九。百人一首富士の高根等の著あり。

正信偈句和歌 寫 一 卷

一名を釋超然遺稿といふ。近江國大谷派に屬する高尙房に住せし超然が、宗祖大師一流の大綱を天保十一年庚子秋三十一字に和せるもの。例へば歸命無量壽如來南無不可思議光を「世におほふ惠の本と仰ぐかなつきぬ輪もたえぬ光も」末に終驗可信斯高僧説を「たゞあふげ世々につたへしさとし文迷ふべき道もなき末の世を」まで明治十一年九月、赤松連城序を加へて出版す。

東家歌抄附録渚の藻屑 一 卷

井面守訓

七十年間の所詠のうち五百首を抜きたるもの。巻頭「あらたまの春たち來ぬる面影をいはふもちひの鏡にぞ見る」以下。天保十一年鷹羽龍年の漢文序あり。集の名は「よるままにかきつめぞおく伊勢の海の淺き渚のくづばかりも」の歌に因る。嗣子從三位守雅の跋あり。藻屑歌抄二篇は刊行せしか明かならず。◇守訓は伊勢神宮の一編宜にて正三位に叙せらる。天保十三年歿す、年七十八。晋の貌四十卷等の著あり。

亞元詠草 一 卷

同 亞元

亞元集 一 卷

同

集は詠草よりぬきたるもの「さら〜と流れおちても行く水に心のとまる夏は來にけり」の如きその佳作ならむ。井上通泰氏所藏。

亞元日記 一 卷

同

文化十四年丁丑元日「うちつけに心のどけく成るものは春あけかたの鐘の聲かな」の歌以下の歌日記なり。中に當時の歌人の消息を窺ふべきもの多し。妙泉寺にその原本ありといふ。安政四年丁巳閏五月六日の奥附あり。

六帖題和歌 一 卷

同

古今六帖題にて詠めるもの、樗園叢書中に收む。續歌學全書十編には六帖題和歌を收め、又亞元集ぬきほと題し、その他より十餘首を抄出せり。◇亞元始め京都に居り小竹園といひ、江戸に移りて後葵園と改む。築地本願寺中に住す。桂園門、天保十三年寂す、年七十。

伊吹舎歌文集 寫六卷

平田篤胤

始四卷は文章にして後二卷は歌集なり。又上中下三本なるあり。三卷本は下卷のみ歌なり。部立なく理性的の詠多し。「花鳥を我もあはれと見てはあれどあはれとうたふいとなかりけり」「生れいでし身は低けれど學びにも千萬人のうへに立たなむ」「帝の道たゞひとつをききてあだし小徑によらめやも人」「ひむがしの大樹のものと神がたり四方の草木もことやめてきけ」におけるが如し。

中山美石詠草 寫一卷

文政十二年の作にて、始に山吹をよめる「行春のかたみをうつす山吹のこたへぬ花につゆぞこぼるゝ」以下六十九首。本居大平に送りしもの本居家に存す。その他、判美石詞一卷雜評の部に出す。

中山美石家集 寫一卷

天保二年及五年の詠草一卷佐々木信綱氏藏す。◇美石は本居大平の門、天保十四年歿す。年六十五。

瑞子君歌集 寫一卷

歌文集四冊の中の一巻にて、巻頭に「かきかぞふ三つの始のためしとて誰も千歳をいはふ今日かな」の歌あり。

部 集 家

村田たせ子の加點、戸澤子爵家に一本あり。◇新庄の戸澤正令侯の母君、井伊氏。歌文を善くす。

齋樹觀集 寫三卷

戸澤正令

天保元年より同五年までの歌を載す。村田たせ子の教を受けられし頃の集なり。戸澤子爵家に自筆の一本あり。

眞珠亭歌集 寫五卷

同

天保六年より天保十四年までの詠を収む。齋藤彦麿に就き歌風一變して古體を帯びたる時代の歌を録せるもの。戸澤子爵家に一本あり。

稜威舎御集 寫二卷

同

新庄侯戸澤正令の七年祭に方り、嗣子正實が、家臣諏訪光忠に命じて撰ばしめたるもの。齋藤彦麿の序あり。卷頭「高光る日出づる國ゆ立春に西の夷もけさや仰がむ」以下。狩野亨吉氏は完し。家藏本は原本なれども下卷のみなり。

流水稿 寫三卷

田澤仲舒

本集二冊、文化文政頃の歌多し。補遺一冊は男周任の集むる所、天保末年の歌あり。井上頼園氏一本を藏す。◇仲舒は宗澤と號す。幕臣にて日本橋宮崎町及柳島に住す。語箋百卷の著者。

清園詞草 三卷

高橋正澄

文政五年難波に出で、家號を清園と稱へしより、天保十四年までの歌を集む。

残の夢 三卷

同

部 集 家

文政十二年、名を殘夢と改めしより後の歌を收め部立す。剃髮せむとしける時の歌「朝顔の露のまばかり残る夜の夢には何の見えむとすらむ」の詠により集の名とす。號はこの歌にとるか。天保元年頃までの歌見えたり。續歌學全書十編にも收む。

塵室草露 一卷

高橋正澄

古郷笠岡にありし間の歌を集む。天保十四年門人井上喜尙の序あり。この文により正澄の略傳をも知るべし。◇正澄は平松正春の子、高橋氏を襲ぐ。石上枕詞例・三代枕詞例・國字定源・記記縫結抄等の著あり。桂園門下、嘉永四年七十八にて歿す。

心月詞花帖 上下一卷

同

六帖の題によりてよめるもの。心月とは正澄の一號心月洞による。隣の題にてよめる「梅が香も柳の露も垣こえて隣の春ぞしたしかりける」の如きその中の佳作ならむ。天保十四年平重信の序あり。後弘化二年男熊彦梓に上す。

清園後草 寫二卷

同

部立なし。文化頃の歌を集む。下卷に石上枕辭例書畢て。「石上ふるき枕はまくらにて新しき夢みるよしもがなし」の歌あり。内閣本は嘉永二年八月二十日、男正純寫畢とあり。

やまとにしき 一卷

同

詠史集の部を見よ。

からにしき 一卷

同

詠史集の部を見よ。

花園春里家集抄

寫一卷

三國通覽をみて、又保建大記をめで、佛に侍することを誹る等の長編あり。文苑玉露に載せたる荒木田久老が歌論の評あり。

子の日集

寫一卷

小笠原幸女

小笠原幸子の集にて、繼母平野氏女幹の序を加へて上木す。集の名は「長閑なる宿に子の日のまとゐして野邊に心もひかれざりけり」以下、暮秋露をよめる歌まで。作者の傳及び出版年次明かならず。

好文堂武泰詠草

寫一卷

部立あり。卷頭「世の中も山に住む身もかはらぬは春たつけふの心なるらし」以下自跋あり。

方業詠草

寫一卷

慶大圖書館に一本あり。卷頭「里の名のねざめにけりなから衣うつやいとなき賤が手わざに」以下。師家の批點は朱書せり。蓋し著者の稿本なるべし。信濃人の作か、或は木曾の寢覺に赴きし人の作か、未だ考へ得ず。

須賀之屋翁歌集

寫一卷

卷頭立春「あら玉の年立かへるけふよりは木の芽はるかぜのどかにぞ吹く」以下、四季、戀、雜の歌四百三十三首を収む。半紙横綴に一々小箋を貼りつけたり。家藏本。◇江戸の人にて歌の師は郡の人と見ゆれど、何人なるか共に明かならず。平田正忠・加藤文輔・福羽美質などを友としたること雜の歌にて知らる。

倉地言行詠草

寫一卷

慶大圖書館に一本あり。部立を設けてその詠を集む。作者傳記未だ考へ得ず。

上田甲斐子詠草

寫十卷(?)

尾藩上田仲敏の妻甲斐子の詠を収む。甲斐子は本居大平の門にて、植松茂岳なども歌の友たり。宇都宮鼎の序を加へたりと聞けど、己未だ一見せず。

政稻詠草

寫一卷

輪池叢書四に収む。作者の傳明かならず。

塵埃集

寫一卷

真田幸良

四季雜の部立を設けて「つがの木のいやつきくにしろしめす國に幾世の春や立つらむ」以下數百首の歌を集めたる一本眞田伯爵家にあり。◇幸良は眞田幸貫の子、有斐亭と號す。父に先ちて早世す。

穂向家集

四卷

竹村茂雄

一二卷は近體の歌、三卷は古風及長歌。四卷は文章とす。殿村安村の序あり。弘化二年上木。◇茂雄は伊豆の人、穂向舎と號す。弘化元年七十六にて歿す。

桃能屋調集

寫一卷

山脇正準

清水光房の加筆ある一本松井簡治氏所藏。弘化の始の作にかゝる。◇正準は美濃國郡上の人。長沼流の兵學者。別に海防太郎百首等を著す。

千種の錦 一 卷

西村正位の千種三位の百詠を集め一卷となし、屋代弘賢に端書を求む。弘賢即ち「ことの葉も野邊の千草に咲出でて花の錦とおりにやしけむ」の一首を贈る。これによりて集の名とす。輪池叢書卷五に收む。屋代輪池は天保十二年に歿したれば、凡その時代を知るべし。

二七四

有功卿集 寫六卷

久我建通公が千種卿の草本を寫したるもの。中に月百首、五辻家にて詠せし一日三百首、獨吟千首、日枝山に採薬に上りて草名をよみし五十首、赤穂義士の百五十回忌の五十首等を收めたり。

天台採薬和歌 一 卷

物産學者山本世播と無動寺より白川山へかけて草木をあさりし時、明ぼの草、もみぢ草、かきは草等の異名の植物をよめる歌を集む。

ふるかゞみ 三 卷

古今集の歌の句によりて詠めるもの。例、年のうちに云々の題によりて「ことしともこぞともいまだ定めねば霞みかねてや春も立つらん」に於けるが如し。橋蔭道といふ假り名を用ひて跋を加へ、蛙園文庫蔵版として弘化二年出す。高等師範學校蔵本には所々頭註を加へたり。何人の手なるを不知。神宮文庫には小津久足自筆の一枚を貼附し、千種三位の作なることをほのめかし、「橋の蔭ふむ道と思ひあへず千ぐさ花さく野邊を見るかな」の一首を添へたり。

千々廻舎集初篇 三 卷

部立を設く。堂上家にして堂上家風に拘束せられず清新なる歌多し。「山鳥あけぬと告ぐる一聲に世はさまぐの音ぞきこゆる」「夏川のこなき面高花さきて涼しき暮に水鶏なくなり」等その歌例とすべし。雜部には六歌仙・六所玉川・飲中八仙・近江八景・十二支の歌・讃酒十三首の歌等あり。安政二年上梓。◇有功卿は有條卿の子、正三位左中將となる。嘉永七年薨す、年五十八。

わかくさ 一 卷

唐詩選五言及七言絶句二百四十首を短歌に詠せるもの。袖珍本の外、續歌學全書七編に收む。自序及尙古堂の跋あり。例へば夜送燈籠を「月影に玉の光をちらしつつ水江遠くかへる浪かな」又易水送別を「古の水の寒さしかはらねば別るゝけふは髪さかだつも」に於けるが如し。

日枝の百枝 一 卷

百首の部を見よ。

初 榛 集 寫三卷

一卷には天保元年及二年の詠にて、大平の點を加へしものを集め、二卷には古風の文詞を載す。三卷には天保五年より同十五年まで合せて十二年の詠を集む。一名を天保集といふ。次に弘化二年の詠を擧ぐ。歌數二千六百六十首、本居豊顯氏自筆の一本を藏す。

内遠畫賛歌 寫一卷

二七五

内達が書贊せる歌を自ら輯む。本居豊頤氏自筆の一本を蔵す。

清白集 一巻

中林成品

一名竹洞先生歌集といふ。伊藤松所の輯むる所、四季以下の部立を設け、長短歌を集む。書家の集として叙景歌に面白きものあり。「くぬぎ散る片山そばの夕日影うらさびしくも鳴く鶉かな」「獨りわが思ふ心の玉琴の音なき音をきく人もがな」等その佳作なるべし。弘化二年上木。◇成品は墨書の大家、竹洞・大原庵・東山隠士・沖濟等の號あり。嘉永六年歿す、年七十八。

伴信友自撰三百首 一巻

弘化二年六月十五日藩侯の命に應じ自撰して奉るもの。首に元日立春をよめる「立かへる年に後れぬけふといへばいと心は春めきにけり」以下、後之を色紙に記さんとせし時、秋に三百首、冬に一首數不足せるを見て、弘化四年五月五日嗣子信近の補へるもの。自筆本京大圖書館にあり。

伴信友歌集 一巻

前書と同じく唯外題を異にし嗣子信近の妻の跋文を加へたるあり。

伴翁歌葉 一巻

伴信友

天保十四年より弘化三年までの自筆本、彌富演雄氏蔵す。中に加納諸平に批評せしめたる所あり。

漆桶集 一巻

大野木珍一

伊勢の盲歌人珍一の歌を度會公資の弘化二年に撰みて黒瀬應昇にかゝしめたる一本神宮文庫にあり。巻頭「さえ

えくれし空なりながら出る日の光さすがに霞みそめける」以下。末に長歌五篇あり。

成島司直歌稿 一巻

司直自筆の稿本松井簡治博士蔵す。天保丙申(七年)二月の分一冊。同三月より同年末まで及丁酉(八年)一月より同年まで並に戊戌九年一月までの分一冊。戊戌二月より己亥(十年)一月に至る一冊。己亥二月より庚子(十一年)一月に至る一冊。天保甲辰(十四年)一月より同年末まで一冊。(十一月十三日改元弘化元年となる)弘化二年正月より九月に至る一冊。以上いづれも横綴本にて、丙申二月の本には始に天文十一年二月九日大神宮法樂十百首の内分題十百首の詠あり。巻頭「玉くしげ二荒の山にいづる日の光あまねき春は來にけり」各巻に通じ當時徳川幕府に關すること、諸侯に關すること、老中水野越前守忠邦以下諸大名などとの贈答もあり。◇司直は幕府の儒官、和鼎の孫、衡山の子、東岳と號す。通稱圖書といふ。徳川實記の著者。文久二年歿す、年八十五。

五家園家集 一巻

澤田名垂

門人原清卿の記し置けるもの。又屏風短冊等の歌を萩野重英の輯めたるあり。會津にての第一歌人と稱せらる。「うまや路の一むら杉は見えながらめぐる田づらの道のはるけき」「旅人のあす渡るべき川音に耳そばたてる雨の音かな」「草も木もことやめし世に耳つくの耳ひき立て、何をきくらむ」等清新の作多し。續歌學全書八編に抄出して載す。この他に古集に擬して作れる無名歌集一巻あり。瑠檢校は南朝の忠臣の作と見做し、群書類從の中に收めむとせしといふ。◇名垂は會津の人。芝山持豊卿の門に學ぶ。五家園と號す。會津風土記の編纂に與る。弘化二年歿す、年七十一。

椿仲輔家集 一 卷

香取四家集に收む。四季の歌百二十五首を收む。○仲輔は下總の人、神山魚貫の門、又小山田與清にも學ぶ。常磐舎と稱す。弘化三年歿す、年四十四。尙萬葉發達の條を参照すべし。

浦の汐貝初篇 一 卷

熊谷直好

門人三井宗之の撰びたること弘化二年の序に見えたり。部立して數百首を載す。自然をよめる歌に優雅なる作あり。また桂園の風をうけ、平板に陥りたるもあり。「うゑつきや田中の森の秋祭はつ穂の酒にわれ酔ひにけり」「しぐるゝは山路のつねと思ふらむふるにもうたふ柴人の聲」などその代表作ならむか。明治十三年上板。續歌學全書五篇にも收む。續篇のことは後に出す。

千代のかけ 二 卷

菅沼定敬

短歌のみを部立す。海野游翁の序あり。弘化三年上板。○定敬は幕臣伊賀守と稱す。弘化四年留守居格となり。信濃守と改む。七夕百首等の著あり。

みつのながめ 一 卷

本間游清

雪月花の三つを題として詠める歌のみを集む。江澤講修の序あり。弘化三年上板す。終に著述目錄を挙げたり。春海門下の高足、優雅なる歌多し。耳敏川・てふのふるまひ等の條参照すべし。

紅園詠草 寫七卷

岩崎美隆

河内國三野の歌人、弘化三年に門人荒木義隆の輯むるところ。歌數四千六百五十一首に上る。

渚のこづみ 一 卷

岩崎美隆

自撰の歌千六百七十首を收む。「水よりも涼しき色は大井川このごろ匂ふ若葉なりけり。」「二つ三つならぶ洲崎の苦舟に雪はふらせて見るべかりけり」などその佳作なるべし。○美隆は藤門又紅園と號す。村田春海門及加納諸平に學ぶ。弘化四年歿す、年四十四。大正五年に至り紅園詠草と共に出版す。

萬の言葉 寫十卷

本多助賢

天保十三年より弘化三年までの歌、合せて一萬首を收む。勝山藩の遠山長嶺の歌風を學びし所あり。萬葉風にして飾なきを要とせり。舟中歲暮の題にて「大津邊にをる大船のつなときていづる浪間に年やくれなむ」の如き、その作風を示すもの。又讀酒歌十三首あり。井上頼因氏一本を藏す。○助賢は信濃飯山の城主、豊後守と稱す。幕府の參政となり、從四位に進む。天保十二年辭任し、安政五年卒す、年六十八。

藤園雜歌 四 卷

松田直兄

四季、戀、羈旅、雜、長歌を分ち、花鳥風月の四冊とす。たゞこと歌を慕へるが如し。弘化四年上木。言葉直路等の條を参照すべし。

遊翁詠草 寫七卷

海野幸典

短歌二冊、長歌二冊、旋頭歌一冊、以上部立あり。別に年次の順に並べたる短歌二冊あり。弘化四年の奥附あり。長歌は新を尙びたれど調下れり。旋頭歌多し。○幸典は游翁と號す。景樹及前場默軒に學ぶ。現存歌選の選者。嘉永元年歿す、年六十。

海野遊翁歌集 一 卷

清水千清遺書一に收む。歌數多からず。終に木村定良・吉田敏成・岡野春平等の歌を載せたり。

柳園歌集 二 卷

詠草より數百首を抜きて部立す。嘉永三年堀田侯の序、片岡謙光の跋を加へて上木。橋本魚彦の柳園歌集雜評といふもの叢書料本中にあり。

松屋詠草 寫三 卷

又松屋棟梁集ともいふ。門人猿渡盛章の撰すること弘化四年の跋に見えたり。續歌學全書第八編には抄略して載せたり。歌は巧ならず、「春の夜は光をつゝむ玉なれや霞にしづくつぶら江の月」などはその佳作なり。

芳樹和歌集 一 卷

諸侯の邸に召されて歌を教授せる間に詠める歌これかれ見ゆれど、全集は未だ管見に觸れず。◇たせ子は春海の養女。弘化四年歿す。

なるかのいくり 七 卷

一編五冊は弘化四年に、二編二冊は嘉永五年に上木。なるかはその郷里上總の地名に取る。長短歌を部立して擧ぐ。嘉永五年山田常典及江澤述明の序あり。◇講修は夷隅郡都原の郷士にして、陸堂と號す。大寂庵立綱の門人、又游清にも學ぶか。和歌童諭二冊を著す。

梅廼舎集 寫一 卷

羽室貞風

海野幸典

同

小山田與清

村田多勢子

江澤講修

四季等の歌の外、長崎守衛頭等の面白き作多し。弘化二年の自序、同四年古川松根の跋あり。桂園歌風を尙び、題詠を嫌ひたりと見ゆ。「ゆふづつの浪をいづかと思ひしは今焚そめし螢のいざり火」「松が根に鏝の袖をかたしきて幾世か見つる浪の上の月」の如き詠あり。佐賀市鍋島侯爵家内庫所本。◇貞風は佐賀藩士、弘化の頃歿す、年三十三。

袖の香 一 卷

伊達滿喜子

伊豫吉田の城主伊達村芳侯の夫人滿喜子が古稀の祝にあたり、その師本間游清の勸により自詠中七十首を撰出し自染筆せるを上木し、臣下に分ちたるもの。弘化五年游清の序あり。表紙には生れし月に因み橘を繪く。集名もこれに由る。山本信哉氏所藏本。◇滿喜子は久世侯の女、文學を好む。香雲軒と號す。この夫人の請により藩校に國學を設けらるゝに至りたりといふ。

笹園集 寫一 卷

野口喬樹

天保頃よめる「青柳の名におふ殿の高きよりのどかにおろす春の初風」等雄渾の作を好む。南里有隣の序あり。古川松根の集めしもの、佐賀市鍋島家内庫所にあり。◇喬樹は佐賀の人、歌は重松道雄、連歌は峯矩當に學ぶ。

杏宇遺草 寫一 卷

卷頭「あらためてふるしらす雪はふる年の塵だに見えぬみ代の初春」以下の一本、鍋島家内庫所にあり。

實樹尼詠草 寫一 卷

「新玉の春たつけさの空はまた思ひなしにや長閑かるらむ」以下蝦守の跋ある一本、佐賀市鍋島家内庫所にあり。

新井正方詠草 寫八卷

詠草引付 寫三卷

堂上家の加點を乞ひたる詠草にて、引付の方には小杉明眞の點あり。圖書寮に一本あり。作者の傳を詳にせず。

忍草 寫一卷

松岡行義

草稿本南葵文庫にあり。部立なく、文章も一二篇交れり。序中に「萬葉の古調を學ぶにあらす二條冷泉の門にも入らずただ月花につきて心をやり且は敵に向ひて言葉の上にも負けじ料に」云々とあり。有職に關したる歌も見ゆ。◇行義は有職家。辰方の子、蓮池侯の知遇を受く。嘉永五年歿す。

櫻木集 四卷

細川就姫

久我内大臣通明公夫人の集にて部立あり。姪細川齊護侯の序ある一本細川侯爵家にあり。◇就姫は細川治年の女。稿本にて別に部立も設けず、卷一の首に野若草を詠める「冬ふかく積りし雪は消えはてて春めく野邊にもゆる若

鹿取幸雄

常磐蔭集 寫六卷

稿本にて別に部立も設けず、卷一の首に野若草を詠める「冬ふかく積りし雪は消えはてて春めく野邊にもゆる若艸」の歌あり。中には拜殿上棟壽詞など、文も所々に交へ記せり。天保十一年四十四歳と記せるところあり。早稲田大學圖書館に一本あり。

磯丸集 一卷

精屋磯丸

磯丸物語 一卷

同

物語には母の病を伊良胡明神に祈ること社殿奉納の歌を見て斯道に志ししこと、芝山卿に召され門人の列に加へ

馬琴和歌 一卷

同

馬琴の和歌狂歌及俳句を合せたるもの。八犬傳の局を結びし時によめる「あはれとは見る人おもへ八重すだれかゝるやみ眼にあみはたすふみ」等の作あり。明治十六年松村操の出せる曲亭遺稿の中に收む。◇馬琴は本名瀧澤解、曲亭と號す。徳川時代に於ける著名の小説家にて八犬傳を始めその著作世に行はる。嘉永元年歿す。

あすか風 寫二卷

中島廣足

手束杖 寫三卷

同

られしことなどを記す。◇磯丸は三河伊良胡の漁人、名は半之丞。歌を好み、芝山持豊卿の門人に列せらる。「敷島の道一寸ちのみしめ細心にかけて祈る神垣」の詠名あり。嘉永元年六十八にて歿す。

濱藻 寫十六卷

水野忠邦

愚草 寫十四卷

同

水野越前守忠邦の天保十年より嘉永元年に至る詠草を録せるもの。中に文章の部二冊、連歌の部二冊あり、歌の部は毎年少きは一冊、多きは四冊に上れり。子爵水野忠欸氏、稿本を蔵す。

松園詠 寫一卷

稻村三羽

早春霞をよめる「きのふまで吹きし嵐の山まゆにたなびきそむる春霞かな」以下。一本慶大圖書館にあり。◇三羽は幕臣、通稱増五郎。松園と號す。景樹の門人。

馬琴和歌 一卷

家のすだれの原稿にて、板本はこの中のよき歌を抜けり。

中島 廣 足

嘉永元年中村大蔭の序あり。巻ごとに部立して短歌を集む。書名は第一集の巻頭の歌に取る。第一集より六集までは嘉永六年に上木す。明治四十二年刊行の肥後文獻叢書第一には全部を収む。

しのすだれ第七集

寫三卷

同

歌數多し。肥後文獻叢書に收めたるは、その中の幾分を抄出せるなり。

一 村 薄

二 卷

高野 東 根

上巻の始に長歌五篇を擧げ、次に短歌を部立して載す。下巻は文の部にして廣川眞弘の浦濱日記を添ふ。一子明義、追善の爲上木。松蔭合大江春平の序あり。嘉永元年歿す。

毛登加志波

二 卷

本間 游 清

島原藩士瀬戸久敬がぬきおける本間游清の歌を、その七十歳の賀年にあたり、嘉永二年その子年六の上木せるもの。濱崎東堂の序、門人池田尊の跋あり。跋文にいへるが如く、月雪花の歌は三つのながめに譲り、その他のものを収む。巻頭「たてわたす松より松を吹く風も枝をならさぬ春は來にけり」以下凡七百首。部立あり。雜の部には詠史の歌、物名の歌などあり。「陰くらき軒端の栗の花さきて實になるまでも晴れぬ五月雨」「草ふかき野路のほこらのともし火をかゝぐるものは螢なりけり」の如き面白き歌多し。

小林歌城翁自筆詠草

寫一卷

11/38

慶大圖書館に一本あり。首に河上月を詠める「ふけぬるか河音たかしみなせ川山本とほく月も流れて」以下數十百首を収む。文政五年九月十六日薩摩中將その家を訪はれたる時の歌などもあり。

歌 城 集

大四卷

小 林 歌 城

門人久貝正典の嘉永二年に上木せるもの。篠崎小竹の序あり。「かくばかり餌にはかられていろくづの曲れる針にかゝるそのさま」の如く一風ある歌あり。「弓とりし手ぶさに珠數を引きかけて彌陀たのむまで老にけるかな」の如き歌あり。俳諧歌も少からず。犬追物をよめる歌十二首あり。

蓬 壺 愚 草

七 卷

橘 守 部

又穿履集ともいふ。四季、戀、雜の部立あり。その自筆本を裔孫橘純一氏藏す。嘉永二年六十九歳までの詠を集めたるなり。後に出す橘守部家集はこの中より抄出せるもの。

作 樂 園 遺 稿

一 卷

山 田 清 安

桂園の風を汲みたる人。大正元年に至り加藤雅吉氏がその遺稿をその夫人の集と合せて出版せり。清安は鹿兒島の藩士、通稱一郎左衛門、秋園又作樂園と稱す。薩藩の繼嗣問題に關し嘉永二年自殺を命ぜらる。年五十六。

鄙 佐 篇 豆 理

二 卷

和 泉 圓

上巻短歌、下巻長歌及文詞を載す。嘉永三年その囑によりて石川依平の撰む所。「ありはてぬ身を千代までと思はねどうまごの末の見まほしきかな」の如き述懐の作あり。依平及清水光房の序を加へて上板。圓は越後の五泉の人、吉田東伍の外曾祖父たり。

家の集の部

木 積 集 二 卷

歌六百餘首。後門人高田法古等上木す。嘉永三年千種三位の序あり。飯島忠夫氏藏本は寫本二卷にて歌數多し。門人の序あり。○菅鷹は信濃の人、縣居門にして服部高保と親し。

木 島 菅 鷹

二八六

和 田 嚴 足 集 一 卷

宇野東風編して肥後文獻叢書第三集に載す。家の集、寄鏡述懐、二十日草、醉のすさびの四種より成る。「見るからにまうら樂しも花ぐはし櫻は花の神にかあるらむ」「鳥見はてゝとみ等申さく御迎の御馬引きたて松蔭にあり」と「深山木の伏木にながる荒熊の人にな知らえかくし妻ゆめ」の如き古調に充ちたり。寄鏡述懐は楠公五百年祭によめる長短歌を収めたるもの。○嚴足は肥後の人、一名を眞震といふ。豪放にして萬葉風の歌に長ず。長瀬眞幸が門、安政六年歿す、年七十三。

和 田 嚴 足 集 補 遺 一 卷

彌富濱雄氏の手になる、肥後文獻叢書卷三に收む。

香 取 四 家 集 四 卷

掛取魚彦・澤近嶺・椿仲輔・永澤躬國等四人の歌を、四卷二冊とす。嘉永三年の撰、翌年千種三位の序を加へ、同五年上刻す。

伊 能 外 記

花 鏡 譚 集 三 卷 一 本

長歌十余篇、短歌二百七十、たゞこと歌多し。諸國を廻り、北條時郷、千葉葛野・鈴木朗・本居大平・加納諸平、岡

岩 雲 花 香

松 平 乘 全 侯 和 歌 寫 一 卷

熊臣・青柳種信等を訪ひて詠める歌あり。嘉永四年高林豊鷹の序、市岡和雄の跋を加ふ。神宮文庫に一本あり。侍從に任ぜられし時詠める「位山のぼるにつけて忘れじな分けこしあとのものと麓を」以下歌數多からず。子爵松平乗承家に一本あり。○乗全は西尾侯、老中となり四位の侍從に任ず。明治三年歿す。年七十六。

竹 屋 遺 艸 一 卷

大聖寺の人、嘉永四年有功卿の序を加へ、その子政養上梓。「暮のこる年の緒かけてくりかへし絶えせぬ春ぞけふ立ちにけり」以下、部立してその詠を收む。

佐 分 政 壽

常 侍 集 寫 一 卷

春、夏、秋、冬、戀、雜の部を設く。前編七卷、後編三卷あり。常侍は唐の官名なり。原本子爵水野忠欵氏所藏。續歌學全書には抄出して載せたり。○忠邦は唐津藩主忠光の子、越前守と稱す。後濱松に封ぜらる。幕府老中の筆頭となり天保の改革を行ふ。歌は村田春門に學ぶ。嘉永四年卒す、年五十八。

水 野 忠 邦

松 葉 集 寫 一 卷

上下合せて一卷、四季、戀、雜に分つ。右少將定期朝臣の稱へ歌あり。正房卿自筆の狀と「皆人の及ばぬほどに仰がれて雲井に高き松のことの葉」などの歌を添へたり。靜嘉堂文庫に一本あり。○公祐は正三位季暉の男、安永三年に生れ、正二位中納言となり、嘉永四年歿す、年七十八。

高 松 公 祐

鍋 島 直 與 歌 集 寫 一 卷

花月を詠める歌、はしがきの歌多し。例へば「ふる里に誰が着てかへる袖ならむ花の錦をみよしの山」「樂しきもうさもまさりて世の人の心々にすめる月影」の如きその一例たり。鍋島侯爵家内庫所本。

鍋島直與長歌集 一 卷

長歌四十一篇を収む。中に外山黄門に奉る長歌、湊川に古をしのぶ長歌、孟蘭盆會の夜月を見て、武威輝海内等の題あり。一本鍋島侯爵家内庫所本。

松虫の巻 寫二卷

鍋島直與

蓮池侯鍋島直與の短歌集にて巻頭には早春をよめる「春風に岩間うちいづる浪の音の清瀧の河や水とくらむ」の詠あり。戸澤正令・前田利保・牧野照成等の諸侯とよみかはしたる詠も少からず。一本佐賀市鍋島侯爵家内庫所にあり。

言靈彥集 寫一卷

櫻田法師

巻頭「氷だに春たつけふはさなみや打出の濱を天の退きてや」以下、古風の歌を収む。もと駿河國益津郡花澤村扶桑庵の蔵たりしもの。慶應大學に一本あり。嘉永六年の筆。

蔭正遺稿 寫一卷

兼清蔭正

その遺詠を鈴木高輅の集めたる一本、佐賀市鍋島家内庫所にあり。兼清は周防の熊毛郡島田の人、漢學を黒神氏に、國學を本居大平に學ぶ。古道微・渚玉溪・稷威の靈等の著あり。

保定家集 一 卷

「山の端に棚曳のこる横雲の上に出でたる初日かけかな」以下天保嘉永頃の歌を収む。中仙道及伊勢途上の作もあり。上板。◇作者は桂園門。信濃の人。

從三位爲理家集 寫一卷

冷泉爲理

天保弘化頃の詠を集む。内閣に一本あり。◇爲理は爲全の子、安政六年權中納言に任じ、慶應元年正二位に叙せらる。

月五十首詠 寫一卷

真田幸貫

九月十三夜に名所の月を詠めるもの、待乳山より城捨山に至る。巻頭「人のみか月をまつちの山端にやゝさしのぼる影ぞさやけき」以下、侍臣貫謙及利嘉も同詠せり。真田伯爵家に稿本あり。◇幸貫は樂翁侯の二男、真田家をつぐ、四位侍從となる。嘉永五年卒す。年六十二。感應公と謚す。

砂謝南美 寫一卷

河村美津女

長歌五十首短歌百首を収む。弘化頃よりの詠にて、末に嘉永六年五月廿三日と自記の一本神宮文庫にあり。

柿園詠草 二 卷

加納諸平

部立して數百の歌を集む。終に長歌を載す。力ありて雅やかなる歌多く右園歌話には景樹の歌と比し、一層優れたるよしを一つ一つ證例を挙げたり。特に熊野の風俗を詠じたる歌には他の追隨をゆるさぬものあり。「山賤がもちひにせむと木の實つきひたす小川を又や渡らむ」「みづちすむ淵を千尋の底にみて太刀の緒かためゆく山路かな」「あしたづの翼の上に玉敷きて神やますらむ瀧の水上」などにてその風を知るべし。長歌には萬葉の風骨を

得たる作多く。巴岳に登る歌特に優れたり。嘉永六年上板。續歌學全書七編にも收む。宏麗の歌少からず。安政六年本居豊顕の寫本には、第一等上等の二品を、頭に〇〇第一等●〇上等の印によりて分ちたり。◇諸平は夏目夷麿の子。鯉玉集撰者。

柿園詠草拾遺 一 卷

嘉永六年より歿前までの歌を、飯田年平等の撰する所、明治十八年上板。

同

柿園詠草拔萃傍註 一 卷

新 貞 老

諸平の四十年祭に方り、貞老の師飯田年平の柿園詠草の上にしるしおきたる佳歌をぬき、これにその優れたるよし解説を加へて印刷せるもの。明治三十年の序文に見えたり。卷頭雉の歌より贈正三位のおくつきに詣でての長歌に至る。

常 磐 集 三 卷

山 内 繁 樹

門人熊代繁里の撰ぶ所。本居内達・加納兄瓶及撰者の序及嗣子繁憲の跋を加へ嘉永六年上木す。◇繁樹は紀伊日高郡の人、通稱太郎兵衛、常磐舎と號す。弘化三年歿す。年七十三。

休 圃 遺 稿 一 卷

富 谷 龜 翁

叢書料本十五に收む。東路日記の『ふる年の日数は指にあまれども折り得てけふは春の立つらむ』以下。嘉永六年の序あり。一本井上頼園氏所藏。◇伊豫三津の人、後江戸に任ず。休圃はその號なり。矢野靜觀の墓銘あり。嘉永三年歿す。年八十二。

橘守部家集 三 卷

守部の七回忌に方り男冬照の撰ぶ所。上卷には春夏秋冬の短歌を、中卷には冬戀雜の短歌を、下卷には長歌を收む。松浦侯源朝臣晴の序、門人中村正富の跋を加へ、嘉永七年上木す。後同門飯塚久敏玉帯を著し。撰集宜しからざるを語る。長歌には海上夕立の歌を始として萬葉調のもの多し。

玉 帶 寫 一 卷

飯 塚 久 敏

冬照が父の守部家集を撰せるによからぬこと多しとて、一々例につきて之を指摘せるもの、安政五年の序あり。橘純一氏一本を藏す。

夢 舎 集 一 卷

中 村 良 臣

上卷は春夏、中卷は秋冬戀雜、下卷長歌及文の部とす。卷頭『春の夜はまだ夜をこめて曉の鐘の音こそまづかすみけれ』以下。安政三年加納諸平及小西廣の序及嗣子良顯の跋を加へ須原屋等にて出版す。◇良臣は播磨の人、夢舎と號す。季鷹門下の長治祐義及本居大平に學ぶ。嘉永三年歿す。年五十一。

杉 の 落 葉 寫 一 卷

柚 木 谷 正 孝

部立なく短歌を主とし中に長歌をも交ふ。而して佳しといふ歌には上に〇印を加へたり。『しめはへし苗代小田をかしましく我物にして鳴く蛙かな』以下。

落 葉 の 草 紙 寫 一 卷

松 平 春 嶽

時々によめる歌を四季雜に部立したるもの。卷頭『明けそめてのどけくかすむ和歌浦に干とせをよばふ春の友鶴』

以下。○春嶽名は慶永、越前福井藩主、勤王の功あり。從一位に叙せらる。明治二十三年薨す。

五月雨集 寫一卷

松平春嶽

侯の第一女安姫の逝去を悲む歌、又擴志等を收めたるもの。

草まくら 寫一卷

同

嘉永六年三月二十二日福井を發する時人々に別るゝ歌を收む。卷頭「みこしぢの人に別るゝけふしもぞなごりつきせぬ秋の春雨」以下。

山分衣 寫一卷

同

安政六年歸國の際阿波侯などの送別の歌、及これに答へたる歌等を收む。書名は卷頭の詠による。

礫の藻屑 寫一卷

大野木珍一

嘉永二年までの作中の佳歌をぬく。卷頭「けふはまた昨日の方にひきかへて小松も春の色を見せけり」以下御巫清直の序あり。伊勢の盲歌人。

同 寫一卷

同

卷頭「何事もけさは忘れて乳房すふ子どもとなれる心地こそすれ」以下。長篇一篇、文詞二あり。安政四年の師走林崎文康に納めんとて橋本淳風に端書を乞ひたるもの。神宮文庫に一本あり。前書とは別本なり。

藤岡集 寫一卷

同

自序に文化八年内城田の大野木の里を出で、山田に來り藤岡の邊に庵を結びてより六十八歳の夏まで四十九年の

歌よりぬきたるものといへり。卷頭「から衣かへす返すもうれしきは春たつけふの心なりけり」以下。末に長篇二篇を添へたる一本神宮文庫にあり。

苔清水 三卷

神山魚貫

歌數凡千首、門人藤原正堅・三橋鶴彦・伊能顛則の撰む所。安政元年魚貫序、顛則の跋あり。上木。田園趣味の歌多く、佳作少からず、自序はその歌人となるに至りし經歷苦心を録せるものにて、清貧に甘じ、田園を耕し、母に仕へ、その餘暇に斯道に志篤かりしこと委しく見えて人を動す。「苔つたふ岩間の清水せきたためて一人すむには足れる庵かな」「白樺の古葉ちる音に驚けばおのが宿なりうたゝねの夢」の如きその作風を見るべし。續歌學全書八編にも收む。○魚貫は下總飯岡の人、明治十五年歿す。年九十六。

苔清水後集 大二卷

同

部立あり。慶應三年伊能顛則の序、門人林保維の跋を加へて上木。前集の續編なり。

しのぶ草 四卷

八田知紀

初編は見るもの聞くものにつけての詠のみを擧ぐ。安政二年鶴岡親義の序あり。出雲寺文次郎開板。小本薄様摺本なり。二編上下、三編、四編は各四季戀雜に分てり。續歌學全書十編にも收む。

桃岡集 寫二卷

同

愛發春樹氏が、しのぶ草の歌、又種々の家集及短冊より知紀の作を拾ひて四季戀雜に分てるもの。桃岡は翁の號。

難波の巻 寫一卷

林厚徳

巻頭、浪華に旅して旅宿に郭公を待つといふことをよめる歌あるによりて外題とせるなり。嘉永六丑夏より安政二年卯春に至る總計三百十首を収む。浦賀に外國船の来るよしを聞きてよめる「えみし船帆風にさわぐ浦船に浮ねの色もたちおくれめや」の歌あり。厚徳は卓然堂と號す。神宮文庫本。

於見於聞 寫八卷

山田常典

中に藍江愚草、龜調、弘化三年稿、同四年稿、戊申草稿等ありといふ。己未だ管見に觸れず。

歳葉草 寫十六卷

同

弘化三年より文久三年までの歌を収めたるもの。未だ己の管見に觸れず。

石竹集 一 卷

冷泉古風

男天野御風集む。萬葉風の歌なり。三條公の題辭、毛利元徳公の題歌、近藤芳樹の序あり。明治十一年刊行す。

○古風は周防の人安政元年歿す。

落園詠草 寫一卷

山田常典

千木のかたそぎの著者常典が詠草にて、門人の輯むる所、別に部立を設けず。小中村清矩所蔵の一本南葵文庫にあり。○常典は海野游翁及本間遊清の門、落の舎と號す。新宮の水野侯に仕へ丹鶴叢書出版のことに與る。

足代弘訓翁家集 一 卷

同

又あまのさへづりともいふ。部立あり。歌數も多く短歌の次に長歌部、文部あり。久志本常庸・松木朝彦・中西弘繩の撰み出で、三條實高公に序を乞ひたりしを、上木に至らで止む。原本神宮文庫にあり。後明治十三年三條實美

公の序を請ひて印行す。後又明治二十四年博文館にて發行す。

海士の囀 寫一卷

足代弘訓

又愚詠近稿と題し、塾外せざる分など表に記せり。紙數七十七葉、別に部立なし。自筆本佐々木信綱氏藏す。その他弘訓の寛居長歌集は續歌學全書九編に收めて發行せり。

誠心院詠草 寫二卷

同

一名を三位局忠子朝臣詠草といふ。春夏の部稿本二冊大島雅太郎氏藏す。

東湖遺稿 一 卷

藤田彪

その子健の集むるもの、原田明善の跋あり。東湖全集に收む。○彪は水戸の士。東湖と號す。烈公に重用せらる。弘道館記述・義常陸帶等の著あり。安政二年震災に歿す。年五十。

蓬軒歌集 寫一卷

戸田忠敬

四季戀雜の部を設けてその所詠を集む。巻頭「老いぬともよしや千とせの初日影うつしてくめるけさの若水」以下。中に「肉さかれ骨くだくるもよしや世の曲れる人に何くだるべき」「天地をてらす日影はかはらねど人の心のくもる世ぞうき」「國の爲世の爲せちに思ひつゝ花に心もそまぬ春かな」「丈夫の心ものびす年へなばくるえみしらをいつ掃ふべき」の如き時事に慨せる歌あり。○忠敬は通稱忠太夫。烈公に仕へて獻贊するところ多し。藤田東湖と共に水戸の兩田と稱せらる。安政二年震死す。年五十二。

鄙風集 二 卷

祝部希烈

安政二年八月從三位希烈の序あり。部立を設けて短歌百五十餘首を集む。○希烈は梅辻春樵の弟、文化四年兄に代りて近江の日枝神社の祠官となり、社司に補せられ、正三位に叙す。文久三年薨す。年七十九。

つなぐぬ舟 一 卷

滋野 貞融

一名を櫻園歌集ともいふ。不繫舟の下巻一冊和歌部にて、首に短歌を部立し、次に長歌を載す。歌數二百七十七首。中長歌二十一首、今様七首あり。隅田川をよめる今様「霞分けゆくすみだ川つなぐぬ舟こそ樂しけれ。岸の柳はいとたれて堤の花のかけもよし」の如き優美なる作風なり。黒川春村及門人早川眞學等の序、大和守藤原延春の跋を加へ上梓。○貞融は岩下氏、信濃の善光寺の人、通稱多聞、櫻園と號す。慶應三年歿す。年六十七。

堅室長歌集 寫四卷

岡野 東平

濱田に在りし時の歌を主とし、二三の他の長歌も書き加ふ。戊申夏の奥付あり。松蔭舎廣川直弘をりそへを書加ふ。○東平は筑前の人。七禁考等の著者。

猿若忠臣藏歌 一 卷

西垣 内某

安政三年の作。百首部を見よ。

浦の汐貝拾遺 四 卷

熊谷 直好

浦の汐貝の後集にて、門人茂之の集めたるもの。安政三年香川景恒の序、編者の跋あり。部立をなし歌數も多く、終には文詞をも加へたり。續歌學全書十編に收む。

菊園集 寫二卷

堀野 義禮

一卷は長歌、二卷は四季、三卷は戀、四卷は雜、五卷は文章にて安政三年の自跋あり。義禮は石見の人(か)堅室の門。尊王攘夷に關する歌あり。

五十規搔葉 三 卷

原 久胤

日善上人の集めて上梓せるもの。安政四年藤原忠寬の序あり。四季、戀、雜、畫贊、長歌部、文章部に分てり。一長短歌は多くは句數短けれど、古調あり。續歌學全書八篇にも收む。久胤は清原雄風の門人。

藤かづら 上下二卷

齊藤 眞蔭

部立して集む。白井貞安の序あり。安政四年上木。○眞蔭は信州鹽田の人、豊之丞と稱す。守部の門人か。

白葉園集拔書 一 卷

加藤 景壽

安政四年の日附あり。○景壽は白葉園と號す。

菴居前集 三 卷

黒澤 翁滿

同 後集 三 卷

同

前集には安政二年鬼澤大海の序、進藤信寬の跋あり。後集には安政四年中川元瑞の序、田代史乘の跋あり。後集は安政四年に上木し、前集は後れて萬延元年上木す。尙獨學綱の條を參考すべし。

麻葉和歌集 上下二卷

三橋 鶴彦

一名を松舎神山垣内詠藻ともいふ。安政四年上木す。○鶴彦は下總の人、神山魚貫の門人。松舎と稱す。

綠舎歌集 寫二卷

藤田 正兼

家集の部

上巻四季、下巻は戀雜の部に分ち、短歌の外に長歌をも收む。雜體に三笠山賦などあり。安政四年秋花園磯魚の跋あり。◇正兼は筑前の人。

末の緒 一 卷

梅辻春樵

試筆の歌以下二十一首を收む。首に近衛忠熙公の題歌あり。氏の肖像を掲げ、渡忠秋以下人々の序跋を載す。◇春樵は希聲、近江の日枝の祠官、從四位に叙せらる。文化四年職を弟希烈に譲り隱栖し詩を以て世にあらはる。安政四年歿す。年八十二。明治九年上板す。

二 葉集 三 卷

松平忠質
本間道貫

松平忠質・本間道貫兩人の集なるにより、二葉の字を冠す。松平忠質及片岡謙光の跋あり。安政五年上板。◇忠質は游翁の門。

山齋集 一 卷

鹿持雅澄

長歌集、短歌集、文詞集の三つに分つ。中に長歌二卷短歌三卷はその子雅慶の自筆本、狩野享吉氏所藏。文章三卷は翁の孫飛鳥井雅太氏の所藏。短歌は文化七年より安政五年に至る四十九年の作を自叙傳體に記したるもの。長歌の部は門人井野邊嚴水の抄出せるものなり。續歌學全書第九編にはこの抄出本を活字に附したり。後明治四十年に至り。山本修三氏汎く集め巻首に小傳を掲げ、年譜を附し、短歌三卷、長歌二卷、及文章二卷の外に門人の聞書の體に記せる、その畢生の覺悟と歌道に於ける見識とを見るべき一文を附録とし、肖像及筆跡をも巻頭に載せたり。萬葉學者として、この集の大部分も萬葉書となせり。『狹土頼經妹之手馴之鏡河邊瀨之浪之音之潔左』『父

爾似而餓鬼等莫成曾大寺之金剛力士之爲形等乎成』といへるが如き萬葉模倣の作多し。

千歌線言 一 卷

飛鳥井雅澄

「世間にいきとしいける物見れば」の歌以下短歌千首を集む。門人植木直枝の寫本あり。本居宣長の玉銚百首に於けるが如く、古道に對する思想を誦へるもの多し。例へば「神國の道ふみそけて横さらふいづくに至る我が名のらさね」に於けるが如し。

檀之本詠草 寫一卷

石川依平

柳園詠草の原本にて、始に藩公に上りし歌を部立して列ね、次に文詞及今様二篇を收め、附録には六歳の頃より詠み出でし青年時代の歌を載す。◇依平は遠江の人、通稱爲藏、後惣太夫といふ。栗田士滿の門人。柳園又檀之本と稱す。安政六年歿す。年六十九。

柳園詠草 二 卷

同

門人山崎八峯・平尾八束・中山光雄が依平の詠草中の歌を撰みて明治十四年飯田年平の序を加へて上木せるもの。上巻には短歌、下巻には長歌・文詞、今様等を擧げ終に傳を誌せり短歌には「夕月夜かけすむ野路のかへるさは急がぬ牛も心ありけり」の如き歌風を見るべし。長歌は悉く萬葉假名を用ひて記せり。

清薰詠草 寫十卷

前田利保

弘化三四年の長歌・短歌を記せるもの一冊、清薰詠草と題す。嘉永元年より同四年までの詠を集めたるもの一冊。上欄に題並に當座兼題等を擧げ、下欄に年月を誌せるもの一冊。嘉永五年の詠を日並順に記し、表題に清薰日記

家集の部

と記せるもの一冊。部立して嘉永六年の詠を収め、上に清薫集と題せるもの一冊。部立して清薫集と題したる安政元年の詠一冊。同じく安政二年の詠一冊。清薫詠草と誌したる安政三年の詠一冊。同じく四年のもの一冊。安政五年戊午歳誌一冊。この一冊には歌を主とし、所々日記を書き附けたり。以上十冊前田伯爵家にあり。

嘉永五年寒中出詠 寫一卷

前田利保

寒三十日の間一日一題づゝ。春七首、夏三首、秋七首、冬五首、戀雜各五首の詠を集む。

清薫詠草注解 寫一卷

同

安政二年詠草三十三首の註釋にて、題は梅、眞言院御修法、上元、踏歌節會、獻御粥、卯杖等年中行事に関するもの多し。

清薫集 二卷

同

以上の詠草等より抜きて、前田則邦の撰せるもの。短歌・長歌・今様・旋頭歌をも載す。前田利保侯の序、安井春雄の跋あり。明治廿八年上板。○富山藩主利録の男。天保三年家督。安政六年卒す。六十歳。本草通串九十四巻を著す。歌は海野游翁に學び、語學并に歌學上の著少からず。

涙松集 一卷

吉田松陰

憂國の歌多し。巻首に涙の松の下にて詠める「歸らじと思ひ定めし旅なれどひとしほぬるゝ涙松かな」の歌あり。よりて外題とす。多くは安政三年の作なり。○松陰は長門の人。勤王家、安政の獄に繋かれ、他の志士と共に同六年殺さる。年二十九。後明治の御代に至り正四位を贈らる。

誦善永言 寫一卷

巻頭「巻あぐるしのすだれの東雲に春立つことを見初めつるかな」以下部立を設けてその作を集む。浪波大城にありてよめる歌などあり。嘉永、安政の作か。作者は雪衣と號す。末に吉原竹詞半日五十首詠等を添へたり。慶應大學に一本あり。

内藤侯詠草 寫二卷

安政六年の詠草に長野義言の加點せるもの。延岡の内藤子爵家に一本あり。天保五年井伊家より入つて相續せし能登守政義の詠草なるべし。

内藤侯詠草 寫十二卷

安政四年己未より後の詠草内藤子爵家にあり。政義侯の自筆一本。

なすの露 寫一卷

本庄資興

宮津侯の弟にして世を早くせし人の遺草にて、巻頭「春立てど春としもなき園の中にをり知り顔の鶯の聲」以下百數十首の歌を収む。本庄子爵家に一本あり。

和歌類題川隈集 一卷

西原晁樹

短歌三百餘首、長歌數篇を収む。山鹿素水に贈る長歌など見るべし。近藤芳樹の序あり。外孫曾我祐準明治十三年上木す。○晁樹は立花侯の臣。皇學教授たり。安政五年歿す。年七十九。その遺著全部柳河市立花伯爵邸内對山文庫に保存せらる。

山のくち葉 寫三卷

源 春 枝

三〇二

始二卷は部立あり。後一卷は拾遺にて年次順に列ねたり。歌数は百三十一首。書名は『山蔭にちりて朽ちなむ言の葉はかきあつめつゝかひもあらじな』の歌に由る。安政六年の日附あり。

大隈言道家集 寫四卷

今橋集二卷、戊午集二卷より成る。弘化二年より嘉永五年まで九年の作を、安政六年大阪中島に於て自ら淨書せるもの。越後長岡の萩原氏その自筆本を藏す。

大隈言道

草 徑 集 三 卷

前の集を少しく取捨し文久三年、門人茂村恒久の上木する所、從來眞淵の萬葉調、景樹の今古調を離れ、着想斬新平淡瀟灑の風を好みて詠めり。續歌學全書八編にも收む。

清隱佳樓歌集 寫一卷

並河尚綱

男尚清の輯めたるもの、美濃紙三十三枚、初に月前雁三首詠以下。東北大學本。

露のくち葉 一 卷

月 照

歌道奨勵會より發行せる雜誌五卷十一號に收む。時事に關する歌は少く指紳諸家の歌會に於てよめるものを集む。○月照名は忍向。京都清水寺の成就院の住僧にて勤王家、安政五年西郷吉之助と擁して薩摩の海に投じて歿す。年四十六。後明治の御代に至り正四位を贈らる。

順聖院君御詠草 寫一卷

島津齊彬

袖ヶ崎島津侯爵家に一本あり。横綴の一冊卷三とあり。橋霞以下の詠を載す。加筆の跡も歴々と記したり。この他千首詠あり。○齊彬は薩摩の二十八代の主、勤王の功により正一位を贈らる。安政五年薨す。順聖公と謚す。

燧餘詠草 寫一卷

鶴峯 戊申

詠草一卷と言語學雜誌所載の吉丸一昌氏の戊申に關する考に見ゆ。但し、己未だ見ず。○戊申は豊後の臼杵の人、季尼又海西と號す。烈公に召されて明倫歌集を撰ぶ。語學新書等著作多し。安政六年歿す。年七十二。

亞 行 錄 寫一卷

新見 正 興

安政七年幕命を奉じて、米國に差遣せられし時の詠にて、安政七年正月十八日出立より、九月廿八日神奈川着までの間に於ける長短歌を載す。ワシントンにて大統領に會せし時の歌もあり。横本紙數二十一枚。松井簡治氏自筆本を藏す。○正興は幕臣、豊前守と稱す。安政三年外國奉行となり、同七年村垣淡路守・小栗上野介を率ゐ華盛頓に使す。後元治元年職を免ぜらる。

景 山 詠 草 寫二卷

徳川 齊 昭

立春『四方山の霞と共に春立ちてうちいづる日の影もくまなし』以下雜の部までの歌を收む。弘化安政頃の作を含む。日光紀行を并せたる一本高松宮家にあり。又水滸にて西野宣明・間宮永好二人の撰みし景山詠草の稿本二冊大島雅太郎氏藏す。この稿本は瀟龍閣の用紙を用ひ、卷頭には「一とせに二たび春の色みえて霞たなびくみよしの山」の詠あり。春の部は宣明の朱點を加へ、夏以下及戀の部は永好青點を加へたり。水戸彰考館にも一本あり。又學習院には福羽美靜の寫せる烈公歌集一卷あり。

癸丑詠草 寫一卷

長田春夫

三〇四

春夫大人詠草 寫一卷

同

嘉永六年の詠及その他の詠を收めたるもの。春夫は大阪の富豪加島屋の主人にて、通稱を長田作五郎といひ、加納諸平に學び、鶴堂、又木綿園と稱す。文政元年に生れ、明治二十一年に歿す。

濱木綿園歌集 寫一卷

佐々木春夫の歌を近く本間良三郎氏が鯉玉集・青藍集・千船集・鴨川集・清瀆集・近世名歌集・月波集・大八洲集・秋草集・より抄出編次せるもの。己未だ一見せず。

青雲和歌集 一 卷

伊藤常足

部立してその詠を集めたるもの。未だ己の管見に觸れず。常足は筑前の人。安政五年歿す。年八十五。大正四年從五位を贈らる。太宰府管内志を著す。又視海和歌集・國縣和歌集を撰び、萬葉佳調注釋を著す。

繼塵庵長宣和歌集 二 卷

上卷部立あり短歌四百二十首を收む。下卷には紀行文章を收む。圖書寮に一本あり。

毛利廣鎮

徳山侯の集。八十歳までの作歌を類題とせるもの。近藤芳樹の跋あり。跋文に高き姿は黒髪の山の云々深き意は富海の海の云々と、その地の名勝を引きて贊したり。圖書寮に一本あり。

陽春集 一 卷

細川齊護

遺草十五冊中より七百十三首をぬき四季戀雜に分てるもの。明治三十六年詩百十四首、道の記一篇と泰巖公遺事を加へて細川家にて出版。齊護は熊本侯・幽齋の第十代の孫、左近少將に任ぜらる。萬延元年卒す。年五十七。泰巖公と謚す。

登波子詠草 三 卷

岩上とは

上中二卷は歌、下卷は文章を收む。中山美石と詠みかはしたる歌あり。市岡和雄の序を加へ、文久元年名古屋永樂屋にて上木。登波子は太平門人。三代調類題集の條を参照すべし。

櫻東雄歌集 寫一卷

佐久良東雄

長短歌、今様、二百十八首を收む。慷慨にして憂國の念篤く、氣節ある歌多し。丸山正彦氏稿本を藏す。又蓋園歌集と題せるあり。「まつろはぬ奴ことと東の間に焼き亡さむ天の火もかも」「天にのぼる心かくしてみな底にひそめる龍ぞ樂しかりける」「あきつ神我大君のおはします京の土はふむもかしこし」などその作風を知るべし。東雄は常陸の人。始僧となり康哉の教を受く。後還俗して靱負と改む。櫻田の變に坐して萬延元年獄中に歿す。年五十。後明治の御代に至り、勤王の功により、從四位を贈らる。

櫻東雄草稿 寫一卷

弗關大房・藤森大雅などと交りし時の紀文和歌の自筆を一冊とせるもの、墨付十枚、所々朱にて加筆あり。筆蹟も極めて美し。井上頼因氏の藏。

楳實 二 卷

遠藤延好

越後風巻神社の大宮司和泉守の集にて、萬延元年岩下貞融の序、文久元年寺田春榮の跋を加へ上木。

松葉集 寫六卷

松本弘蔭

天保三年より萬延二年に至る詠草にて、前田及の點を加へしもの。弘化四年點者の序あり。第六卷は安政六年より萬延二年に至る間、古ことの舍、鹿持雅澄の出題にかかるよし詠者の端書あり。自筆本孫松本吉氏所藏。○弘蔭は土佐の人、鹿持雅澄に學ぶ。元治元年歿す。年五十九。

谷耕集 寫一卷

長澤茂濟

部立あり。數百の歌を收む。○茂濟は但馬の廣野の人。

認香集 寫一卷

保田佐世子

四季等の部立を設けてその短歌を運ねたるもの。○但馬豊岡の人。

昨見集 寫一卷

松平康圭

短歌數千首を部立して收む。卷頭「見渡せばまだき霞の立田山夜半にや春のこえて來つらむ」以下。○康圭は棚倉侯。康爵の弟。安政元年家督し、文久二年卒す。

比古年侯歌 寫一卷

本居内遠に點を乞はれたるもの。卷頭「たが爲ぞ風のふきとく霞よりたえだえのこる園の梅が香」以下。九十首の歌を收む。井伊直弼侯の詠草ならむか。本居豊頤氏一本を藏す。

山川正宣家集 寫二卷

大阪圖書館にその自筆本を藏す。集の首に文化十一甲戌正月始志倭調、受業於洛北上賀茂山木安房守季鷹縣主と誌せり。○正宣は攝津の池田の人。季鷹の門人。文久三年歿す、年七十四。國學院雜誌二十三卷三號本間良三郎氏の説を参照せよ。尙佛足和歌集解の條を參考すべし。

源靜風家集 寫一卷

部立して「日の神の照しはじめし御惠を春立つけさぞまづ仰ぐかな」以下數百首を集む。松井簡治氏一本を藏す。○靜風は石州津和野の人、龜井矩賢并に茲尙二侯に仕ふ。

故郷の名残 寫一卷

佐田秀

勤王慷慨の歌を、伊勢物語の體にならひ、端書を加へたるもの。叢書料本卷十二に收む。○秀は久留米の人、白茅と稱す。明治四十年歿す。年七十六。

常葉集 寫一卷

小林真中

その所詠を部立して收む。○真中は伊勢の人。始め足代弘訓に就き、後中島廣足に學ぶ。

窓のくれ竹 寫二卷

部立あり。蓮阿・弘賢等と贈答の歌も見ゆ。楠公五百年忌の歌もあり。日尾荆山舊藏本、今靜嘉堂文庫にあり。

かとのりなきぬ 寫一卷

藤原在蔭

卷頭「さらでだに花待つほどの久しきを年のうちより春は來にけり」以下嘉永頃の作多し。大島雅太郎氏の所藏

本。

橋本忠久歌集 一 卷

石見國廻摩郡城上神社々司の詠を集む。年代未だ考へ得ず。清水千清叢書五に收む。

信久歌集 寫一卷

江幡 信久

その男の撰ぶ所、歌凡六百五十餘首、井上頼因氏一本を藏す。◇信久は秋田の人、屋代弘賢に學ぶ。嘉永頃まで存へたりと見ゆ。

一心居士詠草 寫一卷

歌數千二百餘、小野慶齋へ送りし夢物語、及越後下司として下りし時の越後海邊の記又鄭蘭の記等を交へたり。上野圖書館に一本あり。

市川美基大人歌 寫一卷

宜長の大和心の歌を頭におきてよめる歌などあり。清水千清叢書三に收む。

緒石落葉 二 卷

長澤 伴雄

上卷に短歌、下卷に長歌及文詞を藏す。明治四十二年に至り上板す。鳴川集の撰者、緒石舎はその家號なり。

歌林玉屑 寫一卷

丸山 武雄

詠草を集む。堀龍山の跋あり。信濃の人。みのむし菴と號す。

鋤柄助之集 寫一卷

武藏野集・大江戸集に載せざるを集めて一集とせるもの。慶應大學に一本あり。

竹の下集 寫小二卷

日尾 邦子

日尾荆山の妻花月園邦子の集にて靜嘉堂文庫に自筆本あり。卷頭に『つくし湯もろこし舟も霞むらむ大和島根ゆ春の立れば』以下四季・戀・雜と部立してその詠を收む。

面影 寫一卷

萬里小路睦子

水戸烈公に仕へしさが子の家集にて部立あり、卷頭『我心いたりいたらぬ方もなしけふ立つ春の行くに任せて』以下。一本高松宮家にあり。

秋庭詠草 寫二卷

同

水戸の徳川侯爵家にあり。◇睦子は従一位權大納言建房卿の六女。嘉永の初烈公の側室となる。公薨去の後髪を削り秋庭と號す。大正十年歿す。年八十。

桂の花 一 卷

横山 桂子

文久元年七回忌に方り、その子由清の上木する所。集の名は月前落葉をよめる『あかぬかな月すむ夜半に散る紅葉桂の花のこゝちのみして』の秀歌に取る。この歌乙夜の覽に入り天保二年散位の女官に叙せられしこと序に見ゆ。『隅田川花のしづくと見しほどに水泡流れて春雨のふる』の如き調の歌多し。◇桂子は横山由清の母、本名みちといふ。木間游清の門。安政二年五十六歳にて歿す。

續齋集 一 卷

飯田 秀雄

新古今調の歌多し。部立あり。安政六年、年平の跋、文久元年小林大茂の序を加ふ。明治九年に至り上木。◇秀雄は因幡の人、樟齋と號す。安政六年歿す。年平の父。

さねかづら 一 卷

宇都宮綱根

安政五年の作にかゝる。後門人その歌凡百五十を抜き、文久二年中村守手の序を加へて上板。始に歌論數條を載す、◇綱根は尾張津島の神官にて、氷室長翁及香川景恒に學ぶ。通稱右市太夫といふ。

空谷傳聲集

幽 眞

部立を設けて「北山は雪なほ寒し窓外の春は梅より明るくなりけり」以下美しき自然を詠じたる歌多し。齋藤拙堂及佐々木春夫等の序あり。文久三年上板。「花山の朝ある雲に打のりて心そらなり土はふめども」「小萩さく岡のやかたに琴とりて露ちる夜半の月を見るかな」等その代表的歌なり。◇幽眞は紀川畔なる不二崎に庵を結ぶ。菅茶山の門人にして詩を善くす。居を挹翠琴房といふ。

松田千秋家集 一 卷

松田千秋

橘冬照の門人。文久三年とせ子の序を加へ上板。

遊李之屋集 一 卷

三橋鶴彦

四季戀雜の部立を設けてその遺詠を集む。卷頭「年の内にほほゑむ梅の花見れば春の立るは疑もなし」以下。文久三年その師神山魚貫の序同門山口豊風等の跋を加へ、慶應三年上板。◇鶴彦は魚貫の門。文久三年歿す。年五十五。

臥牛齋詠草 寫四十二卷

五十嵐篤好

文政三年より文久二年に至る四十二年間の作、短歌約五千五百、長歌四十篇、旋頭歌十首、外に文二十四篇を收む。部立を用ひず年代順に列ぬ。尙國學院雜誌二十四卷・九十號平井武夫の説を參考すべし。

敏成詠草 寫十卷

吉田敏成

弘化元年より文久三年までの詠草。自筆本上野圖書館にあり。一名を千秋樓詠草とも記したり。◇敏成は通稱信之助、千秋樓と號す。木綿通政の著者にて思誠堂漫筆あり。三十一番歌合あり。慶應年間に歿す。

かきあつめぐさ 寫一卷

原田七郎

原田七郎の歌稿にて讚楠大人長歌を始め御廣瀬正種に贈る短歌等を收む。稿本無窮會にあり。◇七郎名は種方、英彦山座主の家人、勤王家、文久三年一山義學の難に遭ひ遁れて伊豫海に投じて死す。後正五位を贈らる。

篠舎集 寫二卷

西田直養

上巻短歌、下巻長歌、及文章を收む。短歌には詠史多く、長歌には讀平家物語歌、戒駭奢歌、古事記傳及古史成文を見る歌等あり。◇萬葉長歌格・篠舎漫筆等の著あり。その條を参照すべし。

蒼山和歌集 小二卷

倉谷友子

部立あり。「げさ見れば神代の春のみちかへず霞みそめけり天の香山」以下數百の歌を集む。文久二年七十三才の時撰めるよし、梅子の跋に見ゆ。元治元年加茂成置の序を加へて板行。◇友子は京都の人、通稱主水。加茂季鷹の門。桂園と號す。

葎園和歌集 一 卷

河邊 一也

三一二

全集の中より、四季、戀、雜合せて百首を抜けるよし、文久三年の自序に見ゆ。卷頭「ほのくゝとかすむを見れば久方の雲路よりこそ春は來にけれ」以下。元治元年門人一枝堂村田清忠の序を加へ上板。又續歌學全書八編に收む。「古里を夢にみし夜のあかつきはまだ門出するこゝちこそすれ」などその佳作なるべし。◇一也は江戸の人、通稱清意、葎園及忍岡隱士と號す。島山梅軒の門。明治二年歿す。年六十八。

師岡正胤翁略歴附歌集拔萃 寫一卷

元治元年十二月角田忠行が正胤の歌をぬき、首にその略歴を掲ぐ。「繼橋のたえし入江も霞のみ蓄のまゝに立わたりつゝ」以下短歌のみを收む。尙志能夫久佐の條を参照すべし。

椎能故夜提 二 卷

橘 冬 照

部立して輯む。下卷には妻と世子の歌文をも收めたり。椎のこやでは椎の小枝の義。萬葉十四に「おぞはやもなほこそ待ためむかつ岑の椎のこやでのあひはたげはじ」の詠に資る。明治二年上木。◇冬照は守部の長男。文久三年歿す。

阿部正順家集 寫一卷

四季戀雜の部立あり。卷頭「立かへり我も神代の人かすといはるる春に逃ひにけるかな」以下。大島雅太郎氏藏本。◇著者は橋守部の門人、明治の始仕へて六位に叙せらる。

野 雁 集 一 卷

安藤 刀 綱

元治元年古風、今振二百首を自撰べるもの。古風とは萬葉調にして萬葉假名を以て書けり。今振りとは近代語を多くよみ入れたる歌をいふ。前者十六首後者百八十四首。その奥に「五十路までうたへる歌をかきつめて二百ちにも成にけるかな」の歌を添へたり。「あか棚のかなまりごと浮きにけり胡蝶のとばす桃の花片」「白露の玉のこぼるゝ音かとも聞ゆる夜のこぼろぎの聲」などその佳作なり。萬葉新考の著者、その條を參考すべし。

老のくりこと 一 卷

井上 文 雄

文雄晩年の作にて「劔太刀とぎて研きてえみしまつ大和心も老いにける哉」以下六十五首の歌を收む。元治元年山崎久敬の序あり。門人中村尙之の筆を、明治二年上木す。

紙魚屋家集 寫二卷

天保頃より元治元年までの歌を收む。顯阿の筆せる一本あり。◇京都の城戸千楯か、若しくはその子の集か。

紫灘遺稿 二 卷

眞木 保 臣

眞木和泉守の遺稿を垂井重明の輯めて明治十七年出版せるもの、歌詩文相雜りたり。勤王の事歴見る可し。◇保臣は筑後の人。水田天神の祠官、會澤安の著を讀みこれに師事す。勤王に志し、元治元年天王山にて自刃す。年五十三。明治二十四年從四位を贈らる。

垣内の柯可狹 寫一卷

長歌の部にその數八十三篇、その他短歌二十一首を添ふ。詠草春歌より大御代ほがひの歌まで、文久四甲子二月撰之とあり。弘化三年の頃には小梅に卜居せしよし歌中に見ゆ。天保十二年夏四月甲斐國より信濃に至り、佐

久間象山の許に遺したる篇もあり。書體は守部の手跡に習ひたりと見ゆ。或は上野の飯塚久敏などの作にあらざるか。慶大に一本あり。

清 煩 惱 寫三卷

加藤 若水

一卷には安政七年庚申正月三日よりの歌千五百一十一首を收む。卷頭「鶴の聲も聞えてほのく」と明けゆく空に春は來にけり」以下。卷二には文久新元辛酉仲秋朔より起り二年壬戌四月晦日に至る八百七十七首を收む。卷三は文久三年仲夏朔より季秋晦に至る歌數千二百首を收む。木曾川の邊を過ぎり正麟寺の山城山に登り、磯が崎の村、大門澤の橋などにての詠あり。◇若水は加藤少進入道とも誌せり。尾張の人か。

櫃下詠草 寫一卷

伴林 光平

一名を萬年樹下詠草といふ。光平自筆の一本大阪の佐々木春夫氏所藏。

南山踏雲錄 一 卷

同

中山侍従の南山義舉に加里、囚れて獄中にありし時著せるもの。奈良を發して京都へ赴く時の紀行歌を旨とす。自筆本三種あり。佐々木春夫氏所藏の一本明治元年上版。後幸田友成氏寫眞石版に附せり。

伴林光平家集 寫三卷

同

慷慨の歌多し。中村良臣の序を加へたる一本あり。

神樂の舎五百首 一 卷

同

上下合一冊。上篇には四季の歌、下卷には雜の歌を載す。長歌部に猿鳥復讐を詠める長篇あり。門人西尾義璋編

む。中村良顯の序あり。明治二十二年印行す。「ますらをが屍草むす荒野邊に咲こそ匂へ大和撫子」「櫃の實の風におつる音づれにまじるも寒し山がらの聲」「秋風はつゆにしめりて山松の葉むろの陵とふ人もなし」等その作風を見るべし。

伴林光平全集 二 卷

小野利教氏が櫃下詠草、神樂舎五百首、南山踏雲錄、その他短冊、色紙等より集め、その肖像及評傳を載せ、上卷には四季及戀の部、下卷には雜、詠史、長歌、文章を收めたり。大正八年出版。

鶯園歌集 寫三卷

前田 夏蔭

部立してその詠を集めたるもの。◇夏蔭は江戸の人。清水濱臣の門。鶯園と號す。烈公に召され明倫歌集撰修に與る。著作多し。元治元年歿す。年七十二。

捻紙歌集 一 卷

平野 國臣

入獄中紙を捻りて字形を作り、その所詠を留めたるもの。好事の士これを分ちて珍襲す。そのは詠詠消光の中に「御代の爲いかにつくさば足りぬらむ命は物の數ならぬ身を」などの詠あり。◇國臣は筑前の人。通稱二郎、醒軒と號す。勤王家。生野義舉に加里捕へられ、翌元治元年殺さる。年四十三。或は云ふ三十九と。明治の御世に至り正四位を贈らる。

江月齋遺集 二 卷

久 阪 玄 瑞

男道明が明治十年に輯むる所。その附録に歌集あり。花を見て「咲きにほふ花を見てだに忍ぶかな雲井の風のけ

ふはいかにと』以下五十六首。『いくたびも繰りかへしつづつ我君の御言しよめば涙こぼるも』大君の御馬の口をとり直し吉野の山に櫻狩せむ』の如き忠誠の情溢れたる作多し。◇玄瑞名は通武、通稱義助。長州藩士。吉田松陰門下。元治元年京都給御門の役に事成らずして、山崎に走り自刃す。時に年二十六。勤王の功により明治二十四年正四位を贈らる。

懸水筆乗 寫二卷

木下俊夫

俊夫は掛川の里長にして惜樂園と號し、姓を榛葉ともいふ。その作鱈玉鴨川等の集に入る。萬葉風にて慷慨の作あり。この書は隨筆の如き體にて中に歌を挿む。内閣に一本あり。

古園古香集 寫二卷

卷毎に部立あり。彌富濱雄・正宗敦夫氏によりて歌文珍書同好會より出版す。南天莊歌話には上下二卷、疵瑾極めて多し。下卷は一層劣れり。老後の作なればなるべし、とあり。◇古香は松平丹波守藩士神方新五左衛門の女。初名竹子。景樹門下にて、後には菅沼斐雄にも多少學べるが如し。『こと國に糸をとられて彦星のみけしの錦おりぞかねつる』『もののふの袖の浦わにかゝりたるもろこし船ぞ月の隈なる』の如き世を慨きたる作も交れり。

津藩齋藤拙堂和歌集 二卷

鈴木敏雄氏の編せるもの。一々所藏者を挙げたり。大正十四年馬場驥の漢文序あり。歌の數、五十首なり。樂山文庫にて發行し大正十四年同好の士に頒てり。◇拙堂名は正謙。儒者。古賀精里の門に學ぶ。津侯藤堂高尙に用ひられ有造館の督學となる。慶應元年歿す。年六十九。

平賀元義集 一卷

有元稔の編みおけるを、森田義郎の補修せるもの。上卷は天保八年より慶應元年までの歌を、中卷は長歌十八篇短歌八首を、下卷には四季、相聞、雜の短歌を載す。拾遺に長短歌の外、正岡子規の新聞、日本に載せたる元義の歌につきての論及年譜を載す。明治四十一年出版。『高田のや加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠吹き放つ』『雄神川あかとき寒み河上の五百箇磐村に猿さはに啼く』『妹か家の板戸押ひらき吾入れば太刀の手上に花ちりかゝる』の如き雄健の體多し。又好んで妹のことを詠めり。◇元義は備前の人、楯の舎と稱す。奇行に富みたる人にて、萬葉風の歌を詠す。慶應元年歿す。年六十六。

箭屋和歌集 寫一卷

竹内享壽

短歌の部二冊、長歌の部一冊、外に拾遺一冊あり。安政五年三月の跋あり。鎌田正夫の所藏本は歌數五百九十四首。村山松根の抄出せし本は百六十餘首。中に『古里の花たちばなの香をとめて山ほととぎす今や鳴くらむ』の一首を桂園のあるじ稱贊せしといふ。續歌學全書十編には抄本を載せたり。京大圖書館に尾崎六夫所藏の享壽の箭屋詠草一卷あり。三省軒今津孝信安政年間より寫し翠松園の藏書とはなしつ。慶應二年水無月閑齋の識語あり。◇享壽は京都の人、箭屋と號す。景樹門。元治二年歿す。年五十四。

竹内享壽歌集 一卷

明治二十二年鈴木重城の序ある一本は、歌數五十首に過ぎず。集の一名を、はつねぜりともいふ。

香川景周詠草拔萃 寫一卷

四季、戀、雜に分ち短歌凡百首を自抜き、父景樹の加點を乞へるもの。自筆本彌富濱雄氏藏す。景周は景恒の前名。

香川景恒歌集 一 卷

高橋古道の輯めたるもの。明治二十二年松波遊山校閲を加へて上木。中に「靡きふす尾花が末をむすびおきて垣根の水に月を見るかな」の如き詠あり。續歌學全書五編に收む。◇景恒は景樹の子。慶應元年歿す。年四十四。

景恒大人の歌 寫一卷

子日鶯以下の歌に熊谷直好の評を加へたるもの。

河本延之大家集 一 卷

松井永賢・平貞夫等その遺稿を集め、慶應三年その三年祭に拜郷蓮苗の序を加へて上板。廣福王府忘寂齋藏板とあり。◇延之は備前の人、公輔の子、可々樓と號す。慶應元年歿、年五十三。可々樓年々百首の條を参照すべし。

詩 歌 船 寫三卷

天 野 華

元治二年周防の花浦に歸郷したる時の作及毛利家の學生を教導せし頃の詩歌集にして憂國の作多し。東北帝國大學に一本を藏す。◇華は周防の人。

桂芳院遺草 一 卷

柳 原 安 子

詠草數卷中より、佐々木信綱抄出して、續歌學全書十編に收む。抄出の歌數七十五首「夕風になびくひよ鳥の聲おちて日かけ淋しき杉の一むら」「夜のほどの野分も知らず咲きにけり窓にとり入れし朝がほの花」◇安子は正親町實同の女、權大納言均光卿の室。慶應二年歿す。年八十四。桂園門下の女流作家。

調 鶴 集 三 卷

井 上 文 雄

短歌、長歌及文章を次第せり。慶應二年門人佐々木弘綱の序を加へ、同三年出版。藤堂侯資を助けられしこと序に見ゆ。續歌學全書十一編にも收む。清新の歌風を好み一ふしおかしきところを狙ひたるが如し。「岡越のきりとほしたる作り道卵の花咲けり右に左に」「賤の女がまゆ煮る袖にこぼれけりわらやの軒の山栗の花」「長き日をうすねぶりする關守が目をつぶらかに鳴くほととぎす」「彌陀たのむかたぬ姫も折々はむかしの春の夢や見るらむ」の如き新しきもの、野趣に富むもの、奇警なるもの、さまざまの體を詠ぜり。

桂 藤 二 卷

渡 忠 秋

元治の兵火に詠草焼けしを、門人等相謀りて輯めしもの。集名は、同門八田知紀がこの書の序の終に記したる、「蔭高き園の桂の花の香はきみが袂に残りけるかな」の歌による。源包智の跋あり。慶應三年上板。續歌學全書十編にも收む。南天莊歌話に極めて拙き歌の稀なる代りにすぐれてよきも少し。歌品は菅沼斐雄などと伯仲の間にあり。熊谷直好には遠く及ばず。集中にて一讀拍掌せしは初冬「櫻の實のあられとおつる澤水に鶯の數そふ冬は來にけり」月前雪「ぬば玉の夜はおもしろくふけにけり照るは白雪ふるは月影」なりと見ゆ。

向 陵 集 一 卷

野 村 望 東 尼

大隈言道の門人。望東尼の集にて四季雜の立あり。新しき境地を詠み出でたるもの多く、憂國の情は師翁の作に見るべからざる雄々しき調あり。「櫻花枝垂れて咲く窓の戸をたてながら織る機音かな」「川の瀬に洗ふかぶらの流れ茶を追ひ争ひてゆく家鴨かな」「先だてる針にひかれて行く道のまがればまがる糸の身ぞうき」の如き類

少からず。姫島日記、上京日記、夢かぞへ、防州日記等の中にも憂國の詠を挿みたり。「我世とはつゆ思はねど菊の花九重に咲く大御代もがな」「千萬のものゝ司といふ人ぞなか／＼天に地に背ける」「天が下人の心も甲斐なしと泣くか悲しき日くらしの聲」など時事に關せる作は一讀して懦夫を起たしむるものあり。明治四十四年佐々木信綱氏この歌集の外に望東の歌文集及傳を附して出版す。尙三宅龍子のもとにしづくを參考すべし。望東は筑前福岡の人、浦野氏。同藩浦野貞貫に嫁き、安政四年夫他界の後髪を削り、望東尼と稱す。勤王の志篤かりしかば、姫島に流さる。高杉晋作はその舊誼に報いんとて牢籠を破りこれを救ひて長門に居らしむ。慶應三年歿す。年六十二。後勤王の功により正五位を贈らる。

後小竹垞集

寫六卷

村田春野

山形侯水野侍従の命により、慶應三年卯年の冬門人朝生允懷これを集め、同門人前駿河守藤原廣風これが序を作る。水野子爵家に一本あり。

同續籙

寫七卷

同じく子爵水野忠欵氏所藏。

富士のぬ集

寫六卷

岩崎勝興

四季、戀、雜の部を分ちてその所詠をみづから撰びたるもの。集名は富士の山を題にてよめる。「白雲はとはに消えずて不二の根は花に紅葉に時めきにけり」の詠による。中に所々文をも交へたり。家藏本。勝興は濱松の水野侯の臣、越前守忠邦に仕ふ。村田春門に學ぶ。文政の頃より詠み出でたるを慶應三年自撰せるなり。文化十一年

に生れたれば五十四歳の時の撰にかゝる。

久貝正典歌集

二卷

歌數七八百、中に佳調多し。「慨くかな鉛の中の白金は賤の男だにも吹き分くる世を」「人やいかに練り麻の綱にひかれても出でがてにする木さへある世に」「雲井より鳶のおとせる魚につく蟻に似たるかあはれ世の人」「酔ひしれて強きに誇る益荒雄を少女笑ひて高殿下る」の如き慨世の作に富む。幕吏中の歌人の雄なるべし。大口鯛二氏一本を藏す。歌文珍書同好會より出版。正典は幕臣、天保十二年大番頭となり因幡守と稱す。安政司獄の事に與る。文久二年職を免ぜられ明治の初年歿す。

攬涙集

寫一卷

岡本栖雲

門人の輯めたるものにて、始に詩、次に歌を載す。卷頭「立こむる霞の色ぞ阿武の山松よりこきの春の一しほ」の詠あり。歌數多からず。栖雲は玉祖祠官、幕末より明治に互りての人。

昌廬家集

寫一卷

「初日影匂ふ軒端にうぐひすのまづこの春のことはじめよし」以下。四季戀雜の短歌及長歌を收む。會田幸成の序、及其氏の跋を加へ明治元年上梓。昌廬は江戸の人、橋守部及冬照の門、橋本直香・會田幸成・松浦竹四郎等と友とし善し。慶應二年六十餘歳にて歿す。

どかのおちば

二卷

山田嘉猷

山田嘉猷の集にて、明治元年その子永年、父の十七回忌に方り、遺稿を上木す。大橋長嘉の序あり。嘉猷は京

家の集部

都の人。城戸千楯に學ぶ。

鼎足集 寫二卷

阪本春樹・堀田清孝・中城直守三人の詠を、部立して集む。明治元年撰。土佐群書類從百十七に收む。

夢の舎集 一巻

高島式部

四季・戀・雜・言葉題の部立によりその所詠を老齡(八十四歳)の筆にてみづから版下をかきおろし、文久二年、後白菊園主人即千種有文卿の序を讀ひ、慶應四年自跋を加へて上木せしもの。集名は有功卿の命名せられし家の號による。表紙に青麥の穂を出したり。「霧ふかきあしたの原を分けゆけば聲ばかりなる雁ぞ落ち來る」「春雨にぬるゝもよしや吉野山花のしづくのかをる下道」などその秀吟なるべし。蓮月尼と並び稱せられたれど一二歩下るべし。集中に假名の誤ある歌も交れり。◇式部名は刀美子、京都の人。景樹及千種有功卿の門に學ぶ。明治十四年九十七にて歿す。

梅廼家集 寫一卷

佐々木弘綱のなほ徳綱といへる頃よめる歌と、その父利綱の歌とを合せ、部立して集めたるもの。佐々木信綱氏一本を藏す。

海人の刈藻 小一卷

太田垣蓮月

佐川氏編む。部立あり。渡忠秋・近藤芳樹の序、櫻戸玉緒等の跋あり。明治元年上木。「おり立ちて朝茶洗へば鴨川の岸の柳に鶯のなく」「岡崎の月見に來ませ都人かどの畑芋煮てまつらなむ」「はらくとおつる木葉にまぢり

寫集の部

來て栗の實ひとり土に聲あり」等その代表作なり。續歌學全書十一編にも收む。蓮月家集は明治卅年に刊行す。◇蓮月は京都の人、千種有功卿の門、明治の始め頃の女流作家の第一人。明治八年歿す。年八十五。

蓮月二女歌集 小一卷

太田垣蓮月、高昌式部、二才女の歌をぬきて明治元年上木。川口氏の編。式部には別に論語の格言を詠める歌あり。釋和集の部参照すべし。

おろかおひ 寫一卷

鈴木重嶺

松岡御中の請により慶應四年佐渡相川の官舎にて自詠を叙でたるもの。自序あり。卷頭「春のたつけふの心を心にて年の一とせ過してしがな」以下。長歌には賀武庫浦砲臺築造歌あり。御中の跋を加ふ。井上頼國氏藏本。

夢路廼日記 一巻

同

天保十三年十二月二日命を奉じ京阪地方へ趣き、翌年五月九日江戸へ歸るまでの日記にて多く歌を旨とせる紀行歌集なり。

木原藤園集 寫一卷

叙景の歌の外、武器を詠み入れたる歌多し。◇藤園は肥後の人。長瀬眞幸の門、慶應四年歿す。年六十四。

竹柏園歌集 二巻

佐々木弘綱

明治元年四十一歳の時、自撰せるもの三巻あり。易簫の翌年即明治二十五年嗣子信綱氏出版す。福羽美靜及小中村清矩の序あり。續歌學全書十二編にはその中より抄して載せたり。「住みすてし誰がふる里ぞ碎けたる瓦のひ

まに菫咲きたり』吉野山さくらがもとに袖たれて花見るけふを我世ともがな』の如き詠あり。

軒のしづく 寫一卷 向山 篤

部立を設けて鈴木重嶺の撰ぶ所。歌數凡千首に上る。◇篤は彦根藩老、通稱源太夫。詩人向山黃村の父。

さくら戸家集 一 卷 山内 豊城

『古里のあづま路よりと聞くからにけさ來る春ぞ嬉しかりける』以下四季戀雜の部立によりてその詠を集め、十三回忌に出版す。前田夏繁の序、松本順の跋を加ふ。◇豊城は通稱徳右衛門、書を善くし樂齋と號す。享和二年に生れ明治維新の頃歿す。

足代幸子歌集 一 卷

『けさみれば三輪の神杉うづもれてかすむぞ春のしるしなりけれ』以下。◇幸子は足代弘訓の女。文政二年に生れ、明治六年に歿す。榊原頼輔氏その遺詠を集め、大正の御代に至り速寫版に附す。

將滿遺稿 寫一卷 小島 將滿

長短歌交へ擧ぐ。慷慨の歌あり。落合直亮の序、竹田直助の跋あり。明治二年の奥附ある一本井上頼園氏藏す。◇將滿は江戸の人。通稱四郎。一名を武振といふ。

にほのうきす 小一卷 宍戸 直激

抄宗寮叢書一卷に收む。明治元年上刻。◇眞激は長藩の士、通稱を左馬介。勤王家。元治元年斬に處せらる。年六十一。後正四位を贈らる。

綠濱詠草 一 卷

抄宗寮叢書第二卷に收む。明治二年上刻。◇元圃は長藩の家老。通稱越後。元治元年自歿す。年五十。勤王の功により後正四位を贈らる。

福原 元圃

高田のおしね 一 卷

前同書に收む。以上三人毛利侯の家老にて、藩家の危き時命を捧ぐ。共に近藤芳樹の跋あり。◇親相は長藩の家老、通稱信濃。元治元年自歿す。年二十四。後勤王の功により正四位を贈らる。

國司 親相

長行公和歌詠草 寫一卷

小笠原 長行

稿本にて別に部立を設けず。明治時代に入りての作。晩年花卉を好み、山上憶良の七草の詠にならひ『我園は尾花女郎花藤ばかま萩葉鶏頭よめ菜水引』等の如き作あり。子爵小笠原長生氏その自筆本を藏す。◇長行は唐津侯の世子、壹岐守と稱す。幕末に老中に列し、幕政に與る。明山と號す。明治二十四年卒す。

養老塙和歌并詩 寫一卷

同

明治四年の作にて横綴稿本一冊、竹に雀などを詠める歌あり。

養老塙歌草稿 寫一卷

同

『つらかりし昨日の雨のなくばけさ分きてのどけき空を見なまし』以下三十七首。

平野國臣歌集 一 卷

小本一冊明治二年に上板。慷慨の歌多し。『我胸のもゆる思にくらぶれば煙はうすし櫻島山』今しばし待てや都

の花もみち行幸ある代となさでやむべき』『ささらがた錦のみ旗なびけとや我が待つことも久しかりけり』等勤王の情の迸りいでたる流暢の作多し。

忠宣公御詠 寫一卷

鍋島閑叟公の歌稿。初聞鶯「春ごとに聞くとはすれど鶯の初聲ばかり嬉しきはなし」以下四十五首を收む。佐賀市鍋島侯爵家内庫所にあり。◇直正は佐賀藩主、初名齊正、閑叟と號す。勤王の功により従一位を贈らる。明治四年薨す。年五十八。

鍋島直正

麻懷詠草 一 卷

部立してその詠を集む。その裔孫織陽氏所藏。大正に至りて出版す。◇賀親は賀世の子、文政九年に生れ、明治三年に歿す。中村良臣及加納諸平に學ぶ。隨筆本草等の著多し。

室谷賀親

ものましば 一 卷

短歌長歌數多からず。明治四年古川躬行の序を加へ、野呂直貞上木す。

小山敬容

花なきはな 寫一卷

五卷合せて一冊とす。各部立あり。雜の部には詠史の歌多し。學習院に稿本あり。

大國隆正

露山集 一 卷

「高き屋に千里をかけてながむれば昨日にかはる初霞かな」以下三十首を收む。中に海防巡視の歌などあり。

毛利敬親

毛利教親遺草 寫一卷

歌數極めて少し。中に清溪十景の和歌等あり。毛利公爵家に一本を藏す。◇敬親は萩の藩主、大膳太夫といふ。勤王の功あり。明治四年薨す。年五十三。忠正公と諡す。後正一位を贈らる。

またるゝ聲 寫一卷

岡本保孝

保孝の歌に黒川眞頼の評を加へ、更に意見を記したる小冊子。書名は始に「珍らしき聲速にもらしてよ空にまたるゝ鳥にならはん」の歌に由る。明治四年の日附あり。

なるをの松 寫一卷

同

明治五年妻八百子を悼む歌文なり。書名は始に出でたる「我はもよ如何になるをの松が根の」の歌にとる。黒川眞頼の加評あり。原本上野帝國圖書館に存す。

萬廼舎集 三 卷

林保綱

四十歳以後の詠六萬首中、よき歌をぬき部立して明治六年上木す。その師神山魚貫八十六の時の歌、及正木正詔の歌あり。

梅園歌集 一 卷

吉山直内

四季雜の部立を設けて、自詠を集む。長歌も短歌に交へ出せり。文の部に神代のこと、國學・大和魂・孟子をすつる・五行説・歌よみ・二條冷泉復古元教等の説あり。明治六年に成る。◇直内は熊本の人。

都久波集 一 卷

色川御蔭

筑波山は山しげ山の歌により集の名とす。四季戀雜の部立あり。終に長歌數篇を載す。明治十八年その十三回忌

に方り嗣子誠一上木。◇御蔭は常陸の人。色川三中の弟か。

湯本武彦詠草 寫一卷

歌數多からねど佳作あり。鳥取地方の名所を詠み入れたる歌あり。卯月一日弓場にてよめる「一寸ちに思をこめて放つ矢のとくもくれぬる春し恨めし」の如き、又「暮れていにし春を戀ひしみかほどりの鳴く夕かげに小雨そぼふる」又明治四年八日再京都に上る途上の作と題し「千代川の岩間をくぐるかにかくに我思ふことのつきずもあるかな」の如き詠あり。明治庚午漢文の自題あり。蓋し歿前三年の作なるよし兄文彦の奥書あり。慶大圖書館に一本あり。◇武彦は鳥取藩士、通稱助之丞、弘化三年に生れ、吉野金陵・春日潜庵・重野成齋等に從遊す。明治六年歿す。享年二十八。

幽囚日録 二卷

小杉 楳 邨

文久三年彌生國事の嫌疑にて入牢仰付られし時より、明治維新に方り赦免せられし時までの日記の歌集にて、明治四十年眞蹟のまゝ石版に附せしもの。首に「家忘れ身もたな知らず道かへてこはいづかたに誘はれゆくも」の詠あり。中にフルベキ氏の詠める國歌をも記したり。

浮木のかめ 一卷

中山 宮 子

卷頭「もしほ草かくも甲斐ある初春に視の海の玉拾はばや」以下。三十三回忌にあたり矢鳥作郎出版す。書名は「嬉しくも花の盛にあひにけりそれや浮木の龜の尾の山」の詠にとる。高崎正風の長文の序あり。その間歴を知るべし。「入相の鐘にちりゆく人をこそあだなるものと花は見るらめ」の如き詠あり。◇著者は周防の人、香川

景恒の門に入り、蓮月・式部・敦子等と交る。國の喪にあひて尼となり國々をめぐる。明治七年卅二歳にて歿す。

藤のうら葉

從四位麻坂侯の遺詠の中、百首を嗣子安斐の抄出して、明治八年その一周忌に上板せるもの。その師加藤千浪の序あり。◇安宅は龍野藩主。安董の子、中務大輔といふ。安政中幕府の老中となり四位の侍從に叙せらる。文久二年家督を養子安斐に譲る。明治七年卒す。年七十四。

竹廼舎家集 寫七卷

池 田 慶 徳

鳥取侯池田慶徳の集にて、四季戀雜の部立を設け短歌九百余を収めたるもの。同名の一卷には五百三首を収めたもの。共に池田侯爵家にあり。◇慶徳は鳥取藩主、明治九年薨す。年四十三。從一位を贈らる。

しのぶくさ 寫一卷

同

正國院殿の十三回忌の長歌、贈亞相源朝臣の一周忌、父君の三周忌に、侍從源直信朝臣の身まかりければよみて供へたる長歌、その他の長歌及文章を収む。一本池田侯爵家にあり。

千竹園集 寫一卷

森 爲 泰

卷頭「うらうらと朝日の影も出雲なる松江の里に春は來にけり」以下部立してその詠をあげ、評語を朱書せる稿本予が家に藏す。中に天保八年正月四日に詠める一日百首あり。千家尊朝をいたむ歌多し。「有やとも人のとふべき身ならねど世に住むことは嬉しかりけり」の如き述懐あり。◇爲泰は出雲の人。中村守臣・千家尊孫の門人にて千竹園と號す。明治八年歿す。年六十五。

隨 錄 集 一 卷

伊 達 自 得

三三〇

紀州時代の花やかなる、大阪時代の巧なる、東京時代の枯淡なる詠を、門人の輯めたるもの。本居大平・千種有功・松平忠敏・青木雅宣・近藤芳樹等の諸家の批評を附し、その意見に合はざるものには自家の駁論を加へたり。明治八年近藤芳樹の序を加へて上版。篇を四つに分ち、首にありし世の巻、次に同じくありし世の巻、次にすてし世の巻、次に遊戯の巻とせり。第一ありし世の巻頭、立春「葦原の中つ國原うちかすみ緑角ぐむ春は來にけり」以下、各篇の末に長歌を附す。遊戯の巻には幽居五十首を載せたり。禪味を帯びたる歌少からず。

餘 身 歸 一 卷

同

紀州の藩公に用ひられたりしが、一朝失脚して田邊に讀居せられし十餘年間の心事を雜筆の體に誌し、中に歌を挾めるもの。明治十年中村敬宇の序、高橋泥舟の跋あり。跋中に云へるあり、英靈鬱勃之氣否而不露、瀟灑間澹之致味之不盡云々と禪味を帯びたる作多し。それらの中より二三を擧ぐれば「争ふもはかなの業や名取川何ばかりなる名をとらんとて」「夢もなく眠たらへる曙にかすむ外山の花を見るかな」「はてもなく限も知らぬ大空を心となして月を見るかな」に於けるが如し。◇千廣は紀伊の士、晩年入道して自得と稱す。本居大平に學ぶ。明治十年歿す。年七十七。伯爵宗光の父。文集あり、枯野集といふ。大勢三轉考・和歌神話等の著あり。近時陸奥廣吉氏の發行せる伊達自得翁の全集にはこれらを収めたり。

葎 屋 集 小 二 卷

物 集 高 世

部立あり。速見氏の序を加へ明治十年豊後の杵築にて出版せるもの。物集高見博士の父。尙詠學新論等の著あり。

千 浪 自 筆 詠 草 寫 一 卷

加 藤 千 浪

自詠中住調のもの、四季戀雜五十七首を抜きたる自筆本彌富濱雄氏藏す。萩園歌集は己いまだ見ず。◇千浪は江戸の人。岸本由豆流に學ぶ。萩園と號す。明治十年歿す。年六十八。服部謙の墓碑銘あり。

な つ 衣 寫 六 卷

伊 能 頴 則

部立して短歌を集む。辭世をも收めたり。續歌學全書十編には、その中を抄出せり。「ふりすべる濱名の橋のむらさめに雲のあとおふほととぎすかな」「里遠き山の尾崎のふる社人もつかへず神さびにけり」の如き詠あり。別に長歌集あり。又長恨歌・句題和歌あり。◇頴則は下總の佐原の人。神山魚貫の門。明治十年歿す。年七十二。

唯 心 庵 家 集 寫 一 卷

拜 郷 蓮 茵

一名を梅花園蓮茵翁家集といふ。部立あり。卷頭禁中立春を詠める。「宮人の星をとなふる聲すなり雲の上にも春や立つらむ」以下辭世まで。維新當時のことを詠める「みだらじと引けば中々もつれあひて糸口わかぬ世にもあるかな」「えぞ知らぬこと國めけるそぎ袖や神世にかへる手ぶりなるらむ」の如き詠あり。◇蓮茵は伊勢の人。京都に出で高樹院に住す。

宣 灣 親 方 家 集 一 卷

宜 灣 朝 保

一名を松風集といふ。卷頭「山の端にけさ立ちそむる霞こそ冬と春との隔なりけれ」以下四季戀雜の部によりてその詠を収む。護得久朝置の編みて明治二十二年に上木せるもの。松風集と題せるはその家號松風齋の名による。◇朝保は沖繩の人。歌を八田知紀に學ぶ。明治の初め頃東上せし日記などあり。明治九年歿す。年五十四。

家の集の部

橘曙寛遺稿志濃夫廼舎歌集 五 卷

世の常の集と異り、巻頭の歌の意により、第一集以下五集まで、松籟艸・襦袢艸・春明草・君來艸・白蛇草と題したり。歌風萬葉の素朴をねらひ、平語も交へ清新なるもの多し。明治十一年近藤芳樹の序を加へ上木す。

橘曙寛全集 一 卷

井出今茲

前の集の外、長歌及文を集めたる藁屋詠草、並に文集又屏風、巻軸などに書する爲にせし沾哉集、旅行日記たる辯の薫、隨筆たる圍爐裡譚、撰集たる花廼沙久等を集め、巻頭に肖像、墓碣、小傳を加へたり。「國をおもひねられざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな」「米の泉なほ足らずけり歌をよみ文をつくりて賣ありけども」「春にあけてまづ看る書も天地の始の時とよみいづるかな」「すく／＼と生ひたつ麥に腹すりて燕とびくる春の山畑」の如き蒼古なるもの瀟洒たるものさまざまの體あり。特色のある作多し。明治三十六年富山房より發行す。

果園雜詠百首 一 卷

佐久間果園

短歌十一稿千五百首を中より抜きて、天方松旭に與へしものに、長歌六稿二千首中より、纏に十首を抜き集中に加へたるもの。「おほぐるの駒のたつがみかをるなり白河こえの花の吹雪に」「露ながら深野のさゆり荷ひ來てうる聲涼し市の朝風」などの詠あり。本居豊頌の序を加へ、明治十一年上木す。○果園名は種、小倉藩士。秋山光彪に學ぶ、明治二十五年歿す。年九十。

なおりその花 一 卷

村山松根

折々に詠める歌を集む。明治九年近藤芳樹の序、山中猷の序を加へ、明治十一年上版。「ゆく水に影はありながら

三島江の柳にこもる春の夜の月」「瀧めぐりする人ならでたれか見んきさの小川の山吹の花」の如き佳什あり。○鹿兒島の士、文政五年に生れ、明治十五年に歿す。香川景恒及八田知紀の門。

小竹舎家集 寫二 卷

竹中玄脩

遠藤元信の爲に自詠を撰びたるもの。巻頭「行くとのみ思ふ月日の立かへり年のこなたに春は來にけり」以下部立を設けて列ねたり。明治六年増田繁幸の序あり。その後の詠も書き加へたりと見ゆ。大口員直の寫せる一本大島雅太郎氏藏す。

老のすさび 一 卷

眞鍋豊平

「老にけるかな」を頭に置きてよめる十八首、「老はしつれど」を尾に据ゑてよめる十八首合せて三十六首と、小倉百首の第一句を頭に置きて詠める百首及鶯百首を收む。明治十一年自跋及敷田年治の跋あり。

水穂舎詠草 一 卷

同

長歌六十三首、短歌六百十三首を收む。明治十一年の活字本なり。主として維新前の詠なれど、その後のも加ふ。別に水穂舎長歌詠草一卷あり。○大阪の人。

聽鶯遺稿 一 卷

久志本常庸

常庸の歌を加藤修亭の撰び、嗣子久志本常幸の明治四十年に印刷せるもの。巻頭に小照とその筆蹟「つくづくと思へばおもふこともなし世はたゞ神と君のまにまに」の詠を載す。巻頭、都鄙迎年「年たてば衛士のたく火も鹽釜の煙も春のかすみとや見む」以下紀行の歌も少からず。○常庸、字登卿、聽鶯と號す。足代弘訓に學び神宮に

家の集の部

奉仕して従二位に叙せられ、明治十一年七十二にして歿す。

蝶園集 一 卷

門脇重綾

部を短歌、長歌及拾遺の三つに分つ。遺勳の作を好み殊に長歌に優れたり。明治十一年飯田年平の序、宮原積の跋及墓銘を加へて上梓。◇重綾は伯耆渡村の人、蝶園と號す。維新の後神祇少輔となり、明治五年歿す。年四十七。名和氏記事の著あり。勤王の功あり大正八年従四位を贈らる。

多太珠廼舎歌集 一 卷

小河一敏

文久元治の交、勤王の爲に國事に奔走せし頃の詠を始めその他の作を收む。後大正年度に至り、詩集鷄助百首と共に出版す。◇敏は筑前の人、勤王家、維新の後官仕す。

辻辰之助歌集 一 卷

大熊辨玉

秋田の勤王家辻氏の詠を集む。中に「日の本は神のかためし國ぞかし醜夷らに土な踏ませそ」の如き攘夷思想をさながら詠ひたるあり。秋田勤王資料にその傳委し。明治八年歿す。年五十七。

瑠々室集 二 卷

吉田宏人

長歌二百十四篇を四季戀雜の部立によりて叙でたるもの。門人岡野良哉・犬山良造輯録す。近藤芳樹の序松翁の跋を加へ、明治十二年上木す。蒸氣車、傳信機、瓦斯燈、博覽會等最近の新事物も、よく古體によみなしたり。◇辨玉は神奈川三寶寺の住職、明治十三年歿す。年六十三。家をゆらむろと稱す。

雲山詠草 寫五卷

森有恕

四季、戀、雜、羈旅等の部立をして自詠を集む。明治十二年の自序あり。清國大人の教子とあれば殘夢の門か。武藏の笠山の人とあり。書は守部の流をくみたるが如し。

松琴詠草 一 卷

本多銳子

子爵本多正訥氏夫人の詠にして、芳野世育の序跋あり。明治十三年その三周忌に方りて出版す。◇銳子は松平左兵衛督信和の養女にて、田中の本多侯に嫁し、明治十一年歿す。

漫吟百集 一 卷

清水完和

自詠百首にて、嗣子有禮の全權公使となりて支那に赴くとき「別るゝも嬉しかりけり日の本の光をてらす旅ぞと思へば」の歌なども雜の中にあり。清國及稅所教子の題歌あり。明治十三年出版。◇有恕は鹿兒島の藩士。

かけひの水 一 卷

加藤祐一

部立あり。集名はその秀吟なる「たえだえにおつる寛の水ながら住めばこと足る世にこそありけれ」の詠による。村山松根の序、池原香堀の跋を加へ、明治十三年に出版す。卷頭「しばしとてまどろむひまに春は來ぬ夢こそ年の隔なりけれ」以下。◇定和は越前鯖江の人。城戸千楯の門に遊ぶ。

藤廼舎集 一 卷

近藤芳樹

明治十三年出版。

寄居百首 一 卷

三三五

嗣子芳介の家集より抜て、畏きあたりに上れるもの。續歌學全書十一編に收む。古風三體寄居歌談の條参照。

櫻 蔭 集 小 二 卷

その師加納諸平の風を慕ひて古調の歌多し。明治十一年村上忠順の集めたるよし橋とせ子の序に見ゆ。同十四年上木。尙類題清渚集の條を参照すべし。

あさぎぬ 一 卷

熊代繁里 小 出 祭

木曾路を經、京都に上り、舟にて歸れる紀行歌集なり。伊東祐命・間島冬道の評あり。黒川眞頼の序、祐命の跋あり。十四年に上木。續歌學全書十二編にも收む。

月 舎 集 一 卷

横山由清

黒川眞頼の撰む所、歌數三百五十八首。細川潤次郎・福羽美靜及眞頼の序あり。多くは文字題なり。明治十四年上板。續歌學全書十一編にも收む。

横山由清詠草 寫 一 卷

長歌十篇を録したるもの。黒川眞道氏藏す。◇由清は母の庭訓を受け、また井上文雄に學ぶ。玉のみすまるの條参照すべし。

楊 園 詠 藻 五 卷

渡 忠 秋

卷一は春夏、卷二は秋冬、卷三は戀雜の部とす。卷四は續篇にて同じく四季雜に分つ。卷五を文稿とす。平田康美の寫本京都大學にあり。

花仙堂歌集 小 一 卷

松波資之

翁の五十賀に方り、門人松浦辰男部立して、明治十四年上木。續歌學全書十二編に收む。◇資之は京都の人、天保三年に生る。景樹門、遊山と號す。

花仙堂歌集拾遺 一 卷

同

家集より抄出し部立したるもの。詞書の部、偶成の部、四季等に分つ。續歌學全書十二編に收む。

元 行 詠 草 寫 二 卷

部立して短歌を集む。作者姓氏詳ならず、松波資之の批點あり。中に故郷なる嫂のうた子ぬしの古稀の賀に寄松祝といふ事と題し、『松の尾の御垣の松に契りおきて君は十年をへなんとすらん』の歌あり。山城松尾社家の人の作か。慶大圖書館に一本あり。

刈 藁 集 寫 一 卷

高 平 眞 藤

長歌を部立して集む。佳作少からず。別に詠史三百首は上木せり。◇眞藤は一の關の國學者にて平泉志の著あり。米國大使たりし高平小五郎氏の養父。

水 舎 言 葉 の 塵 寫 一 卷

宮 本 池 臣

四季雜の部を立てその詠を集む。末に明治十三年播磨に遊べる時の歌等を載せたり。後大正九年贈位ありし紀念として出せる宮本大人遺著の中にその歌集を收めたり。こは門人石原康吉氏専ら材料を蒐集し、武田種文歌集の整理にあたりたりといふ。歌集の方は言葉の塵より歌數多し。末に六忠臣を詠める長歌なども載せたり。◇池臣は但馬の竹田の人。歌は桂園の流を酌む。勤王の功により大正九年從五位を贈らる。

わすれ貝 二 卷

村山松根

四季等の部立の終に文詞あり。税所敦子の序を加へ、明治十四年上木。續歌學全書十一編にも收む。◇松根は鹿兒島の人。

源淑野集 小 一 卷

榑原芳野

歌數纒に五十首。自筆の詠草一卷黒川眞道氏藏す。◇淑野は幕臣榑原氏、維新後文部省に奉職し、語彙の編輯に與る。文藝類纂の著者、明治十四年歿す。年五十。

稻舎集 二 卷

日下田足穂

續歌學全書九編にも收む。板本は明治十五年發行す。中に自由など新題にてよめる詠も交れり。◇足穂は幼名を嘉平といふ。上野館林の人。守部の門。稻舎と號す。明治二十三年歿す。年七十七。

くちば集 一 卷

岩崎利記

卷頭「古里となりての後も春ごとに吉野は花の都なりけり」以下流暢なる作多し。明治十五年中村良顯の序及自跋を加へ上木。鴨川集其他にも作多く出でたり。◇利記は播磨の阪越の人、文化十三年に生る。出版當時六十七歳。

歎露集 一 卷

大村純熙

大村三位の集にて、短歌を四季戀雜に分ちたり。明治十五年高崎正風の序、小出繁の跋を加へ同十六年出版。◇純熙は大村藩主、丹後守と稱す。明治十五年薨す年五十。後勤王の功により従二位を贈らる。

鈴木新歌集 寫 四 卷

「春なれや秩父甲斐がねほのぼのと消あえぬ雪に霞たなびく」以下。徳川達道伯爵家に一本あり。◇新は一橋家の歌の師にて藏書家。文集その他の著多し。明治十六年歿す。年六十七。

田中如迪詠草 寫 一 卷

「有明の月をたのみて出でにしを朝日にぬるゝ霜の道芝」以下七十四首。◇如迪は伊勢の津の人、通稱田中治良左衛門といふ。歌を芝原音信に學ぶ。明治十六年歿す。

董菜舎遺稿 小 一 卷

江里川千照

明治十六年上木。

梅園餘香 一 卷

白根多助

短歌九十五首外に句集を附録とす。辭世には「上野山花より花の奥に入りて花のかをりをしてねなばや」の詠あり。毛利元徳公の題歌、杉重華の題字、野村素軒の序を加へ、明治十六年出版す。◇多助は周防の吉敷の人、埼玉縣令となり治績あり。明治十五年歿す。年六十三。内務次官白根專一の父。

葵の舎集 一 卷

小原燕子の集にて、明治十六年鈴木重嶺の序あり。末にその追悼集をも添へたり。

杉山昌隆歌集 寫 一 卷

杉山檢校和一の裔孫にして、幕府に仕へ、鍼醫として八百石を領せし人の詠草。井上頼國民所藏たり。

井上文雄翁家集 大 三 卷

家の集部

七卷三冊大本なり。松の門三艸子の跋を加へ、明治十七年上木。

權の下枝 二卷

猿渡容盛

部立あり。中に月前難をよめる「片岡のかすみねぶる夕月をおどろかしたる難の聲」の一首秀逸ならむとの評あり。續歌學全書十一編には集中の作を抄して載せたり。◇容盛は小山田與清及平田篤胤に學ぶ。武藏府中の神官にて、明治十七年歿す。年七十四。

歌詩句集 一卷

林立守

今様琴歌、短歌、俳句を集め、明治十七年に上木す。土御門家の門下たりし事あれば、曆日に關する歌あり。部立も他と異なる。

紀文明公和歌墨蹟 寫一卷

堀田正篤

佐倉侯堀田正篤の色紙短冊にかきし筆蹟を廣田彬の輯めて摹刻せるもの。歌數二十六首。装禎の美なる一本大河内輝耕子所藏。

壽山歌集 寫三卷

水野忠精

四季戀雜の部立あり。一本水野忠款子爵の藏たり。壽山はその雅號なり。◇忠精幼名は忠良、後忠經、大監物と稱す。文久二年加判の列に加り四位侍從となる。明治十七年卒す。年五十三。

進木の落葉 寫二卷

鈴木某

若松縣・福島縣に奉職せし頃よりの歌を、毎巻部立して集む。何人の手にや加點あり。井上頼國翁一本を藏す。

うつせ貝 一卷

小山多乎理

門人山の井清澄輯む。自跋あり。明治十七年上板。◇多乎理は熊本の人、栗園と號す。參訂吉野拾遺などの著あり。

松屋歌集 大二卷

間宮永好

間宮資明編み。南部利剛・久米幹文の序、妻八十子の跋を加へ明治十七年上木。

慨世詠草 寫一卷

龜井茲監

嘉永六年ベルリの江戸灣入港をよめる「とざしつる浪の關路をいかなればえみしが舟のこえて來つらむ」以下七十一首の慨世の詠を收む。龜井伯爵家に自筆稿本あり。又茲監公叢書第五十卷にも收む。◇茲監は津和野侯。有馬家より入つて養子となる。後從二位に叙す。明治十七年歿す。年六十三。

數よみ五十首歌 寫一卷

同

新年霞をよめる「浦安のその名しるけく年波も霞も立てるけさのどけさ」以下五十首詠にて、福羽美靜の朱を加へたるもの、茲監公叢書第五十一卷に收む。

いそしや歌集 寫十卷

同

茲監侯の詠二千首を收む。宮崎幸麿撰ぶところ、茲監公叢書第五十三卷に收む。尙同伯爵家には自筆の詠草十卷あり。

雜詠草 寫一卷

同

家の集部

懐紙歌百四首、探題短冊六十首、その他を合せて百六十九首を収む。

翠園詠草 一 卷

鈴木重嶺

夙く詠みし歌に明治十七年の歌四百十首を加へたるもの。明治十六年七十になりける年の春詠める「いづれかと思ひしものを七十路の數にもけさはいりにけるかな」の如き詠あり。◇重嶺は文化十二年に生る。始め有定といふ。天保十三年二十八歳の時重嶺と改め、翠園と號す。佐渡奉行となる。

緑舎集 一 卷

鬼澤大海

石岡總社の祠官鬼澤氏の集。明治十八年大八洲學會第十二の附録として出版。本居豊頌の序あり。◇大海は常陸の人。本居大平の門。

中西爲子歌集 二 卷

南郷柳子の編むところ。明治十八年上板。

大脇春嶺

麗居詠草 一 卷

岩淵の人。明治十八年上木。

三山の琴 一 卷

熊野に詣で詠める歌六十二首を載す。明治十八年上木、袖珍本なり。南葵文庫本。

枕の塵 寫一 卷

太政官より縣廳まで官省諸局を詠める歌四十一首を収む。例へば賞勳局を「おのがじ、こくもうすくも咲匂ふい

さをのいろの品さだめする」に於けるが如し。明治十八年病間の作なること自序に見えたり。水野秋彦の跋あり。四季戀雜に分ち短歌千四百七十八首を収む。明治十八年の自序、高山慶孝の跋あり。續歌學全書第十一編にも収めたり。

櫻園歌集 一 卷

渡邊重春

石園集 二 卷

飯田年平

卷頭「煙立つひなの國原とし月に賑はふ御代の春は來にけり」以下、部立を設けてその詠を集む。下卷には日本外史の人物を多くよめる歌あり。例へば平將門をよめる「さかしらの猿島がたの宮づくり我爲張りしおしと知りきや」讚岐遷幸「さぬきの海くだけし浪の末かけてあれこそまされ國もとどろに」平相國「たへかねし小松がうへの悲しくばなどか老木の風はたゆまぬ」に於けるが如し。末には長歌をも載せたり。◇年平は因幡の人。秀雄の子。大平及諸平に學ぶ。明治十九年歿す。年六十七。

稻爾能弘群佐 二 卷

實田通純

門人子爵松平直平及川邊御楯等輯む。春部は明治十八年に夏部は十九年に上木す。

岩倉贈右大臣集 二 卷

岩倉具視

部立あり。終に維新前勅勅を蒙りし間の作を載す。高崎正風の序、編者間島冬道の跋あり。明治十九年上木。續歌學全書十二編にも収む。「勅なれば髪はきりもし剃りもせむ清き心は神ぞ知るらむ」「天地のそきたつ極み照すべきこの日の本の武士やたれ」「賤が屋に身は垢つきて住めれども猶すゝけぬは心なりけり」に於けるが如く憂

國の情溢れたる作多し。◇具視は堀川康親の二子岩倉家を襲ぐ。文久元年和宮降嫁の事に與り罪を得、髪を削りて友山と號す。後赦され維新の元勳たり。右大臣に任ぜらる。明治十六年薨す。年五十九。正一位を贈らる。
杉の落葉 一 卷
永井裁之
部立あり。明治十九年上木。◇裁之は紀伊の人。本居内遠門。安政二年紀伊古學館教授となり、元治元年歿す。年八十。

萩の花づま 一 卷

藤みほ子

鈴木重嶺の撰ぶところ、江澤述明の跋を加へ、明治十九年義子生澤濟齋上木す。◇みほ子は鹿野山下の女歌人。元治の頃歿す。

稻舎長歌集 一 卷

日下田足穂

長歌二百餘篇中半ばを抄し、明治十九年上板。道守の序、網野延平の序あり。

露園長歌集 一 卷

村山守雄

長歌四十四篇を收め、序句、短對、長對等の符號を加ふ。詠補正成歌、愛國歌などあり。終に門人福井彌彦の筆記にかゝる反歌辨を載す。明治十九年上板。◇守雄は大阪朝日新聞社の持主村山龍平氏の父。明治二十三年歿す。年七十三。

霜堤遺響 二 卷

近藤清石

上卷は短歌、下卷は長歌今様及文章を收む。萬葉調の歌多し。明治十九年の序あり。翌年上木。同第二集は明治

四十五年に出版す。そのはしがきに夫人よね子と共にことし八十の賀年に當れりとて、三十八年以降の作を收めたり。部立は四季、祝賀、壽旅、物名、哀傷、懷舊、詠史、雜、長歌、俳諧、歌及文に分てり。物名部には六十干支を詠めり。◇清石は山口の人。大内氏實錄その他の著多し。

幅江集 一 卷

笹目原佐

始に短歌次に長歌を載す。汽船をよめる長歌、市岡猛彦を悼める長歌などあり。◇原佐は常陸の高濱の人。鬼澤大海の門下。明治廿年その一周忌に方り男智幹出版す。

いなばの波 一 卷

上田重女

集名は毛利元徳公の賜りたる「千町田のいなばの浪もしづかにて年ある秋の色は見えけり」の歌による。近藤芳介の序を加へ明治二十年出版。

いそこすなみ 一 卷

藤井眞壽

美濃の人。明治十三年舊歌を焼き捨て五十歳以降の作を遺したるを稻川昌明の輯めて明治二十年出版せるもの。

類題鞆屋集 寫八卷

今泉蟹守

佐賀の歌人蟹守の歌集にて百首、五十首、三十首等定數の歌の外、四季その他の歌を集む。予が記憶に存せる所によれば、第五集は安政六年正月よりのもの、第六集は文久二年正月よりのもの、第七集は明治二年正月よりのもの、第八集は明治十二年六月以降の歌を收めたり。尙氏の著作にかゝるものを列擧すれば次の如し。

困窮百首(一名声の拾葉といふ) 同餘詠五十首あり。花月二百首 同後百首あり。螢雪二百首、物名百首、勤

王百首、秋七草百首、兵器百首、詠史三百首、聖曆梅花一夜百首、公事三百首、謡曲百首、竹廬舍蟲合、七夕七十首、富士五十首、名所三十首。
その他撰集せるもの樟葉三十六歌仙、樟葉百首撰、同後篇、樟葉十家歌集、同拾遺、同後篇、同拾遺、白縫初篇、同二篇、その他十餘種ありと見ゆ。◇今泉蟹守は佐賀の歌人。

本多俊民集 一 卷

門人大島爲足等集めて部立す。明治二十一年上木。夏燈をよめる「朝な朝な朝寝の床をまもりけり短き夜半の闇のともし火」文机をよめる「貝はおち漆蟲ばむ文机にひとのゆゑよし見ゆる夜かな」の如き佳作少からず。◇俊民は通稱熊之進、尾州藩の旗奉行たり。後愛知縣若宮八幡の祠官となる。氷室長翁の門、桂園派の歌人、明治二十年歿す。

御垣の下草 四 卷

税所敦子

部立して自ら撰めるもの。高崎正風の序及自跋あり。明治女歌人中婦徳の高き人。「時計るうつはの針もをりをりは後れさきだつ世にこそありけれ」「君が爲めちれとをしへておのれまづ嵐にむかふ櫻井の里」の如き詠あり。「忘れてもねなましものを古里の面影見する夜半の月かな」の如きその代表作たり。明治二十一年上木。續歌學全書十二編にも收む。同後篇二冊は三十六年上板。◇敦子は京都の人、林氏、鹿兒島藩士税所篤之に嫁す。歌は八田知紀の門、明治八年以降皇后宮に仕ふ。正五位掌侍となる。楓の内侍と呼べり。内外詠史歌集・心つくしなどの編著あり。明治三十三年卒す。年七十六。

柳のおち葉 一 卷

戸澤たね

柴田琴園門下の才媛たね女の詠歌三千餘首の中、その十が一を明治廿一年に戸塚利作氏の撰み出で、發行せるもの。上巻歌集、下巻文集にて中村秋香の序あり。

残香集 二 卷

香川景嗣

巻頭に「萬代の春立ちぬとや松の尾の神の宮人みき供ふらむ」以下。梅花園主人拜郷蓮茵の序、門人藤井謙校訂して明治二十一年出版。

ちりひぢ 一 卷

早川千代子

柴田顯光等の撰みたるもの。石橋蠶窓の序あり。明治二十一年上木。◇千代子は香川景嗣及佐々木弘綱等に學ぶ。

伊素志乃屋歌抄 一 卷

舊津和野藩主龜井鼓監侯の家集中より百首を撰び部立せるもの。加部嚴夫等の撰。松平慶永の序、福羽美靜の跋あり。明治二十一年上木。

回顧集 一 卷

天野御民

多杼留夢路、乙丑詠草、丙寅詠草の三より成る。慷慨の歌多し。明治二十一年上木。◇御民は山口の人、冷泉古風の子。防長回天詩史及詠史百首等の編著あり。明治の末年に歿す。

海人廻呼聲 小一 卷

村崎宗肅

一名を蕉園詠草といふ。井上文雄の題歌あり。書名は「きこゆべき一ふしもなし吳竹の世を知らぬ日のあまの呼

び聲』の詠に取る。佐賀市鍋島侯爵家内庫所には萬延元年の雨衣日記を添へたる宗肅の自筆本あり。詠草に八田知紀の評を書入れ、日記には古川松根の朱書の跋あり。

咲園集 一 卷

柴田花守

文政十二年頃より明治二十一年頃までの詠を集む。別に部立を設けず。巻頭に文政十二年の夏二荒にて詠める『陵はむぐらの露の玉敷きてこがねかゞやく二荒の山』の詠あり。◇花守は平田篤胤歿後の門人。琴園と號す。豊國神社の宮司となり、神道實行教の管長となる。明治二十三年歿す。年八十二。

美豆穂歌集 一 卷

稻葉雍通

白杵藩主の遺稿を藩士橋本衛等の集めたるもの。集名は姓の文字に因みて名づく。明治二十一年上木す。◇雍通は白杵藩主、弘通の子、寛政四年從五位下伊豫守に任ぜらる。

松のしづく 一 卷

蘿窓

愛知の人松園翁蘿窓の歌を門人小菅草月尼の明治三十二年に出版せるもの。二十一年鈴木重嶺の序、二十二年本居豊頼の序、三浦義純の序、酒向宏道の跋あり。『常にしもかくてあれなと思ふこそ春立つけさの心なりけれ』の如き詠あり。

櫻園長歌集 一 卷

渡邊重春

嗣子重兄が父の家集中、四十篇を抄して佐々木信綱氏に贈りたるもの。續歌學全書第九編に收む。◇渡邊重春は豊後の人弘化二年從五位下上野介に任ぜらる。明治二年中津藩知事となる。重春は足代弘訓及平田篤胤の教を受

く。明治二十三年卒す。年六十。

鶯園庭訓集 一 卷

福住正兄

大道・神・忠孝等教訓に關する長歌百二十九首、短歌三百十八首、旋頭歌十三首を門人原依寛の編みたるもの。附録には憲法發布國會開設等を詠める歌等あり。明治二十四年印行。◇正兄は箱根湯本の人。二宮尊徳の高弟、文政七年に生れ、明治二十五年に歿す。歌は吉岡信之の門。家を鶯園と號す。

翠巒集 三 卷

中山忠能

公の遺詠を孫孝磨公の意志により橋道守の撰べるもの。嵯峨實愛公の序、松浦詮の跋を加ふ。『おもふどち年の始につどひつゝ祝ふも君が恵ならずや』以下三百首。明治二十四年上木。◇忠能は弘化四年大納言に任ぜらる。明治天皇の外祖父にして中興の大業を輔け、明治十七年侯爵を授けらる。明治二十一年歿す。年八十。

東園家集 一 卷

林厚徳

林卓然の遺稿を外姪新居敦二郎編み、小杉楓邨の序を請ひ、明治二十四年その一周忌に方り印刷せるもの。巻頭『あげまきの昔も今ははらぬは春まち得たる心なりけり』以下。末に詩文を附録とせり。歌の外文集もあり。別に難波の巻一卷あり。前に出せり。◇東園名は厚徳、卓然と號す。徳島藩士にして明治二年藩の參政となり後民部權大丞等を経、濱松縣令などを務む。明治二十三年歿す。年六十三。

惠仁春の蔭 一 卷

三條西季知

部立あり。集名は京都の舊邸にある公の愛樹槐に因みて高崎正風の命ぜしもの。周公をよめる『たふとしや梳る

まもうつせみの世に賢きを忘れざりしは「力をよめる『足引の山をぬくとも何かせむ人の力は心なりけり』の如き仕あり。明治三十五年その三十三回忌に方り、嗣子公尤その遺稿より抄出して高崎正風の序、東久世通禧の跋を加へ上木す。◇季知は夙く中納言に任ぜられ、勤王の志篤く、文久二年三條實美等と共に太宰府に移りたりしが維新の後召還され、明治五年以來歌道御用掛となり、御製御歌拜見の榮を辱うす。後正二位に叙せられ伯爵を授けらる。明治二十三年薨す。歌は高松公祐に學ぶ。

松のしづ枝 二 卷

間宮八十子

短歌長歌及文をも載す。明治二十四年三月久米幹文の序を加へて上木。◇八十子は間宮永好の妻。和歌玉石集の著者。明治二十四年歿す。年六十九。

間宮八十子詠草 寫一卷

「こぞはまた見かへるばかり近けれど春になれたるこゝちこそすれ」以下自筆本あり。

海人の捨繩 一 卷

柳 檜 悦

水産其他、魚具海藻等に關する長歌の集にて、明治十六年の自序あり。題材全く他に異り新しきものを古調に詠ぜり。伊藤圭介の題辭有賀長鄰の序、田中芳樹の跋を加へ、明治二十五年に印刷す。◇檜悦は伊勢の津の人。海軍少將に任ぜられ水路局長たり。大日本水産會を起す。明治二十四年六十歳にして歿す。

春嶽遺稿 四 卷

始の二卷は詩文集にて後の二卷は歌集なり。明治三十四年出版。

ならのくちば 一 卷

奈良原時子

奈良原繁氏の女、歌文及追悼の歌を集めて明治十三年に出せるもの。下田歌子の跋あり。

井上翁遺稿 小一卷

井上信義

歌數二百三首。千秋園及本居豊頤の序を加へ、明治二十四年出版。

おほみめぐみのつゆ 一 卷

江澤述明

二十五年東北の野に大演習行はせられし時召されたる時の文及歌を收む。黒川眞頼の序を加へて出版す。

月花和歌集 寫二卷

安藤 參

明治二十四年濃尾の震災に方り縣民に恩賜金を下されたりし時、國恩奉酬の爲、岐阜縣知事を経て、宮内省に獻納せし月花の歌各百五十餘首を誌せるもの。宮内省に一本あり。

櫻園集 一 卷

大久保一翁

勝海舟の囑により鈴木重嶺あつむ。勝安房の序、宮本小一の跋を加へ、明治二十五年海舟書屋にて出版。歌の部七卷、文の部二卷、終に大久保世紀及大久保一翁略傳を附録とす。卷頭、安政元年試筆「花鳥に心ゆるすなからぶねの來むといひてし春にこそあれ」の如く幕末の時世に關したる作あり。雜の部に西郷隆盛に硯を贈りし時の歌などあり。◇一翁名は忠寛、石泉と號す。幕臣、右近將監といへり。維新の後朝廷に仕へ、明治八年東京府知事となる。子爵を授けらる。明治二十一年歿す。年七十二。

泥舟先生詩歌 一 卷

高橋泥舟の詩歌を小林節の集めたるものにて、歌の部は「木の間もる月もかすみて柴の戸に梅が香かゝる春の夜半かな」以下。廿五年出版。○泥舟名は精一、幕臣、伊勢守と稱す。最も槍術に長じ、講武所の師範となる。勝海舟、山岡鐵舟と共に三舟と並稱せらる。

かたみのいそ菜 一 卷

佐々木薫綱

岡本少將の父薫綱の遺稿にして、歌僅に五十首。本居豊頤・古屋實質の序、高橋富見の跋を加へて明治二十五年に上版せらるもの。

梅園詠草 二 卷

尾高高雅

部立あり。松平直克及本居豊頤の序、黒田清綱・鈴木重嶺の跋を加へ、明治二十五年上木す。上毛地方の門人など、詠みかはしたる歌あり。調と、のへる作多し。○高雅は佐渡に生れ、川越侯に仕ふ。後小参事たり。

洋行獨吟 一 卷

山口眞臣

部立なし。名の如く洋行中の詠を集め明治二十五年出版せるもの。

藻しほ草 一 卷

澤田弘道

家の集にて明治二十五年上版。龜山節字の題字、上月豊蔭の序あり。○弘道は明石の人。

餘光集 一 卷

松平春嶽侯の三年祭にあたり、集中より百首を抜き、高崎正風の序を加へ、明治二十五年出版す。巻頭「あら玉の年の始にうたげして春よりさきに霞をぞ酌む」以下。大口綱二の撰。

田口斌子遺稿 一 卷

歌文を収め、末に追悼及懷舊をよめる人々の作を附す。本居豊頤の作にかゝる著者の小傳、三田蓀光の跋文あり。斌子は下野國間々田の人、藏六の女、三思と號す。明治元年に生れ同二十五年歿す。

峰月百首 一 卷

大槻峯子

詠草の中百首を撰す、明治二十六年上木す。○峯子は大槻文彦博士の伯母。

宗武公夫人詠草 寫二卷

大河内 まつ子

本庄子爵夫人の詠草、巻頭「年浪は流れもたてず水の上も氷りしまゝに春風ぞ吹く」以下。原本本庄子爵家にあり。

難四之可他延 一 卷

三條實美

公の歿後、御歌所長高崎正風の撰べるもの。東久世通禧の跋あり。別に部立を設けず、下巻は鄙にさすらへしほどの歌どもと題して、維新前山口及太宰府に謫居中の詠を載す。原本は西潮遊草といひ三卷あり。その中より撰び出でたる由凡例に見ゆ。集名は公の號梨堂に因み、梨の片枝と命じたるなり。「出づる日の方を仰ぎて打むせび涙ながらに世を祈るかな」「大君はいかにいますと仰ぎ見れば高天の原ぞ霞こめたる」「わがいさを國の御柱わが命世の長人とまもれこの神」の如き維新史と共に朽ちぬ名作あり。明治二十六年上板。○實美は維新の元勳、天保八年に生れ明治三年太政大臣に陞る。明治十七年公爵を授けらる。二十二年總理大臣となり、二十四年正一位に叙せらる、同日薨す。

張弛軒詩歌集 寫一卷

大鹽正路

歌集は柳辨春「通ひくる風のまに／＼なびきつゝ春の色そふ青柳の糸」以下。男正和、門人小田切正盈校して上板。詩の部は双峯と題し、小林協撰みて宗宗望伯の箋をかゝげたり。◇正路は常陸笠間の人。牧野侯の重臣、義卿と號す。時習館の教授となり、後には輪王寺宮に仕へ、明治二十六年歿す。年八十六。

金陵いろは歌 寫一卷

奥山家憲

「醫は意なり意といふものを會得せよ手にも取られず畫にもかゝれず」以下現代語を用ひて詠める歌金陵漫筆の中に收む。家憲は伊勢の人。

杉屋遺稿 小一卷

三本貞健

笹村良昌の序あり。門人島田正章等の撰みて明治二十六年出版せるもの。◇貞健は前田夏蔭及伊東祐命に學ぶ。

落穂集 一卷

山田武甫

その遺詠を續歌學全書十一編に收めたり。武甫は政治家にて、歌は佐々木弘綱の門。明治二十六年歿す。

蓼生園歌集 三卷

中村良顯

上には四季、中には戀、長歌を、下には文章を載す。伏見宮文秀王の序、本居豊顯序、吉田業忠の跋あり。卷頭「あまの戸のしらむ方より春立ちて心になびくうす霞かな」以下新古今風の歌多し。集名は赤穂の出身なるより蓼の字を負ひたる家號による。二十七年上梓。◇良顯は良臣及加納諸平に學ぶ。萬葉集學のちかみち・蓼生園歌談・蓼生園拾玉集等は成りしや否やを知らず。明治三十三年歿す。年七十二。

桃屋歌集 二卷

渡邊壽

明治二十六年出版。部立あり。壽は甲斐の人。

和可葉園集 一卷

平井言滿

鈴木重嶺の序を加へ、嗣子敏明治二十六年出版。「思ひおくことはなけれど別るゝはさすがに惜しきこの世なりけり」の辭世あり。◇言滿は東京の人、若葉園と號す。明治三十六年六月歿す。

雁のゆく方 一卷

永井直道

藩智忠元の序あり。明治二十六年上木。四季等の部立によりてその詠を集む。山階宮見親王の題歌、近藤芳介の序を請ひて、明治二十七年上木。終に猪熊夏樹の饗祭祝詞を載せたり。その傳となすに足る。◇光子は河本延之及野々口隆正に學ぶ。二十六年歿す。年七十八。

いしみのみづ 一卷

石川光子

百ちぐさ 寫二十六卷

立花鑑寛

四季部立を設けて年々の詠を集めたるもの。中に井上文雄加點の歌多し。嘉永三年より明治二年までの詠一萬二千九百二十五首に上る。立花伯爵家に稿本あり。大正の御代に至りこの中より千七十首をぬき部立して嗣子寛治伯出版す。◇鑑寛は弘化三年鑑備卿の後をうけて、十二代の柳河藩主となる。嘉永七年二十六歳にして沖津の守衛にあたりし時の飛雛の道草といふ(紀行)を附録とせり。

隨風集 一卷

毛利元蕃

徳山侯の集にて、逝去の後嗣子元功之を撰び、毛利元徳公の題辭を加へ、明治二十七年上木す。巻頭「とぶ火野の春まだ浅き雪ふみて心のどかにあさる田鶴かな」以下、○元蕃は徳山藩主、幼名廣篤、天保八年家賢を襲ぎ淡路守と稱す。明治四年卒す。

梶の花 三 卷

小出 榮

雪月花三卷とす。春夏を雪、秋冬を月、雑を花に充つ。終に文詞數篇を載す。即吟多く、飄逸の歌風なり。「我が爲に水波む妹があさかげの瘠せたる姿見れば悲しも」はその得意の吟といふ。「あまりにも取あらせじと思ふにぞ玉は小さくなりけるかな」「かちならば田中の畔もゆくべきを急ぐ車のまはり道かな」の如きその作風を示すもの。門人岡本光海の序あり。明治二十六年出版。○榮は濱田の士。瀬戸久敬に學ぶ。後御歌所主事並に寄人となり、明治四十一年歿す。年七十八。新味を帯びたる歌をも古風をも巧に詠じたる人。

梶の花續篇 二 卷

同

須川信行の序を加へ明治三十一年出版。

梶の花後篇 二 卷

同

山縣有朋公の序あり。下卷には梶園存菴と題し翁の詩を收む。明治三十五年上板。

松屋集 一 卷

小林 大茂

面白き輕口の歌多し。飯田年平の序、本居豊頤の跋あり。足立正聲小傳をつくる。明治二十七年上木。○大茂は鳥取の人。松屋と號す。衣川瓊齋の門、明治三年歿す。年七十五。

倭文能屋集 一 卷

上木 清成

萬葉調の歌多し。近衛忠熙及木村正辭の序、吉島斐三・富田豊彦の跋を加へ二十七年出版。○清成は飛驒の高山の人。田中大秀に學ぶ。通稱清九郎、春翁と號す。清成は法號なり。ならのしをり二十六卷の著者。

小中村清矩家集 寫二 卷

その自筆詠草に本居豊頤の評を朱書せるもの。東京帝國圖書館にあり。明治二十四年頃の作多し。集の一部分なるべし。「ありて世のはては我身をおくつき」ところとしめし露の玉床」の辭世あり。○清矩は伊能頤則の門人、律令制度の學に委し、學士會員に擢ばれ、文學博士となる。明治二十八年歿す。年七十四。家を陽春廬と號す。

水屋集 一 卷

久米 幹文

歌文全集にて歿後一周忌に出版せるもの、中に長歌少からず。本居豊頤の序、小杉楳村の跋あり。首に「たふさぎに誰かはかくるもろこしの虎てふ神をうつはぎにしての」懷紙を添ふ。從軍行をよめる「負ふ征矢をたばさみもちて見さくれば弓張月に雁なきわたる」名所夕立をよめる「夕立は筑波芦穂の山づたひけふも常陸の國めぐりする」碁をよめる「白川に黒川の水をせきかけぬいづれの瀬よりかちわたらまし」の如きその作風を見るべし。○幹文は水戸の人。水屋と號す。本居内遠及平田篤胤に學ぶ。維新の後第一高等學校の教授たり。明治二十七年歿す。年六十七。歌に書に碁にすぐれたり。

嵯峨野の花 一 卷

津崎 村岡

百首類を見よ。

松のしづく 一 卷

松尾たせ子

三五八

信濃の勤王家にて、集中憂國の歌多し。明治二年に成る。「身につもる憂さは忘れて君が代に浪立たぬ日を祈りくらしつ」今の世に誰れくまさらむ湊川きよく流れし水の心を」等その詠風を知るべし。○たせは信濃の人、淳齋の妻。明治二十七年歿す。年八十四。後勤王の功により正五位を贈らる。明治三十七年清水謹一の著作、松尾多勢子傳松のほまれの中に收む。

わしの山集 一 卷

山縣有朋夫人

山縣大將夫人の歌を佐々木古信の撰びたるもの。巻頭「軒ちかき松より春や立ちぬらむみどりに匂ふ朝かすみかな」以下。集名は夫人の嘗て詠まれたる「鷲の山分入る道は遠けれど頼む心をしをりにはせむ」の詠による。明治二十七年古信の序及公の歌を加へ、嗣子山縣伊三郎上木す。

田中美喜子詠草 寫三卷

川落葉・初冬時雨・寢覺霜三冊あり。川落葉の巻首、「くれなるの帯と見えけり飛鳥川ふちせも見えず紅葉流れて」以下。泊瀬詣の記の著あり。明治二十七年歿す。年六十一。

御巫清直詠草 寫十五卷

天保二年より明治二十七年に至る。中に天保二年二十歳の時の詠草を春秋詠草といふ。自序あり。文の終に「月の深き匂は分かねどもなほすがたき春秋の空」の一首を加ふ。同三年の集を阪樹葉艸紙といひ、四年の集を柳林拾葉といひ、五年の集を瀧故餘情といひ、六年の集を作歌備忘といひ、七年の集を和心群載といひ、八年の

集を花月漫吟といひ、九年より十二年に至る集を耳袋といひ、天保十三年より嘉永二年に至る集を鶯蛙集といひ、嘉永三年より安政三年に至る集を捧國探祭といひ、安政四年より文久元年に至るまでの集を覆醬紙料といひ、文久二年より明治元年に至るまでの集を不猷感鬼といひ、明治二年より同十八年に至るまでの集を列商刻羽といひ、十九年より二十七年に至る集を勾江破鼓といふ。終に雨のはれたる夕武藝山の櫻をみてよめる歌あり。稿木山田市御巫家にあり。○清直は伊勢の人。本居内遠及足代弘訓の門、神宮の禰宜となる。文化九年に生れ明治二十七年歿す。年八十三。

百二十首詠 寫一卷

御巫清直

巻首に「さきはひを入れてもとや天地の袋ゆたかに春の來ぬらん」以下百二十首を收む。清直の正八位權禰宜時代の作なり。

眞爾園家集 一 卷

大國隆正

自ら集め置ける花なき花を始とし、門人の輯めたる師のおもかけ等の諸書より、千百七十七首を輯めて、加部嚴夫の部立せるもの。原本八卷學習院にあり。福羽美靜及嚴夫の序を加へ、明治二十八年上木す。續歌學全書十一編には抄して載せたり。

ますみのかけ 一 卷

徳川鏡子

三浦弘夫の序あり。明治二十八年上木。集名はその名に因む。

柳の露 二 卷

小池道子

三五九

四季等の部立を設け優雅なる作を収めたり。末に文詞二篇を添ふ。高崎正風の序及自跋あり。明治二十九年上木。續歌學全書十二編にも收む。◇道子は高崎正風の門。現に掌侍たり。

利根の舎遺稿 一 卷 青野賢佐

下總の人久米幹文門下の利根舎の集にて彈琴緒の序を加へ、明治二十九年出版す。

小自在庵詩歌集 一 卷 南圓釋理準

美濃の人。詩は護國赤羽の流を學ぶ。仕官の心なき人として脱俗の歌多し。孫の理英理賢の輯めて明治三十年に出版せるもの。

觀雲亭家集 一 卷 加藤雄吾

鹿兒島の歌人。著書も多し。二十九年上版。後枯尾花の中にその書及集を收む。

戸澤正實公詠艸 寫二卷

明治の始頃より二十八年までの作を收む。卷頭「九重のみこやの空は長閑にて御代あきらけく春は來にけり」以下。白筆稿本戸澤子爵家にあり。◇正實は新庄藩主。正令の子。中務大輔と稱す。元治元年四位に叙す。勤王の功あり子爵を授けられ二位に叙せらる。明治二十九年歿す。年六十五。

繼齋集 二 卷 木村正辭

上卷は歌、下卷は別集文を載す。明治廿九年上板。後集一卷、明治四十四年萬葉美夫君志二卷完成記念祝賀の爲に出せるもの。佐々木信綱氏の跋に見えたる如く、古今もしくは新古今を準とせる歌風なり。

廉堂遺稿

合一卷

幡野刈艸

旗野古樹

旗野十一郎の先代樹古翁の遺稿にて、廉堂遺稿は詩、幡野刈艸は歌稿なり。中に地租改正の事を祝ひ奉る長歌、誥田原聖開をよめる歌などあり。夫人小川氏の遺稿を附録とせり。明治二十九年旗野養織上版す。◇古樹は越後國蒲原郡安田村の人。明治十四年五十三にて歿す。

柳の一片 二 卷 伊藤祐命

門人中島歌子の撰べるもの。高崎正風・小出榮の序を加へ、明治三十年上木。◇祐命は濱田の藩士。通稱健三郎。前田夏蔭及加藤千浪に學ぶ。高崎正風に知られて御歌所寄人となる。明治二十二年歿す。年五十六。

回水園集 一 卷 中島宜門

門人小山氏編む。湯本文彦の序、新貞老の跋を加へ明治三十年上板。◇宜門は鳥取の人。本姓幸田氏。文化四年に生る。衣川瓊齋・伴信友及齊藤彦磨に従ふ。稻葉和歌集の撰者。明治二十七年歿す。年八十八。

芳宜園集 二 卷 毛利元徳

その草稿二萬首のうちより井關美清・佐々木古信が若干を撰び、有栖川宮の題辭を乞ひ、近藤芳介の跋を加へて、明治三十年上木。◇元徳は萩藩主、初名廣封、中比定廣と改め後元徳といふ。文久三年左近少將となり、維新の後、議定官となり従一位勳一等公爵を授けらる。明治二十九年歿す。年五十九。

補増 蓮月集 一 卷

大田垣蓮月

あまのかるも、鴨川集・蓮月式部二女歌集・青藍歌集・千船集・名所歌集・玉藻集・武藏集・探風歌集・清渚集より高橋富兄の抜けるもの。歌數四百七十。明治三十年出版。

海宇遺珠

一 卷

宮原積

門人田中登作の集めたるもの、部立なし。歌數百六十一首、詩七十七首を收め、明治三十年出版す。◇宮原積は鳥取藩士。子淵と號す。明治の初、地方官たり。

石竹集

一 卷

吉田健次

廣島の人、嬰麥園と號す。高橋殘夢の門。井上喜復の序を加へ明治三十年出版。

夏の露

一 卷

田中鼎輔

田中鼎輔の遺稿及夏の哀悼の作を收む。黒田清綱の序を加へ、明治三十年上板。遺稿の首は「新玉のとし立つけさのほぎごとをまつ鳥にこそうたはれにけれ」の歌あり。

市村章家集

寫一卷

部立を設けて「春立ちて嬉しきものは谷の戸の曙にきく鶯の聲」以下の詠を收めたるもの。慶大圖書館に一本あり。輯者渡邊度水氏。◇作者は前橋の人、尾高々雅の門人。

戸隱舎遺稿

寫一卷

長谷川昭道

信濃松本の人、皇道主義の著者、短歌凡そ百首、長歌數篇、中に黒船の來りし時慷慨の餘よめるは八百句に及ぶ長篇あり。後、孫飯島忠夫收録す。◇昭道は明治三十年歿す。年八十三。

大願道人草稿

一 卷

原實雄

首に歌論めきたる説を擧げたり。歌はその師加納諸平の風を摸して一かどある面白きさまを庶幾したるが如し。例へば「小草ふむ奈良の都路春たけて鹿のそびらに櫻花ちる」「山賤が杉苗うる袂より白雲たちてほととぎす鳴く」「あさな〜なづる乙女が黒髪もわらもてゆへる山の奥かな」の如きその佳作なるべし。短歌よりも長歌すぐれたり。明治三十年出版す。◇實雄は和歌山の人、柿園門下、明治五年に歿す。

朝日商豆家集

一 卷

歌數凡そ五百、部立あり。明治三十年上木。◇商豆は常陸國河内の人。鈴木重胤の門。

もくず集

一 卷

花房端連

部立を設けてその詠を集む。明治三十年有賀長鄰の序を加へ、嗣子直三郎上木す。同卅二年歿す、年七十六。

瀧園集初篇

二 卷

黒田清綱

初編は明治三十年に、二編は同三十五年に上板。門人菊池武則の序、及三浦千春の跋あり。遺稿の作多し。◇清綱は天保元年に生れ、島津齊彬に仕へ、維新の後樞密顧問官に任じ子爵を授けらる。歌は八田知紀の門下にて家號を瀧園と號す。高崎男の後をうけて御歌所長となる。大正六年に薨す。年八十九。

菱池遺稿

一 卷

子豊彦の輯むるもの。伊東竹園の序あり。末に久我建通以下人々の追悼の詩歌俳句を收め、又先考行狀を添ふ。卷首には重野安禪の墓碑銘を載す。◇菱池は豊後の宇佐の人。明治三十一年歿す。年六十二。廣瀬淡窓・帆足萬里

及平田篤胤に學ぶ。

いとさくら 二 卷

九十賀の記念の爲とて、詠草一萬首の中千餘首をぬき部立す。高崎正風の序、嗣子篤鷹の跋あり。書は植松有經が筆にて、明治三十一年上木。書名は京都の舊邸の名高き垂糸櫻に因む。「めづらしく伊豆の大島雲はれて煙ばかりぞ立ちのこりたる」「夕月のほのめく窓にうつりけり軒端をかよふかはほりの影」の如き、なだらかなる歌風なり。○忠熙は文化五年に生れ四朝に歴仕し、従一位關白左大臣となる。維新の始致仕す。明治三十一年九十賀を開く。同三十二年薨す。翠山は安政六年一時落飾せられし間の號なり。

近衛忠熙

幸の屋歌集 一 卷

桑名の人、富樫門下の中川氏が家集にて、小中村義象・三浦弘夫の序、三崎民樹の跋を加へ、三十一年出版。

中川清之

わすれぐさ 一 卷

短歌、長歌、今様、文章に部立す。竹柏園門下の秀才にして夭折す。東久世通禧の序、撰者佐々木信綱の歌を始に載せ、終に一周忌に於ける手向草を添ふ。明治三十一年出版す。

島田愛子

落葉集 一 卷

明治三十一年佐々木信綱氏撰す。始に佐々木昌綱氏の手に成る林子の傳あり。不遇にして讀者の同情を惹くべき一生を叙す。和歌部、文章部と分ち、末に追悼集を載す。○林子は茨城縣結城郡石下町の人。明治三十一年に歿す。年二十八。

關井林子

難波のつと 一 卷

神門の大家洪川が故郷難波に母を訪ねし歌、その他の詠五十四首を收む。三十一年川井賢岑の序を加へて出す。中に「雲とただふたり住居の櫺の戸を我が友がほにあくる松風」といふ秀吟あり。○洪川名は宗愷、虚舟と號す。文化十三年に生る。圓覺寺に居る。明治二十五年歿す。年七十七。

今北洪川

竹のひとふし 二 卷

明治三十一年その七回忌に方り、成久王の題辭、高崎正風の序。嗣子宗徳の跋を加へて上木。歌は鈴木良一の撰書は大口調二。○宗城は舊宇和島藩主、元治の頃左近少將に任ぜらる。維新の時議定官となり後民部卿に大藏卿を兼ね、侯爵を授けられ従一位に叙す。明治二十五年薨す。年七十六。

伊達宗城

彩園遺稿 一 卷

小見鑑三郎の編みて、明治三十一年に上木せるもの。○春隆は尾張の津島の神官にて、熊谷直好及八田知紀に學ぶ。繪を善くし、その號を彩園といふ。明治十七年歿す。年六十八。

羽鳥春隆

琴屋集 一 卷

飛騨の田中大秀門下の永田直訓の集にて、中に茶器の歌、物名歌多し。卷頭「何となく樂しかりける梓弓春まちはたるけさの心は」以下、三十一年本居豊顕・鈴木重嶺等の序を加へて高山町にて出版。弟道俊の跋あり。

永田直訓

名越舎集 二 卷

短歌及長歌を收む。短歌には教訓、詠史、相摸歌等の部あり。長歌は祭祝、教訓、祝賀、追悼、懷古、述懷、書贊、雜

權田直助

に分ち、井上頼園の序を加へ、明治三十一年出版す。又埼玉縣教育會より出せる權田直助翁詳傳にも收む。

落葉の塵 二 卷 中西久受

細辻昌雄の序、及自叙あり。明治三十一年上木。◇中西氏は世々平野神社祠官たり。久受は桂園門下にて家の號を薄墨社と號す。明治三十一年歿す。年七十九。

墨水餘滴抄 二 卷

墨水餘滴は黒川眞頼翁の家集なり。一部分を抄出せるもの。明治三十一年出版の續歌學全書十二編に收む。

をだの落穂 寫三卷 松井清蔭

一卷は春夏の歌百五十七首、二卷は秋冬の歌二百九十首、三卷は戀・雜・釋旅・賀・哀傷・物名・今様合せて百五十三首及長歌三篇を收む。明治三十四年勝野秀雄の序あり。一本嗣子松井安三郎氏藏す。◇清蔭は名古屋の人、氷室長翁の門人、殘月樓と號す。知事及愛知縣參事又太政官太主記などに任ぜられ、明治三十一年歿す。年六十二。

松廼舎集 二 卷 吉川順子

岩國藩王吉川經幹卿夫人の家集。井關美清の跋あり。明治三十二年上木。◇夫人は近藤芳樹に學ぶ。

鷺夫遺稿 一 卷 大倉鷺夫

花月道人の遺詠萬葉調の歌多し。明治三十二年その五十年祭に孫女清水あやみの上版せるもの。人々寄贈の歌、並に夫人古知子の遺稿を添へたり。『大海は四方にあれども焼太刀の土佐の荒海の月にしかめやも』『きのふまでかへりみもせぬ古塚に今日は吾子の相並び立つ』の如きその佳作なるべし。◇鷺夫は土佐の人、名を高權。本居

大平に學ぶ。嘉永三年歿す。年七十一。

秋園集 一 卷 櫻井武雄

門人矢島作郎輯め、舊藩主毛利元功子及黒川眞頼の序を加へ、明治三十二年上板。卷頭『花をまつ人の心に急がれて年のうちより春や立つらむ』以下。中に『ことしおひの竹はまがきを出でにけり一夜のほどにひとよ伸びつ』『富士のねを軒のものとなながむらむらやましきは原の里人』の如き佳作あり。◇武雄は徳山の藩士にて春日潜庵及賀茂直兄に學び徳山藩校の教職に任ぜらる。

東閣遺草 一 卷 稻葉正邦

その詠草の中百四十餘首を歿後一年祭に方り松浦詮氏の撰びて、稻葉家より親族知友に頒ちたるもの。卷頭に松上鶴をよめる『住よしと宿やしむらむ色かへぬ松の梢を千代の友づる』の色紙を添へたり。◇正邦は澁藩主、嘉永五年長門守に叙せらる。明治三十二年卒す。年六十七。

桂廼舎倭歌詠草 寫一卷 松平輝聲

高崎侯大河内輝聲の集にて、卷頭初春鶯をよめる『春はまだ若枝の梅の花笠をきつつやしのぶ黄鳥の啼く』以下百九十首。自筆本大河内輝耕子爵家にあり。

衆議詠草 寫一卷 同

『澤水にうつろふものは草の露の玉と亂れて飛ぶ螢かな』以下四十首。衆議とは人々に示したるより負はせしなり。◇輝聲は始輝照といふ。萬延元年家督を續ぎ左京亮といふ。桂園と號す。明治十五年卒す。

敷田年治

家集部

百園雜纂 五卷
一、二の巻は長歌、三は文章及祝詞、四五の巻は短歌を収む。三十二年七月門人正田修庵の序を加へて出版す。百園雜纂五帙の中の第一帙なりと見えたり。○年治は河内の人大阪に住す。祝詞辨蒙・古事記標註・播磨風土記又音韻啓蒙・假名沿革等を著す。帆足萬里の門。文久二年和學講談所の教官となる。明治卅五年歿す。年八十六。

磐之屋集

一卷

丸山作樂

養子丸山正彦輯めて傳の後に加へたり。歌は全部片假名にて記し、右傍に漢字を細書せり。慷慨にして激越の調多し。征韓の企にて罪を得し時の作「八十船のさをかちほさず實きこし神の御代こそかしこくありけれ」「古もかゝる例はありなれの川さかさまに流れやはする」「思ふこと成しもをへすばから國の虎ちふ神に骨かませまし」の如き作あり。明治三十年出版す。○作樂は島原の人、神習處又磐之屋と號す。漢學を鹽谷宥陰に、國學を平田篤胤に受く。元老院議員、貴族院議員などとなりて明治三十二年歿す。年六十。

春山弟彦詠草

一卷

集の中短歌百五十首を嗣子作樹の抄して、一周年に頌たむとして、明治三十二年六月印刷せるもの。○弟彦は姫路の人。前田夏蔭に學ぶ。語學に長ず。明治三十二年に歿す。年六十九。

落葉集

一卷

福田行誠

後落葉集

一卷

同

明治三十二年發行の行誠上人全集に收む。落葉集に收むるもの二百五十首。自叙あり。後落葉集には五百九十餘

家集部

首又釋教百首中に「いたづらに枕をてらす燈火も思へば人の油なりけり」の名吟あり。近世僧侶歌人の中最も優れたる歌人にて、脱俗高遠の徳風を偲ばしむる作あること世に定評あり。「鳩の杖つくく見れば昔わが土筆つみたる野邊にぞありける」「高野山苔のとぼそは靜にて音もきこえず春雨のふる」「我袖の玉と拾ひてつゝまばや打つけられし石も瓦も」の如きこれを證すべし。○上人は近世の大徳。智恩院の管長に推さる。歌は飯野厚比の門。明治二十一年遷化。年八十三。

巽嶽歌集

一卷

松平茂昭

明治三十三年松平茂昭侯の十年祭に方り、嗣子康莊父の集中より六百六十首の歌をぬきて、上木せるもの。○茂昭は越前福井の藩主。春嶽公の子、安政五年家督をつぎ、元治元年四位少將となる。後從二位に叙せらる。明治二十三年歿す。

のこりかを李

一卷

前田利嗣

明治三十四年侯の一周忌に方り前田家の囑により中島歌子侯の詠を撰び、高崎正風の序を加へて上木せるもの。○利嗣は金澤藩主慶寧の子、明治十七年侯爵を授けらる。明治三十三年歿す。

佐久良園集

一卷

南部晴景

南部正三位の集にて鳥谷部紹風の集むる所、本居豐顯の序。江刺恒久の跋を加へ明治三十二年出版。

ひさしぐさ

一卷

松井耕藏

その詠草より然るべき什を女孀高安月郊の撰み出で、明治三十三年出版せるもの。○耕藏は妙音院宮に仕へ後正

家の集部

四位に叙せらる。明治三十三年歿す。

梅屋歌集 一 卷

佐々木古信

「年立てば心からにや聞きときき見とみるもの樂しかるらむ」以下。四季戀雜の順に列ぬ。山縣有朋の題歌、黒川直頼の序、三田葆光の跋を加へ、明治三十二年上版。古信は長門の人、文政八年に生れ、近藤芳樹に學び梅屋と號す。明治三十二年歿す、年七十四。

齋垣内集 二

岡直盧

上卷には古風の長短歌、下卷は中古風の歌を集めたるもの、その編輯の體裁は上卷は萬葉集の部立により、下卷は古今集の部立に従ふ。東久世伯の題辭及自序、藤田安良の跋を加へて、明治三十三年出版。萬葉の風骨を得たる作多し。直盧は岡山の人。同地の中學に教授す。柴田有微・小野節などを友とし善し。

蝶園遺稿 一 卷

久間有隣

部立あり。「かへるさに遠きほどこそ知られられ花にうかれし春の山路」の如き詠あり。明治四十二年男芳文の序を加へて出版す。有隣は弘化二年肥前武雄に生れ伊達千廣・有賀長鄰・中村良顯等に學ぶ。三十三年敦賀にて歿す。

つゞみのしづく 一 卷

増田春祺

部立なく片假名交にて記す。三輪經年の序を加へ明治三十四年上木。同好に頒つ。「けふはいさよその花をも見にゆかむ瓶のさくらに宿をもらせて」「かへる人今來やと待つ我門をまた過ぎゆきし春の音かな」の如き新しき

境をよみたるあり。春祺は名古屋の老儒。

志能夫久斜 一 卷

師岡正胤

勤王の念に驅られ、文久三年同志と共に等持院に入り、足利尊氏の木像の首を取り出で三條磧に梟せし咎により信州上田藩に幽せらるゝ六年、その間によめる詠草を輯めたるもの。長篇多し。明治三十四年出版。

もとのしづく 一 卷

三宅龍子の著はせる野村望東尼の傳に、向陵集拔萃を載せたり。明治三十四年上版。續篇一冊にはその上京日記、及姫島日記中の夢かぞへを載す。

由良牟呂集拾遺 一 卷

大熊辨玉

小川重浪・關藤枝が大熊辨玉の短歌を拾輯せるもの。續歌學全書十一編にはこれより抄出して出したり。

梅の下風 一 卷

梅田利和

本居大平門なる梅田利恭の集にて翠信亭主人の序あり。淺野三然等撰ぶ。その子梅田利和の明治廿四年に上板せるもの。利恭は美濃の人。

小田の落穂 一 卷

飯田守平

伊豆の狩野の人。その遺詠を孫康雄が三年祭に方り、時の人々の手向の歌をも加へて三十四年に出版。

秋屋集 二 卷

本居豐顯

秋屋集拾遺 二 卷

同

家の集部

秋屋集は門人平尾八束輯め、高崎正風の序、及編者のはしがきを加へて、明治三十五年に上板し、秋屋集拾遺二卷は本居清造編みて、嗣子長世氏大正三年に發行せり。上卷は短歌、下卷は長歌及文章を収めたり。拾遺の巻頭には源氏物語の卷々の畫の上に押せる色紙の歌一葉を載せたり。

しのぶのつゆ

一 卷

八田知紀の三十年祭に方り嗣子三郎氏が高崎正風男に乞ひて、その家並に高崎・黒田・菊池・下條等の門下の家に藏せる歌百五十首を集め部立して知己に頒ちし卷子本なり。始に明治八年兩陛下が翁を悼ませ給ひし御製御歌を載す。明治三十五年刻成る。

櫻山集

一 卷

會津の山川浩の歌を高木盛之輔の編めるもの。集名はその山莊所在地なる白河の山名に取る。四季以下の部立あり。歌數八百餘。中に詠史もあり。近江八景、函根八景等の詠もあり、留任・非職・落撰の如き新題もあり。谷干城の序を加へ明治三十五年印刷。

橋道守詠草

一 卷

『とけ始めし軒のしづくのおとづれしけさ新しき鶯の聲』以下部立して收む。ある人に上りし稿本と見ゆ。◇道守は舊姓吉田氏、橋冬照の養子となる。明治三十五年歿す。年五十一。明治歌集の撰者。

半代集

一 卷

部立あれど歌數多からず。明治三十五年出版の老伴の中に收む。◇直は越後長岡の人、露の屋と號す。

柳野直

まきのしづ校

一 卷

高木宗矩

歌の外俳句及文章を収めたり。中に歌の部は南露漫録と外題せり。歿後二十一年に小杉樞郎の序を加へ明治三十五年出版す。◇宗矩は蜂須賀家の臣、眞木廼舎と號す。明治十五年歿す。年六十七。

山田のみなし穂

一 卷

山田正秋

敦賀義書第十二輯に收む。自撰の集なり。明治四十年鳥碧堂の序を加へて出版す。◇正秋は通稱市太夫。文政三年越前今庄に生れ、石塚資之に學ぶ、明治三十五年八十三にして歿す。

黃花餘芳

一 卷

菊地時子

菊池侃二その母の詠を撰み、中村良顯の序、自家の竹の繪及その孫某氏の跋を加へ、明治三十三年上梓せるもの。林顯之の集にて、『あらたまる年の初日に畏みて雲井はるかに仰ぎ見るかな』以下。明治三十六年高橋富兄の序を加へ、明治六年の禪太日記を附して出版。奥村榮滋氏の題歌あり。慶大本。◇顯之は加賀の人、明治十一年金澤製糸場長となり、明治三十三年に北海誌料を著す。

林顯之

散閑延久佐

一 卷

蓬室集

一 卷

飯田武郷

短歌・長歌及文詞を收む。本居豊顯及小杉樞郎の序を加へ、明治三十六年孫季治氏出版。◇武郷は信州諏訪の人、平田篤胤の門人。蓬室と號す。日本書紀通釋の名著あり。明治三十四年歿す。年七十四。

淵の玉藻

二 卷

黒田長知

又黒田^二位集ともいふ。巻頭「梓弓やしまの浪も治りてのどけきけさの初日影かな」以下。四季戀雜の部立を設けて集む。撰者時枝誠道、筆者植松有經。有栖川威仁親王殿下の題辭を請ひ、嗣子長成侯及本居豊顕の跋を加へ明治三十七年上刻。◇長知は福岡藩主、二位に叙せらる。歌は井上文雄及本居豊顕に點を乞はる。號を如淵といふ。よりて集の名とす。

猶書遺稿 一 卷

中村久吉

秋子、琴子二人が父の遺稿を集め、之に人々の追悼の歌を合せて明治三十六年に出版せるもの。

馨山詠草 二 卷

仙石政固

萬葉調の歌風にて、嗣子政敬子父の詠草中より約千首を抄し、春日敬之の跋を加へ明治三十六年上刻せるもの。◇政固は出石藩主、明治二年大學小監となり、藩知事に任ぜられ、後正三位に叙せらる。詩集に馨山存稿あり。馨山又晩翠と號す。歌は海上胤平の門。

馨山詠草續編 一 卷

同

大正二年の春その師海上胤平の序、平塚義平の跋を加へて上梓。「海若の浪も靜けし春立ちてかすみそめぬる大八洲國」『しまき吹く浪路を見れば舟人のゆきき危しえぞの荒海』などその歌風を見るべし。

かゞしのや集 一 卷

池袋清風

明治十四年より三十三年までの歌を、年次順に集めたるもの。鎌田正夫序、及編者正宗敦夫氏の手になる作者の小傳あり。明治三十六年出版。中に「見るが中に船のともし火數そひて神戸の港日は暮れにけり」「露ばかり散

ると思ひし秋萩の花ものこらすなりにけるかな』の如き作あり、◇清風は薩摩の人、鎌田正夫に學ぶ。同志社に教鞭を執る。雜誌國民の友に和歌に關する説を載せたり。淺瀬のしるべの撰者。

松通した梨 一 卷

加藤安彦

自ら部立を設けて撰ぶ。家號松園に因みて書名とす。終に吉野日記及謠曲をよめる歌、三番叟より淡路まで二百餘首を載す。明治三十六年上木。

松蔭 二 卷

植松茂岳

部立あり。男有經の撰ぶ所、明治三十七年上木。安政五年幕府の嫌疑により幽せられし時の歌もあり。◇茂岳は尾張の人、有信の養子となり、明倫館に教授す。明治九年歿す。年八十四。

秋風集 二 卷

野呂瀨秋風

未亡人曉月尼の夫の五十年に方り、内田成之の集めたる本によりて撰びて出せるもの。明治三十六年尾崎六夫の序、植松有經の跋を加へ、翌明治三十七年上木。巻頭元日の明け方熱田の宮に詣でかへり來て詠める『今朝しもあれ神代の春をとまなひてかへり來にける心地こそあれ』以下。◇秋風は尾張の人、通稱を六郎といへり。植松茂岳の門にして、歌は桂園及長春亭を慕ふ。安政元年歿す。年二十七。

桃臺遺芳 一 卷

飛騨の古川町の人野村健平・佐藤恭郷兩人の遺詠にて、明治卅六年碧桃園主(渡邊)の三十年祭、葦菜園主(佐藤)の三年祭に方り、その遺詠をぬき、人々の獻詠を併せて、明治三十七年に出版せるもの。渡邊章の序あり。

梅園一枝 二卷

上月豊蔭

三七六

攝津海神社宮司に奉職せる二十八年間の所詠中より佳歌を抜きて明治三十七年に印刷せるもの。編者芝崎宗守。首に本居豊頼の記念碑文を載す。同第二集は男爲蔭が明治四十二年その一年祭に出版せるもの。

沖の千重浪 一卷

出島竹齋

部立あり。三浦弘夫の序、及三浦邦雄の筆に成る小傳を加へ、明治三十七年上木す。集名は姓に因みたるなり。○竹齋は駿河の人。静岡市東照宮祠官たり。花の井昌齋の門。

栗の花 一卷

宇田淵

則武正副・須川信行二氏の撰ぶところ、巻頭「立ちかへる年のあしたの初日影くもらぬ御代をそらに知るかな」以下。高崎正風の序、谷鐵臣の跋を加へ、明治三十七年上木。集名は家號栗の舎に因む。○淵は桂宮附の人にて三位に叙せらる。始詩を梁川星巖に學び、後歌に志し、岩倉公の推薦により京都向陽會幹事たること二十年、明治三十四年に歿す。

くものゆくへ 一卷

有馬晴子

有馬伯爵の母堂韶子の志により小出榮がその遺詠より二百首をぬき部立せるもの。巻頭「新玉の年の始に鶯のももよろこびの初音をぞ聞く」以下。有栖川宮威仁親王の題辭。妃殿下の題歌、撰者の序を加へ、明治三十七年その一週忌に出版。○晴子は島津齊宣卿の女、有馬頼永侯の夫人。明治三十六年歿す。年八十四。

萩之家歌集 一卷

落合直文

明治三十七年出版の萩之家遺稿に收む。淺香社を創し新しき歌を唱へし頃よりの詠にて別に部立を設けず「劍太刀さやぎ戦ふ夢さめて見る曉の萩の上の露」以下數百首を收む。明治三十九年に別集となし補正して出版。後十年祭紀念として大正二年版を改めたり。

倭主禮草 合一卷

末永茂世

始のは部立あり。後のは日露戦役の時の詠を集めたるもの。合せて一卷明治三十七年出版す。○茂世は福岡縣の人、笛の舎と號す。八田知紀の門。

楓谷遺稿 一卷

神田楓谷

部立してその詠草より優れたるをぬき勝野秀雄の編めるもの。山本有壽の序を加へ、明治三十七年上版。楓谷は神田鎧三の父。

愚庵遺稿 一卷

磐城平の人愚庵の遺稿を其友、陸羯南集め明治三十七年に上版。詩稿・詠草・巡禮日記・東海遊俠傳、附録に血寫經・愚庵逸事・愚庵十二勝唱和を收む。愚庵詠草は巻頭に頭おろしける頃「鶯の聲ばかりして山寺の春はしづけきものにぞありける」以下。萬葉調のもの多し。○愚庵は俗名天田五郎。常陸の平の人。明治三十七年歿す。年五十一。

雪の舎集 小一卷

相澤朮

佐々木信綱氏撰む。東久世通禧・松平乗承二公の題歌あり。明治三十七年印刷。○朮は越後の人、西尾侯に仕ふ。

藩醫を命ぜらる。雪舎と稱す。明治三十七年歿す。年八十。歌は佐佐木氏の門。四季の山踏の條参照。

神風餘響 一 卷 加藤里治

日露戦役に際し士氣を鼓舞せむ爲にとてよめる詠作に註を下し、又門人の歌百餘を添へ三十七年出版す。◇里治は石川の人。志比能屋と號す。狩屋高輦の門下。尙、志比能屋集の條を見よ。

平賀元義集 一 卷

吉備史談會にて出せる本あり。明治三十六年岡直廬の序を加ふ。同三十九年有元稔發行す。

泣血集 一 卷 姉小路公知

勤王の志篤く文久三年凶徒の爲に殺さる。後明治三十八年高崎正風その遺稿を撰みて泣血集と名づく。姉小路公知公傳中に收む。◇公知は公前卿の子、右衛少將に任ぜられ文久三年薨す。年三十。

芳宜の古枝 一 卷 松浦辰男

門人柳田國男の序あり。附録には紀行、旅路の夢及詠歌十訓を載せ、明治三十八年上板。

雪の舎歌文集 二 卷 秋山光條

一卷は歌の部にて、短歌、長歌、旋頭歌、今様を載せ、一卷は文章の部とす。明治三十八年印刷。始に逸見伸三郎の筆に成るその小傳を載す。◇光條は幕臣にて、後所々の官司となり、明治三十五年卒す。年六十。

鶯栖園小草 一 卷 渡邊重石丸

渡邊甲石丸の短歌、長歌、詩文を集めたるもの。明治三十八年古稀に方り、男伊豆太郎・刀根二郎の編みて關係者に

分てるもの。巻頭「見渡せばかすむ高山みじか山春のこえこし道はしるけし」以下。◇重石丸は豊前仲津の人、豊城と號す。固本策の著者。

新想二百題 一 卷 旗野士郎

幼稚園より老人慷慨に至るまで新想二百題。巻頭「かたことにものいふちこの見習ひて手ふり足ふみ小歌うたへり」以下。明治三十八年出版。

母子草 一 卷 相澤扇子及竹子

相澤龍の妻扇子、相澤英二郎妻竹子兩人の集にて、明治三十八年印刷。

萩園遺稿 一 卷 三浦千春

氏の全集にて、その第一巻は歌集なり、文久以降の所詠を詠草よりぬきて年次に分け出し、長歌をその末に載す。第二巻は文集、三巻は紀行、四巻より九巻までは他の著述なり。昔神の題歌、阪正臣の序、井出今滋の手に成る略傳等を加へ、明治三十九年出版。

梅東百詩 小 一 卷 金井莊之助

その別野に梅をうゑて人々の詩をこひて百詩となし、末に自詠七十八首を載す。依田百川・佐々木信綱の序あり。明治三十八年印刷。◇莊之助は信州上田の人、梅東はその號。

八束穂のつゆ 一 卷 平尾八束

本店豊頭の門人。集名は名に因む。明治三十九年印刷。

詩歌櫻百首 一 卷

櫻花より櫻辭に至る櫻百首にて、卷首に文臯の櫻圖、小野湖山の題字、東久世伯等八家の題歌、詩・序及數氏の跋歌等を加へ明治三十九年に發行す。

洋のえもの 一 卷

四十年夏歐米諸國へ出張せしとき、旅中にて父に送りし歌を集めたるもの。新派の歌多し。◇椿吉は醫學博士。衛生試験所の技師なり。

放懷樓歌集 一 卷

養孫孝豊編み、明治四十年高崎正風の序を加へて上板す。晩年葉山に住みたる頃の作あり。

前田利邕詠草 集 一 卷

明治の始頃よりの詠を収む。前田利満子爵家に一本あり。中に侯の得意の作といはれし「世の塵に汚れし耳をよもすがら洗ひて清き眞清水の音」などの詠あり。◇利邕は大聖寺の藩主、飛騨守と稱す。維新後御歌所參候等となり正二位に叙せられ、大正九年薨す、年八十。

硯堂歌抄 一 卷

始に短歌、後に長歌あり。長歌の部には不二山の歌及人道を詠せるもの二篇。舊藩主龜井茲常伯の序を加へ嗣子逸人明治四十年に出版す。平明の作多し。尙、硯の波の條參照すべし。

櫻園集 二 卷

進藤泰世

那須環

遠山椿吉

芝山益子

福羽美静

新古今調の歌風にて、雜の部には詠史も少からず。三十九年本居豊顯序を加へ、翌年上板。◇泰世は伯耆倉吉の人。飯田年平の門人。

南天莊詠草 一 卷

井上通泰

明治四十年博士が御歌所の寄人となり勅任待遇に叙せられし記念として、二十一年よりの歌百四十六首を門人等の出版せるもの。◇通泰は播磨の人。醫學博士。家を南天莊と號す。

わか艸百首 寫 一 卷

井田秀生

春夏秋冬、詠史、雜の題にて詠める詠を、明治四十年宮内省に奉りたるもの。假名序あり。

山路のきく 一 卷

安東菊子

四季雜の順序によりてその詠を集めたるもの。明治當初の歌人と交渉ある作あり。明治四十年出版。◇菊子は信濃の人、渡忠秋の門人。集發行の當時八十歳。

桐園詠草 小 一 卷

彈琴緒

六十歳の時その詠を撰びたるもの。卷頭、社頭立春「たきすてしうけらの煙うちかすみ八雲の宮居春たちけり」以下。數百首を部立して載す。その嗣愛子の跋あり。有職、故實、歴史、古歌、古文章などによりて詠みたるには歌の頭に〇印を附し、尙その考據を門人の手によりて附録として挙げたり。明治四十年發行。

墨水餘滴 一 卷

黒川眞頼

黒川眞頼の遺稿にて、明治四十一年その一周忌に方り、嗣子眞道の出版せるもの。高崎正風の跋及眞道の跋あり。

その原本は三田藤光の浄書せるものにて、小出繁も一あたり眼を通したるものといふ。技巧なき歌風なり。

董園集 一 卷

十五歳の時よりよめる歌を小杉榎郎氏の撰めるもの。巻頭一月一日「あら玉の年立つけさの心もてわが世のかきり過してしがな」以下四季雜の歌を部立して集めたるもの。杉園主人の序あり。

松のおち葉 小一 卷

松浦辰男の歌を門人武岡豊太郎の撰びたるもの。辰男の序あり。尙武岡のよめる歌を集め、松の下つゆと名づけ合本にて明治四十一年出版。

眞洞居中集 二 卷

自ら輯めおける藝園前集及眞洞居中集を基とし、その他に照合して門人田島春園の撰びたるもの。上卷春、夏の部、下卷秋、冬、戀、雜及長歌、文章の部に分つ。古語を驅使して而も新味に富める歌多し。中に螢によする「ますらをや空しかるべき草がくれ沼の螢の雲にとぶ世に」の如き詠あり。門人元田脩三その年譜を作る。孫岡村俊一、大正十二年に印刷す。元田氏の序あり。◇眞蔭は飛驒の廣瀬町の人。井上文雄、飯田年平、宮原積等に學ぶ。明治四十一年歿す。年六十二。

秋のしづく 二 卷

三宅龍子の輯むる所、明治四十一年上板。◇歌子は林忠左衛門の妻。加藤千浪の門。明治三十六年歿す。年六十二。

竹のしづえ 一 卷

有賀長鄰

部立して短歌を集む。「松ならぬ空の緑もときはにて一しほまさる年立ちにけり」以下。小杉榎郎の序、嗣子有賀長雄及長文の跋あり。明治四十一年に金屬版にて印刷す。◇長鄰は大阪の人、長基の子、文政元年に生れ、明治卅九年歿す。年八十九。

柞の露 一 卷

保科節子

宇和島侯の愛女節子の遺詠を三年祭に方り上木せるもの。明治四十一年高崎正風の序、岩崎寛子の跋あり。◇節子は歌を海野遊翁に學ぶ。明治三十九年に歿す。

はちすのかをり 一 卷

徳川筆子

徳川公爵の第四女にして蜂須賀侯夫人の遺詠。家號運譽舎に因みて集名となす。明治四十一年出版。

竹の舎集 一 卷

佐藤直

部立あり。明治四十一年上板。八十九才までの詠を集む。◇直は保田光則の門。仙臺養賢堂の教授たり。

むらがらす 一 卷

勝野秀雄

四季戀雜に分ち、その後長歌を擧ぐ。末に文章三篇を載す。大正三年その七回忌に方り、嘉永五年出版の桐の落葉を附録とし、杉聽雨の題辭、阪正臣の序を加へ一女若宮正晋氏夫人米子の出版せるもの。◇秀雄は名古屋の人。初名は宗章、文政十二年に生る。桐園と號す。明治四十一年歿す。

我爲我堂遺稿 一 卷

雛田中清

詩歌合集にて、歌の部は短歌百五十五首、長歌二十八首を收む。詩は春濤・枕山・湖山の評あり。歌は旗野櫻坪・本

家集の部

居豊頤の撰にかゝる。「雨はれて珍しげにも飛蝶のあたりはなれぬ姫百合の花」の如き詠あり。始に中村正直の墓碑文を掲ぐ、熊倉操の序、小柳司氣太の跋を加へ、明治四十一年出版。◇中清は越後加茂の人。松溪と號す。明治十九年歿す。年六十八。

塵芥居集 一 卷

菊田 和平

福島の人内遠門下の歌人。明治四十一年其五年祭に孫長四郎輯めて出版。中に歎聲梯山噴火之災等の長歌あり。

濱 久 木 一 卷

徳 富 久 子

明治四十一年八十歳の時、その子猪一郎・健次郎兄弟の集めて出したるもの。◇小山多乎理及佐々木信綱に學ぶ。

貴美滿佐雜詠 一 卷

由 利 公 正

部立して「さほ姫の霞の衣いつのまに春日の山を立ちかくしけむ」以下百五十九首の詠を集む。後その傳中に收めて出版す。◇公正是越前の人、舊三岡八郎と稱す。春嶽公を助け王政復古に力を竭す。明治四十一年歿す、年八十一。正三位に叙せられ、子爵を授けらる。

齋垣内集二編 一 卷

岡 吉 胤

明治四十二年上板。

鹽原詠藻 一 卷

松 岡 辰 男

須靜吟鈔

松諷集初輯の附録にて、明治四十二年門人武岡豊太出版す。須靜とは須磨と靜浦とを合稱せるなり。

家集の部

小出繁翁家集 三 卷

その家集くちなしの花、初篇・續篇・後篇・拾遺四篇九卷の中、詩と文とを除き、同題のものを一つに集めたるもの。中川恭次郎編次して明治四十二年出版す。

竹廼舎歌集 小 一 卷

東 久 世 通 禱

末女三千子の作歌の爲にとて、自詠の中より拔出して一小冊となし、明治四十二年出版せるもの。自序あり。武岡豊太跋を加ふ。◇通禱は通徳卿の子、安政文久の頃國事に奔走し、太宰府に移さる。維新の後重職を經、樞密院副議長となり、明治四十五年歿す。年八十。竹亭と號す。歌は三條西季知に學ぶ。

難 助 集 一 卷

西 村 茂 樹

又泊翁先生歌集といふ。中に「最上川きしの山道春さむみ谷間に氷る雪の一筋」の如き歌あり。泊々叢書に收む。明治四十二年出版。◇茂樹は佐倉の人、安井息軒・大槻磐溪・佐久間象山等に學ぶ。日本弘道會を起す。貴族院議員、學士會員等となり、正二位勳一等に叙し明治三十五年歿す。年七十五。

滋子刀自詠草 一 卷

小杉榎邨夫人の集にて宮本恒夫編みて松園會より出す。附録に軒のさみだれあり。

磐初室歌集 寫 二 卷

阿 部 光 忠

上卷は短歌の部、下卷は長歌の部とす。短歌は詠草二千首の中より約七百首を本居豊頤翁の撰びたるもの。下卷の中には淡河川疏水落成歌、武庫川堤防決潰洪水氾濫之時視察悲慘之狀作歌二篇の如き優れたるもの。阿部壽準